

書

明治四十年七月發行

長野縣五木曾山林學校

校友會

木曾山林學校友會報

長野縣立木曾山林學校 校友會

第七號
第八號



昭和41年11月10日	
資料	
月刊會	
	第18号

木曾山林學校々友會報 第七號 第八號 目次

明治四十年 月 日發行

論 說

渡邊御料局長の演說
三村大學助教の演說
所謂本多博士の赤松亡國論なるもの

雜誌部員速記
上

柴田林學士の講話大要
山梨縣林業一般

高橋博君
小杉二郎君
太田喜代松君
岡戸廣次君

植林の獎勵
森林火災と愛林思想の必要

和田宗吉君
竹内房太郎君

學 術

面積計算定本に就て
丸太挽きに就て

太田喜代松君
乳川教諭
米山教諭
宮崎次朗君

雜 錄

秋田の林業
滿洲の森林
水力利用と森林

農商務大臣の演說
本多林學博士談
日清合同村木會社

文 苑

長歌、短歌、俳句、詩、

詞 藻

片駒場便り
自然を愛する者は幸福なり
雪の隣友人を訪ふ

高橋博君
高橋博君
雲陰生

通 信

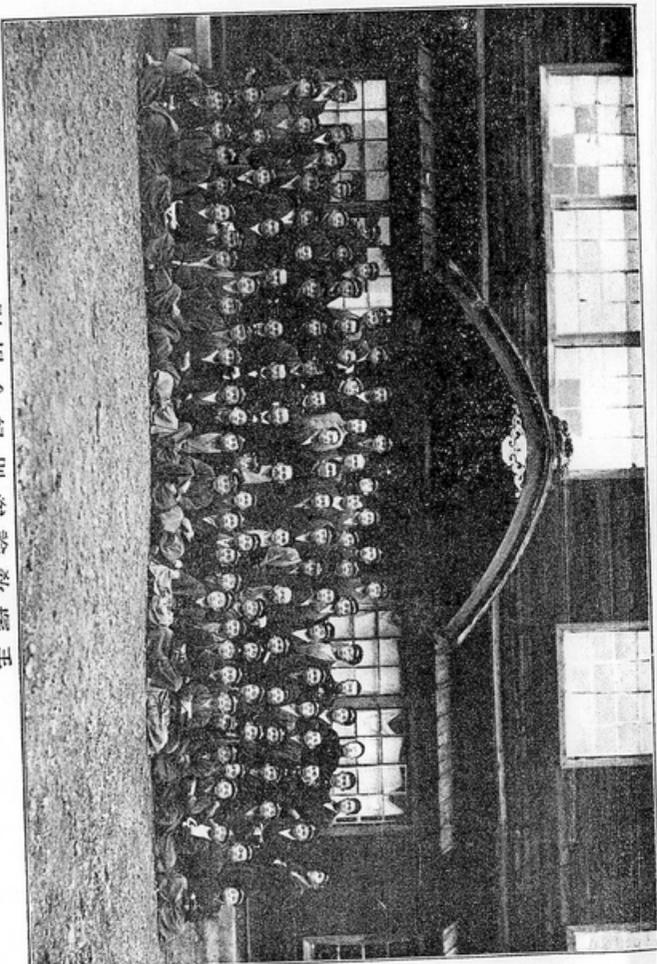
駒場便り 第一信、第二信、
清澤巳未衛君、木下清君、
武久貞一君、藤原周紫君、
下畑徳十君、林與五郎君、
加藤十七三君、

行 紀

拾ヶ嶽及び種高嶽紀行 第二學年 M
修學旅行日記 第三學年 U
遠足旅行日記 第一學年 生

雜 報

○第三回卒業証書授與式○寄宿會祝賀會○城山林
道外三件○滿鐵旅行○山村少佐外三件○福島町外觀
一變○興禪寺の燒失○山林局の製材事業外○椋
樹栽培現況○縣苗圃の成績○北海道の林業○椋
出張○會員勸告○秋季卒業の消息○會員の遠遊○椋
校演習林及苗圃○秋季運動會○職員辭令○椋
例○改正生徒心得改撰○新入會者○二年級○椋
領收報知○運動會寄附報告○第四回會計報告○椋
輯雜感會告○廣告



(明治四十年八月) 影撮念紀別送論教塚手

影撮念紀別送論教塚手

木曾山林學校々友會々報 第七號

明治四十年五月五日

論 說

御料局長渡邊 男爵の演說

總務部員速記

此一篇は、客年十一月二日御料局長木曾支廳開張式に臨まれたる渡邊御料局長が、殊に松田校長の懇請を辱れて、本校生徒の爲めに演説せられたるもの大要なり。今掲げて本欄に載す。

(松田校長紹介の譯。 渡邊御料局長には、今回御料局長木曾支廳開張式御臨攝の爲めに當地へ御出でになりましたから、本校の爲めに一場の講話を懇請しました。御用多の中を御適合せ下され、幸ひに御講話をなしたる事になりましたのは、諸君と共に感謝に堪へぬ次第であります。茲に御懇々感謝の意を表します。)

私は千秋と云ふもので、昨日御料局長木曾支廳開張式に臨み、本日は校長さんより何か一場の話をして呉れるのことで、私は突然此席に臨み諸子の前に一場の話をなす次第で御座ります。さて學術上に於ては校長其他

諸先生より教授せられ居ることなれば私の言ふ迄もないことであるから、私は今經濟的方面より見たる森林につき述べたいのであります。惜て森林の殖伐を大いに勃興せんとするは、誠に國家富源の基礎であるからして、此森林の事業を大いに奨励して、以て、國家永久の長計を計るは、目下の急務に外ならざる次第であります。皇室に於ての御歳入は、主として御料局よりの御歳入であつて、御料局長は元は鑛山等もありしが現在は森林局といふても宜しき譯であります。然して森林は木曾が最も大面積を占め、幸ひに宮内省直轄御料局支廳も當地に設置せられて、以て御料局長に於ける殖伐の實を擧げんとするに當り、又當地に山林學校あり、幸ひに本校も郡より縣に移せしは、關知事の大きい實業教育を御奨励せられしに依るのであります。諸子が本校に於て林學を研究せられ、又實地演習に望んで得がたき所の森林あることなれば、諸子は實地に見學の功を積まれて充分に御研究なされるのでありませう。然して、帝國の林業を世界に發揚すると共に、經濟的基礎を鞏固にするは、誠に目下の急務であるのであります。回顧すれば、子は牧民官として北は北海道より、南は中國九州に至る迄地方行政に與りたるものとあるが

其頃には森林思想至つて乏しく、造林は資本を施して開墾するも、田畑とならざる所に僅に植栽せしみにて、主として伐採のみにして造林することなかりしが、當今政府に於ても、民間に於ても、森林經營の必要を感し、地方に於ては道々事業を開始する様になりました。今之を擧ぐれば、新潟東海道の成る二ヶ國九州中國杯に於て、人民が經濟的方面よりして、森林の必要を感し、目下盛に殖伐の實を擧げつゝあるは、誠に喜ばしき次第であります。思ふに又他の諸般の事業と比較するに、最も經濟的基礎を確實ならしめんと欲せば、森林の右に出づるものはありません。依りて畏くも皇室の御經濟は、森林に依ると云ふ御方針であります。隨て民間にても、富豪家が競ふて造林を行はんとする傾向になり来ました。何ぞなれば地主と小作人との権限が昔時の如く單純なるものにあらずれば多くの土地を有する人にありては、田畑のみにては非常なる所の手数を要することなれば、勢ひ手数を要せざる造林事業の安全なるに若くものなればである。終りに臨んで、諸子が此事業を研究して森林事業を益々發達せしめ、以て國家百年の長計を成されん事を祈ります。本日は何の腹案もなく、唯思ひ出づるまゝを

述べて責難をなしたに過ぎませぬ。

●三村林學士の演説

講話速記

左の一篇は豊科大學教授三村林學士の講授中に我が校友會席にて會の爲めに演説せられたるもの、要旨なり（女貴記者在所）
本回は例年の通りの修學旅行として當地へ參りました。途中の次第は淺間の蓄葉松及赤松を視察しまして當地（長野を経て）へ參り、是れより吉野高野と順次視察しまして飯枝する都會であります。處で、今回の旅行としましては、最も多く視察をしたへ考へてありましたから萬事簡單の装ひにしまりました。當地へ參りましたに就きましては、當校々長先生より是非何か話して呉れとの事ですが、咄嗟の場合で、之れより又支廳の方へも參らなくては成りませんで時間も無い譯ですが、何か少しく御話したいと思ひます。態々斯様な校友會にて御招待下さるは、尤も余の光榮とする處であります。

私の申す迄もなく、小學校の教育にしました處で、教育の主意とするは實物視教だと思ひます。從て、何事も實物によると言ふ譯で、根本的から何れも實物視教

當したる處と思ひます。有名なる杉林等ありて各種の實習に適する處からして、併し御料局の伐木法には一歩をゆすると思ひます。
土地につきましては、無論林學農學を問はず、必要にして大關係を有して居りますが、農業にしまして稻麥大豆小豆等を栽培する事よりして、小面積なれば肥料の關係土地改良等をなせば小規模にても完全に試驗する事が出来升が、林業は反之大面積に非ざれば實行する事が出来せん、從て實習に困難なれば場所の揀定に苦しむ、又杉檜等の植栽に至つては尙更の事でありませぬ、されども運材法の大なるは尙木會に越えたる事はありません。御料局の運材法を見て、當校は最適の地なりと思ふ、恐らくは本邦中にても其点に付ては第一適地と思ひます。

を必要とします次第でありまして、殊に農業、林業等に至つては言ふも更なり、益々實際に就て多くしなればならないかと思ひます。多し中にも理科化學などは異りまして、困難とする理由が多いので有升。理科化學などは何處へ行きますが、全一の方法に由りて之れを實驗する事が出来ませんが、最も氣壓とか温度とかに就ては多少の差は有ますが、之れに反して、農林業などは相手とする處のものは悉く植物なる故に、種々の方面よりして、差異を生ずる事が多々益々多しとする次第でありますからして、從て之等専門學校を設立しまして充分の實驗を遂げんとするには、是非とも其位置即ち土地の揀定が尤も必要となりませぬ。

之れにつきまして、運材法とか、其地總ての實習につきましては、當木會などは最も其位置として適當して居ります。成るほど東京あたりは便利といふ唯一点にのみ優るばかりで、斯か、点より見ましても、各地の農林學校の多き中に、本校は其當を得たる位置より尤も適當なる處であります。

抑も、林學と言ふものは種々雑多な學科を含む故、一言には之れを盡されず、就中、實習の便宜其他の点に就ても當木會を第一とし、吉野は之に次ぎて極めて適

獨乙のオーフマン氏等は今迄の觀察を下するに依て言つて見たならば、運材法等はたしかに劣つて居る、又交通は極少い、併し我日本は不便なる處は他にはないと思ふ。故に林産物製造等にも又非常に困難とする處である、由て之等の實驗を積み、之に從つて實行したならば、經驗を重ねる事甚だ多い事と思ふ。此点よりしても本校の位置は尤も好適地とします。故に運材等

に付ては三者を避くといつたよゝな譯で、運材方法に
至つては將來の社會否林業界に對して木曾山林學校の
卒業生に限ると言ふよゝに等しく、我が林業界より希
望に堪えん次第であります。

本邦森林面積の多い事は御承知せらるゝ處であります
うが、森林收益の少きは亦意外な事で、換言すれば著
積が少く、又一方よりは運材の研究に乏しいと言はな
くてはなりません。

長野大林區署の森林利用法に就て、尤も地方に由りて
一樣には言はれませんが、運材法の困難なる点よりし
て、東京にても本縣大林區署の收入が一番少いこの事
です。元來森林を利用して之れを國庫の費用にするは
林業家の本分ではありませんが、古人の仕立てた森林を
利用して得々たるは林業家の本務ではないだらうと思
ひます。必しも蓄積少く、運材法が充分でないため收
入が少いといふのは、甚だ迷惑な事だと思ふ。此運搬
不便なる處よりして收益をして益々多からしむるよゝ
にするは、目下の急務であつて、つまり原生林を利用
して價值ある樹木を植栽すると言ふのが當然の急務で
あつて、即ち之を實驗するにも、亦當校を以て好適地
とします。吉野は美林は澤山あるも、之れを經驗する

の能力に欠けておる、利用上より實驗上此收入の少き
長野縣の當木曾、其不便なる處に居りて一意専心に研
究するのには、林業界にとりて將來大に有望ではある
まいかと考へます。

一寸一例を申しますれば、山毛櫨の利用法に就ても、
日本中至る所に多くありますが是等の利用法に就ては
運搬法の尤も容易なる處に奪ひ去らるゝものであつて
胡排は銃材に應用され、之に代用さるゝは山毛櫨であ
つて、桂も代用されんではないが重きよりして用ひら
れず、之等山毛櫨材に就ては本縣よりも大部出だした
が本縣産よりも東海道産のものは遙かに良好であつて
其利用法に就ても他縣よりは安價に賣却し能はざる處
より壓倒されてしまふ、之れも唯運材法の一点に依て
敗を取ると言ふ事になるのが、此運材法さへ經濟的で
あつたならば確に他縣を凌ぐに足ると思ふ。其不利の
点は本縣より言へば大に悲しむべき事ではあるけれど
も、林業上より見る時は大に研究資料として價值ある
又參考になる事だらうと思ふ。

諸君が本縣に獨特なる林業の利用上に就て發明する處
あらば、日本國の林業上大に得る處あらんと信する次
第であります。

研究の例と致しましては、當地の櫛細工、現今も盛ん
になしつゝある奈良井敷原にて製造する處の櫛が、内
地の用途は近年非常に減じたる故、他の用途を發見せ
ざれば當地の衰微に趣くは必然の事であり升が、之等
が研究の結果、朝鮮支那地方の需用多き方面へ盛に輸
出すると言ふ事です。然して昔時より却て其結果益々
盛なると言ふ、又經木細工にしても輕んじて居たド
ヤマナラシ等の無用視したる材木が、目下に至りては
經木細工の發達に由て非常に珍重さるゝ様になつた。
之れといふのも無用木の利用法が發見されたる爲めに
斯く珍重さるゝ様になつた次第で、櫛が茶箱に盛に製
作されるのも之に本づく譯で、本邦の主林木たる櫛が
斯かる有様になつたのは大に嬉ぶべき事であり、
之等を研究するには、山林學校は最も好適地と言はな
くてはならん、周圍四方に之等の材料ある故自由に研
究し得ると思ふ。

之れは歐米の話でありますが、諸君は御存じのヌ
ツルは極々の山國で、交通の不便よりして粗製品は
運搬上及び其貨錢上不利益にして不便なる故、精工品
として輸出する、即ち時計の如き、又彫刻物の如きも
大に發達して、各種の技藝學校が盛んになつて居りま

す。斯る有様で價值なき材も利用の方法如何に依て大
に益があります、當支廳長の和田理事は發言して世界
の遊園地と言はれて居りますが、加工品を賣却するの
良法を取ると言ふ事です。されど遺憾乍ら……………
本縣の爲めならず、日本國の林業上大に當を得たる學
校といわなくてはなりません。玆處に居られて他に比
類なき事をされるは大に望ましき事であつて、益々研
究の歩を進められて、林業界の發展を進められん事を
切望して止まない次第であります。

終りに望んで、川瀬博士なども實業の應用と言ふ事に
就て稱導されつゝあり、尤も普通學の應用が必要では
ありませんが、さりとて學校のみに依頼せず、自習に依
て大に歩を進むる事が出來升。日本の學術の不進歩は
重に之れに起因するだらうと思ひます、歐洲にては大
學生などは須らく學校以上の研究が多いこの事です。
以上一般の説明をしまして今日は之れで失禮します。

吉原の火事映る田や鳴蛙
いの田に尾がふくなりし蛙
歌和に鳴く蛙俳句に鳴く蛙

子規
油盤
水巴

●所謂本多博士の赤松亡國論なるものの駁論に就て

高 種 博 君

抑赤松亡國論の事たる斯界の大學者間に於ける一問題にして、一時は之れが議論紛々、大に林業界を喧嘩せしめたるありて、吾徒白面輩をして容喙するを許さざる雖も之れが反駁論なるものに付き一言陳述するの要を認むるを以て左に略述せんとす。

赤松は學名を *Pinus densata* Sieb. と云ひ、俗名は雌松又は女松と稱ふ、其性質たる極めて陽樹にして肥齊崗様の地に良く成長し、又強乾濕地の外如何なる岩石地にも耐得るを以て、天然に種子播布して能く裸地を占領し、且つ幼時の成長極めて迅速なるを以て、地力衰ひたる落葉調葉樹の間に混生し遂には之れを壓倒して自ら之れに代るの天性を有す。

但し此の場合の落葉樹林は地力衰弱して益々赤松の成育を助成する場合を言ふ。

如斯性質を有するを以て、其繁殖區域は實に廣大にして南台灣(台灣赤松は *Pinus Massoniana Lamb.* と稱するものにして内地の夫れとは少しく形態を異にす)

博士の説を信じて無理の舉に出でたるものも、其後赤松は目出度き興國樹なるを思ひ、益々之を愛護し其繁殖に力むべきなり云々也。

吾人の見解此説に誤謬あるを見ず、否な極めて穩當なるを思はんと欲す、然るに眼を轉じて所謂本多博士の赤松亡國論なるものを一讀せしめよ、曰く

固赤松の郷土たる暖帯北部及温帯南部なりしと雖も、性尤も陽樹にして良く繁殖し易き種子を有し好んで裸出地を占領し、且つ寒暑の害に感ずる事鈍きより濫伐若くは火災跡地を占領し來りて、今日の如く其勢力を逞みしたるものにして、赤松が斯くも常綠調葉樹帯に侵入して之れに代るや必ず先づ其順序なかる可らず、即ち赤松の性たる天然の作用に於ては暖帯林中に混生し得可き理なし、然るに此帯に於ては濫伐火災によりて地力衰弱せば結果は固有の種類消滅して先づ落葉調葉樹一度代はりて其地を占領せり、然るに此の落葉調葉樹は其落葉期に於ては充分自由に陽光を受け得るを以て赤松は漸々之れが間に混生するに至れり、茲に於て尙も人工的不合理の作業を施せる結果は益地力を衰弱せしめ、最早落葉調葉樹の成長極めて

の熱帯地より、北は北海道の南部に至り、九州四國本土は到る處之を見ざる所なく、加之天變地異又は人為の作用は益々跋扈を擅にせしめんとしつゝあり。

蓋し、赤松の性質たる世既に定論ありて、所謂本多博士の赤松亡國論の反駁者すら尙同しく之れが作用を説く、然らば理論上より推すも又必ず其論の歸着する處一ならざるべからず。然り、其の論の歸する所正に相一致して、しかも其論する方面に於て互に相反す、事甚だ奇觀と云はざるを得ず、抑「所謂本多博士の赤松亡國論なるもの、論駁者の説を聞く」曰く

本多博士が一度赤松亡國論なるものを説てより、世人の之れが爲めに誤解を招くもの甚だ多く、或は曰く、如斯不吉樹は神聖なる門松に供す可らず一村約して之れが門飾を禁じたり。或は曰く自家所有の松林を不吉の樹なれば成育せしむ可らずとて幾十町歩の美林を焼き棄てたりと、然るに何ぞ赤松の性たる固陽樹にして天變地異又は人為の作用によりて秃山裸地となりたる所を占領して、天然に繁殖し以て不毛の地をして自然的に美林に變せしむ、思ふに茲に至らば赤松は決て亡國の樹に非ず、反て興國の樹と言はざる可らず、始め本多

緩慢となり、經濟上反て赤松林となすの優れるを悟て茲に於て、人工的に落葉樹を除去して、赤松の成長を助成するの餘義なきに至る。

此の理によりて、今や暖帯の常綠調葉樹は已に第一期の變遷を経て落葉調葉樹となりしが、益々地力の衰弱に傾ける結果正に第二期の變遷に近かんとしつゝあり、若し尙ほ林地の荒廢をして益度を高め、最早赤松成長する事能はざるに至らしめば果して如何なる可きか、即ち第三期の變遷は如何なる慘狀を齎す可きか、之れ吾人の痛嘆に堪へざる處なり、彼の荒蕪たるサハラの沙漠が、往古鬱々たる森林國にして人口繁華の都市なりしを聞きては、我國の林相變化赤松の蕃殖に就て轉た寒心に耐へざるものあるなり云々也。

就て一讀する時は之れ極めて穩なる秩序立ちたる名説たるなり。

而して、今以上二者を對照比較するに、其所論たる赤松の生ずるは裸出の地、荒廢せるの所なる事は、共に説きて些の異説あるを見ず、只最後に於ける前者の秃山裸地を占領して美林をなすを以て、興國の樹なるを云へると、后者の若し其赤松林の取扱を誤り、第三

期の變遷を來すあらばサハラ沙漠の夫れに比して痛
嘆に堪えず云々と、云へるこの差異よりして、斯く全
く吉凶相反せるの感を懐かしむるに至りしなり。

然りと雖も、普通の能力なるものを以て之れを見せし
むれば誰かは此の論の要点が互に相同じきを思はざる
ものあらんや、吾人の見る所を以てせば、後の本多博
士の説なるものと、前の駁論とは其論法を換へたるの
みにして、其論なるもの、性質より云へば敢て背馳せ
るものあるを見ず。思ふて茲に至れば、一世を喧騒せ
しめたる赤松亡國論も奇抜なるにはあらざる可く、又
夫れを反駁せんとして同じく論じたる學者も世の同情
を受ける所以にもあらざるべし、只常識に鑑みて知り
得べきを無理に理屈強したるまでの事あるのみ、嗚呼
又反駁を試みるの要あらんや。

（此一篇は通俗として寄稿せられたる長篇中に在りて、脚場便り第二
説たるものなれども、思ふ所ありて抜筆の上、本欄に収むる事とせ
り、乞ふ諒せよ）

錢湯で上野の花の噂かな 子規
花衣脱ぎもかへずに芝居かな 虚子
櫻袴千里の馬を買ひにけり 規村

●林學士柴田榮吉氏の講話大要

（林業官行事業を行はざる可らざる理由）

在青森 小林桂一郎君投

抑も森林經濟は農業と異にして全く相同じからず、其
相異なる点は、森林に於ては収穫の時期は永遠にして
長し、彼の農業の如くに春季種を蒔く時は、秋に至り
て收穫を爲すが如き一年にして早速其結果を見る事
得ざる故を以て、今急に多大の木材を得んと欲する場
合に際しては到底遠に之れが木材を需むる事難し、さ
れば豫め其考を以て森林事業に従はざる可らず、之と
同時に、如何なる方法を以て森林經營を企圖すべきか
と謂は、兎に角森林を消滅せしむる事なくして間斷
なく成立せしむるを以て最善なる方法と言はざるべか
らず、之れを換言せば森林は伐木するだけ造林すべ
く又造林するだけ伐木すべしと云ふに販するのみ。如斯
き方略を以て森林を經營せば、其森林は斷絶として百
年を経ると雖も殆んど永久に絶つる事なからん、今假
に茲に百町歩の山林ありて悉皆之れを伐木すれば
翌年に及んで伐木すべし餘地なからん、故に斯く一度
悉皆伐木し盡さば其森林は消滅して亦生ぜざるが故に

幾分づ、伐採し幾分づ、造林する時は、永遠に亘りて
森林絶ゆる事なし。若し夫れ農事ならんか、假令一時
は米の欠乏を來す場合に際しても、他より輸入する事
を得べきを以て敢て憂ふる事なしと雖も、森林に於て
は乃ち然らず、一時大に困難を來たす憂なしとせず、
されば之れを伐木するには其順序方法なかるべからず
、例へば百町歩の森林ありとせよ、毎年一町歩づ、之
を伐木し又造林すれば決して幾年を過ぐるも其林は
絶ゆる事なし、如斯方法を稱して輪伐法と言ふ。輪伐
法とは今后何年の後を想像して森林を造り森林を伐採
するの方法にして、彼の伐期と異なる点なりとす。
彼の秋田青森の如き殆ど伐期に達せし森林多き地に於
ては此の輪伐法を應用する事難し困難なり、故に百年
を待たずして速に伐採する方法を探らざるべからず
其方法は先づ整理期を設けて五拾年若しくは六拾年、七
拾年の期間に伐採すべし、されば一方より之れを見て
ば、未だ伐期に達せざる森林も伐採せらるべきを以て
、皮想のみに依れば大に森林經濟を害するならんと思
へど、是決して然らず、寧ろ全体に取りて大なる利益
ありと謂わざるべからず、其方法を稱して整理的の伐
採法と言ふ。

毎年何程の森林を伐採すれば宜きか、年々何れを伐
すれば宜きか、毎年何木を伐採すれば宜しきかと言
す、蓋し豫定施業案なるものを設け、之れに施業の標
準を示し、十年若しくは二十年毎に何れの個所を伐採
し、幾何本を伐採し、其材積幾何なるやを定めつ、あ
るものは即ち豫定案なりとす。其内亦年々伐採する年
伐額を定める等、豫定案を毎年度に伐採すべき方案な
り。明治四拾年には幾何四十二年には幾何と云が如き、
一年毎の施業方法を設くるものを云ふなり。若し夫れ
年々伐採して之を賣り拂ふも希望の如く買入者あらざ
れば之れを伐採せずして可なるか、否、前の伐木輪伐
法に基き是非其之れを伐採せざる可らず、然らば森林
經濟上不利なるかと言ふに決して然らず、却て大に利
益あるを認む、豈常に利益あるのみならんや、第一曰
く更新に就きて利益あり、乃ち造林のみに付て至大の
利益あり。第二曰く造林に付て利益あるのみならず、若
し民業なりとせば決して然らず、不便不利言ふべから
ず前例之れを証して餘りあり。第三曰く青森地方には
濫伐多し、若し官行とすれば濫伐を防ぐの一法となる
。第四曰く官が自ら造林して製品は直ちに注文次第に

他に賣却するの利益あり。是れ今同政府が官行伐木事業を始めたるは伐木法の原則に適する所以なりとす。収入法。

次に官行事務所諸員は、經費を節して利益を擧ぐるの一点なりとす。其方法は、第一其木材の輸出賣方に付き都合よき方法を取るを宜しとす。第二伐採するには粗末ならざる様注意すべし、高く切る事は柵夫に取りて便ならん、然れ共森林經濟に取りて不利言ふべからず、亦代探するにも他の樹木を折らざる様等の注意を爲すべし。

支出法。
支出の少き方法も亦一考するを要す、第一柵夫の便役なり。第二今后の造林如何を察すべし、乃ち林の造り方に注意すべし。第三には民意に悖らば事業の妨害となるべきに付き、官民共同して之れに従事するを要す。第四に帳簿整理の一点なりとす、例へば支出を明瞭にし、監督の來る場合には落なき様注意すべし。

其他、注意すべき事項は甚だ多しと雖も、之れは他日を俟ちて語る事にしよう。

●赤松林に就て

會員 太田 谷 山

余が生所北安常野の如きは、至る所に森林點在するも社寺林を除くの外森林の九割餘は赤松林なり、されど學理を應用せるに非ず、又井然たる統計に依るにも非ずして必要あるや直ちに之れを伐採し、毫も森林の將來を顧み又林地應用の何事たるを知らず。昔時鬱鬱たりし林地も今や漸次に伐採せられ、其の後の手入れなきを以て漸く其の跡絶えんとす。

戦後の我が國は交通機關にせよ、製造事業にせよ、愈々木材の用途大ならんとするの今日、あたらし林地を荒廢せしめ徒らに荆棘を生せしむるは誠に口惜しき事ならずや、曩に本多林學博士が赤松と地方との關係なる所謂赤松亡國論を頻りに唱へられて世人の反省を促がされき、吾等始めは赤松は有害にして遂に地方を荒廢し終るの議論と思ひしに、さはあらず赤松は多く亂伐地又は野火の結果裸出せる所の林地にも繁茂し易きものにして、其の取り扱ひの方法にして宜しきを得ざる時は遂に林地を疎開乾燥せしめ、森林前途の憂慮す可きに至ると、之れ赤松其の者が單に有害にして不良な

りと云ふに非ずして、只だ赤松は自然の状態を永久に繁茂し能はざること共に、多くの樹木が成立し能はざること荒廢地にも能く成長するものにして、換言すれば赤松の跋扈は即ち林木の亂伐林地の荒廢たるを證明するものにして、延いて國土保安上眞に寒心す可きものなりとの説にありしなり。今や赤松は殆んど日本全國に蔓延するが如く、又其の何處の松林の状態を見るも多くは放任にして敢て手入れを爲さずと、之れが爲め目前に得らる可き収入利益をも空しく放棄するが如きは實に惜しむ可き事と云はざる可からず、先きに本多林學博士が埼玉縣に於て赤松林の取り扱ひ法に付き試験せられし結果、吾等が爲め大に參考となる可きもの有るを以て、左に其大要を記さむとす。

赤松林の目的たる、一は棟梁橋板より其他建築用材と爲し、一は薪材用に供するにあり、氏が埼玉縣に於て研究せられし改良法は之れを普通取り扱ひ法に比する時は實に十數倍の利益を得らると云ふ、普通薪材用の松林は老木と成るに従ふて風折れ蟲害其他諸害に係り安き者にして、老年となるに従いて其の收利を益々増加し得らる可き者に非ずして、一定の年齢以上を林木を殘立するは經濟上實に不利なる者なりと、例へ

ば茲に百年生の松林ありとせん、其の中建築用材として適するものは林地一反歩中僅か三本乃至五六本に過ぎずして、他は多く屈曲結節或は其他の損傷あるものにして薪材とする外殆用途なし、之れ故に赤松は薪材を目的とする場合には何年目に於て伐採すべきやが尤も注意す可き点なり、氏は普通林地に於ては二十年乃至三十年目に於て伐採するの最も經濟的なるを説かれき、今一年生より百年生に至る迄逐年々成長する量を比較するに、二十五年生迄では一段歩に付き一年間に平均八貫目束を一把とするもの三十把内外の成長を見るも、二十五年の終りに於ては二十五に三十把を乗じたる積七百五十把を産出し得らる割合なり、然るに五十年生となれば其の成長力減じ漸く一年間に平均二十把内外の産出に止まる、換言すれば假りに二十五年生迄での成長力を維持するものとせば五十年間には千五百把を産出すべき筈なるも、實際に於ては五十年に其の間の平均成長量二十把を乗じたる積千把を産出し得るに止まる也。

次に百年生となれば著しく其生長力を減じ、一年間の生長量は僅々十一把の平均に過ぎず、是等年を追ふて生長力の減少する理由は、二十五年以後は年一年毎に

風折れ雪倒れ虫害等に罹り易く、従つて林木疎開し、爲めに陽光の透射を來たし、之が爲め林地は乾燥して地方減退するを以て次第に其の生長力を減じ、剩へ前途の如き諸害の爲めに其の數の減退するに至るなり、故に薪材を目的とするものは其の成長力の尤も盛なるの時期即ち二十五年乃至三十年の頃に於て伐採するを以て尤も利益あるの法とす、斯くの如くして薪材を伐採する時期に達すれば、其の林木中幹直くして枝下長く上枝能く生育し且つ損傷なきものを一段歩につき三本乃至五六本位を選び、之れを棟梁用材として保存し、他は悉く伐採して其の跡地は新たな松苗を植え付けて成立せしむ可し、要するに是等薪材なるものは其の樹形の良否に關する事なくして只其の收量の大なるをのみ目的とするを以てなり、棟梁其他用材を目的として殘立するものは力枝以下を切り除く可し、此の際に成る可く丁撃に樹幹に沿ふて枝の基部より切斷し、其の切り口を平滑ならしめ、其の周圍より新組織を生じ全く其の切口を包圍するに便ならしむ可し、斯くして無節の良材を得らるゝにて、以上の如く一方に於て二十五年乃至三十年毎に薪材として伐採し、他方に於て百年の後棟梁其他の用材として良材を産出する事

法と比すれば後者の約二十倍の收利を見らる可き也。此の尤も容易き方法にして、斯く多大なる森林收益を得られ富國増進の實行を得ば、實に之れ一身一家の福利のみに止まらざる也。

●校友會席上に於ける岡戸君の口演

(山梨縣林業一般)

雜誌部員速記

私は只今紹介致された岡戸で御座います。私は此學校を卒業して山梨縣に近藤原の兩君と奉職して居ました。今度入營の爲め數日前に歸省しました。今度校友會を開かるゝと聞き校長より何にか話して呉れといはれましたか何も話す事は有りませぬか、一寸山梨縣の林業經營の方針に就て御話致します。山梨縣の山林面積は三十七万町歩にして、此山岳の大部分は濫伐の害にて非常なる慘狀を呈して居るとであれば、其面積の割合に荒廢せる所夥しきを以て、縣廳にては非常に心配して居ます。依りて縣廳にては之が經營の第一着として明治三十三年の縣會の決議の結果、縣廳内に第六課(林務課)を設置しまして三十六年より森林政治の事業に取り掛りたるのである。本縣は純然たる所の森林園である、然れども面積の整理不完全の爲り面積歩合に

を得、斯くすれば所謂二段喬材を形成して常に林地の鬱閉を保ち、赤松林の尤も缺點とする地方の荒廢を免るゝ事を得る尤も利益多き改良法なりと云ふ、更に改良法の收利計算を参照するに今假りに百年間置く可きものを二十五年生にて伐採せば、一段歩七百五十把を得られ、一把を假りに十錢とすれば其の代金額は實に七十五圓となる、之れを七十五年間預金し年五分の複利とするも百年後に於ては幾何級數を以て二千九百二十五圓に達す、次に初回の薪林伐採後新たに植付け、又二十五年後即ち初めより五十年目に伐採することせば、同じく前法に依つて七百五十把即ち七十五圓となり、預金として五十年目には八百二十五圓となり、更に前と同法にて新植したる林を二十五年後即ち初めより七十五年目に伐採せば七十五圓を得らる可き也、之れを二十五年間預金し元利二百五十圓となる、又三度目の伐採は廿五年の後即ち最初より百年目に伐採することせば又七十五圓を得らるなり、以上四回の元利を合する時は實に四千五十圓を得らるなり、然るに此の改良法に依らず、初めより百年間其の儘に放任して一時に皆伐することせば薪材は僅かに二千把を出する事稀にして其の收益僅かに二百圓内外に止まる也、故に此の大なる誤謬ある事を發見しました。即ち第六課の設置してより此の誤ある事を知り得たのであります。是れより之に就て御話致します。森林經營の目的は成長量を増大せしむる事、樹木の濫伐を防ぐ事、適當の林木蓄積を圖る事、縣外の木材を輸入する事、而して之が實行は甚だ六ヶ敷きものである。依りて之れを見ん事は、遠き將來を期せざるを得ずばなりません。蓋し造林事業は至つて難きものである、何となれば森林事業は他の事業に比して遠大なるいもか、はらず、人民は目前の利を望んで居るなれば、造林事業は御料局の事業にありても人民は非常に嫌ふて居る次第である。依りて本縣にては益々荒廢の土地を造林して、改良を計る手段として、強制的及び補助的手段を施行して居る、此手段を取り改良を施さん爲めに、現在の二十万圓を支出するといふ。然らば今度如何なる收入を得るか、之れに就ては充分多大の收入あること明である、然れども之れを價值ある森林となさんには多くの年月を要すべきこと、なれば、今より大いに森林を撫育して利用の方法を取らねばなりません。之れを講せざれば、只立木の代價に過ぎません、又利益を得ると雖ども組成品の枕木位に過ぎません。以上森林に就て申し

ましたが、之れから縣苗圃に就て申上ます。苗圃は山梨縣林政に就て甚必要な其一つである、其目的は改良苗圃を造り、其苗木を夫々人民に下附するのである、而して山梨縣には大面積の苗圃なく、小なるもの所々に散在して居るのである、一ケ年に下附する苗木本数は千五百本位とす、縣苗圃には一名の監守を置き總ての事務を實施せしむ、而して分担區には一名の工夫を雇ひ置き其仕事の難易及び出来高に依りて其収入の割乃至二割を給す、苗圃に於ける仕事は帳簿を備へ付け置き、總ての仕事の行程を記載する事になり居れり。下附の許可を受けたるものは夫々一年乃至一年半を経て山地に植出する事に成り居れり、而して造林面積大にして苗木出願數大なる時は容易に下附を許可す、少なるものは手数を要するを以て容易に許可しません、而して人民は唯價値の有するもののみ出願して、立地の關係を考へず出願するを以て、本縣にては實際其土地を踏査して其樹種が適當するや否やを認め、而して後下附する事になり居れり、其請求に應じて一々下附する事を得ず、本年よりは苗圃を設くるに人民に多少負担せしめ、或る團體に下附するに至れり。

猶山梨縣に於て取扱たる仕事もありますが、事務は實

植林の奨励

會員和田生

私は本回會報の餘白を借りて、植林の奨励と云ふ事に就て、聊か自分の感じた事を述べて見やうと思ひます。先づ、森林が直接には家屋は勿論、船橋橋樑電柱鐵道枕木、各種の器具器械、其他薪炭燒酎等人類に利益を與へ、間接には氣候調和風致保存等より保安林として社會國家に貢獻する處少からざる事であること云ふ事は既に諸君が御承知の事であつて、又世人が一般に入釜敷唱ふる事でもあります。で、我國は位置として臺灣の南端アントース（北緯二十一度四十五分）より北は北海道千島のアライト島（北緯五十五度五十六分）に至る間、寒温暖熱の二帯に亘り、暖帯に位置する部分最も多く、從て植物の生育に適する處からして林地國と呼ばれ、全面積の55%迄は林地の占むる所で大凡そ二千二百萬町歩余もあり、萬國に於ける林地面積の割合より云へば第一、がフィンランドで其第二に位置すること云ふ程

の森林國で、尙其上に氣候は温帯にある處からして獨逸佛蘭西等にも優り、其林木の成長量に就ても我吉野の如きは一ケ年一町歩の平均生長量は二十乃至二十五立方米突の成長量を現し、其他の所とても杉の木の場合は十乃至十五立方米突の成長量は現はすれて居る、では之れ程の森林國であるからして到る處に立派なる森林が澤山あるかと云ふと、中々爾う云ふ譯ではない。到る處瓦峰赤山許りでそれも眞の樺色を帯んだ赤山ばかりである、併し中には立派な林相をなしたる所の森林もばつゝあるのまるわるど（法正林と云ふ程ではないが、比較的利便の多い森林即ち奥州の秋田、遠州（秋葉山近傍天龍河野）木曾奈良熊野（熊野秋田）を除く外、余の實見等にあるが之等は皆維新前舊藩時代に於て林政のよく行はれたる賜であると云はねばならぬのである、其他の地方は如何なる森林状態を呈して居るか、例の赤山が多いのである、處が本邦全体を平均したる成長量は如何程迄あるかと云ふと、平均一ケ年一町歩の成長量は獨逸國あたりは各樹種の平均したるものにてても四、九立方米突位あるに、本邦に於ての一ケ年一町歩の平均成長量は僅々〇、一〇六五立方米突に過ぎないのである、之を價格に積算しても前者は四

十マルク（一マルクは我四十七八錢）以上の純収入を得るに、我國では拾錢内外とは實に大聲も立てられない程なり、然らば何が故に本邦の如き氣候快美地味肥沃共に最も林業に適したる森林國でありながら、斯様に荒廢したる有様を呈して居るか云ふと、其斯くならしめたる原因は確かになくてはならぬ、又確かにあるのである、最も影響否荒廢を來たした原因としては、第一我國民にして愛林と云ふ思想に乏しい事、第二には維新の際に森林を濫伐したる事（王政復古の后百般の政務は其緒に就き發々として改明の域に進みしと雖も、而も森林は此時期に於て少からざる損害を受得せり、明治四年發藩置縣の令出するや士は舊慣を改め民は新奇を競ひ、舊來の林政も亦從て弛み、恰も閉關を徹して之を開放せんが如く、其弊や盜犯を起らし濫採頻りに起り、遂に其停止する所を知らず、殊に家祿奉還者に森林を拂ひ下げが如き、地租改正の際從來官に於て所有せられしも森林が一朝にして民林となりしが如き、地押調査の際官林を侵食せしが如き、其盜犯若しくは火災犯が寛宥となりしが如き、皆我國森林の荒廢を來たせし原因となりしなり）等が最も重なる原因である、尙我長野縣と他府縣との比較を見るに、

長野縣は本邦でも有名なる山國である、尤も伊那松本善光寺等の諸平原あるも其一部分で、御岳、駒ヶ岳、淺間山、立科、飯綱、戸隠、の高山が諸方に散在する点より見ても、山田とも云はねはならんのである、其價と云ふものに付ても亦多い事は一番と云ひたいのであるが實以て耐うでなく、前に述べた本邦平均一町歩一ヶ年の純收の拾袋内外が証據となるして見ると、矢張り、元峯禿山が多く而かも上等の禿山が多いのである、今試みに吾出生地信濃更級郡八幡村だけに取つて考へて見ても、本村共有地面積は約三百町歩許りにして内百町歩は植林地(杉落葉松)で、此外に學林(八幡尊常高等小學校生徒卒業紀念林)が廿五六町歩程あり、其殘部は悉く農家にての草刈場及び新耕地にて所謂芝山である、今假りに林業の一大進歩せしものと見做して此三百町歩の内半分即ち百五十町歩に赤松單純林が成立したるものとして、年々三百町歩づつ伐採して、一本五拾錢宛二千本を得る考ぎして算入するときは一年の收入千圓余也、明治卅一年度統計表を見るに調査したる本縣各町村の收入は平均四千五百圓である、然るに今此千圓と云ふ餘計の收入があれば、村費の負擔と如何にか八ヶ間敷く苦情を申し立てる程でもない事た

らうと思ふ、獨り之れは我郷のみに就いて云ふようだけれ共、大略何所でも斯様な有様だろうと思ふ、耐うして見ると以後十分殖林と云ふ事に就て奮つて計画を立て、各町村に自治團體の基本財産を作つて貰ひたいのである、否有力者に向つて勸告申し上げたいのである、然るに「蚤飼と蚤種が一番い、何百圓と云ふ大金が一度に取れるから、それを林業だなんてこんな山ばかりの所に居ながら又木を植えるだか」などと述べ立て、聊かも殖林と云ふ事に注目しない連中の多きに過ぐるを、甚だ以て迷惑千萬に思ふのである、夫れも非常に資本のかゝるものならばいざ知らず、他の諸業に比すれば至て事業簡單にして誰にでも出来る仕事で唯植樹後保護の点に注意すれば充分である、元より國家は部分の集合で部分は即ち各町村である、各町村は丁度一家の大なるものである、國家の富裕を計ること欲せば宜しく自治體的共同財産を作つて一家の大なる各町村を富ますにある、而して此林業は可成大面積に於てなす程利益も大なり、從て團體的に大々的になす程利益も多ければ、今よりすぐに該事業に取りかゝらん事を切望して止まないものである、先進者有力家奮つて林業を營み給へ、此天賦の森林國に生じて而かも眼前

大森林が今しも盛に成立せんとするに非ずや、或部分は盛に植樹せられん事を迎ふるもの、如し、着手せよ林業に、而して世界唯一の森林國たらしめよ、臺灣に森林あり、吉野熊野に森林あり。林業の發展如何亦大に軍備擴張に關係する所ある可し見よ、たつた一個三厘の摺付木でも輸出金額六十万圓とは誠に驚くべきではないか、嗚呼急を告ぐるものは造林すると云ふ事の一事であるなり。

●森林火災と愛林思想の必要

會員 竹内房太郎君

森林に災害を及ぼすもの敢て三四に止まらざるも、其中最も多大の損害を與へ山野を荒廢せしむるものは山火なり、彼の瞬忽たる大森林も一朝山火の襲ふ所となるや、際涯を見ざる漢々たる曠野と變じ去るに至るは今更に喋々するを俟たず。從來本邦森林の著しく荒廢せし原因は昔日に於ける濫伐たるや争ふ可き所に非ず然れど其主なる原因は實に山火の然らしめし事は疑ふ可からざるの事實とす、今我國に於ける國有林野火災を檢するに一ヶ年平均一千余町歩(價一萬圓以上)にして其損害の大なる事推知するを得可し、抑も此火災

の原因たるや多く人爲に起因せり、乾寒心せざるを得可けんや、余此処に思ふ融雪後地表乾燥の際森林附近に於て僅かに一点の火氣あり、之れに風力の加ふるあれば忽ち山林に延び甚しきは民家をも焼き拂ひたるの實例少なからず、嗚呼山火の災害斯の如くなれば誠に恐る可き事ではありませぬか、之を豫防禁止するは官民の協力一致之に當らずは其効を奏する事が出来ません、現に彼の北海道の如きは法令を以て住民山林官吏或は村吏其他近里の人民には山火消防の責務を負はしめると言ふ、又歐洲にありては森林内に於て危険なる點火及び妄りに喫煙をなすことを禁するが如き、種々の法令制限あり、下は一般愛林思想の念深く、目下永遠の幸福を思ふて其愛護を森林官に嫁んご心掛る風潮ありと言ふ如きは實に羨む可き美風ではありませぬか諸君願くは我が森林法の普及するに共々に奮つて國民を鼓吹し、一般に愛林思想の益々發達せられん事を希望して止まざるなり。

やよしちみ道へく春の行方へ 一茶
春が行く行くこねがせど誰も來ぬ 盧子

附 記

●面積計算定木に就て

本 用 生

山林測量の面積を圖上に於て計算する方法は種々あり
と雖も、其中普通に行はるゝは最も簡單の方法を總括
法とす、然れども第一層簡易迅速なるを旨とし業
積せる計算定木に就て述べんとす、此法は平面幾何學
圖に關する作圖題中に（與へられたる直線形に等しく
而して邊の數が一つ少く直線形を作る事之に依て、與
へられたる直線形に等しき三角形を作る事）の理論を
應用したるものにして、



十

今 $ABODE$ を原直線形とするときは、 BF を AC に
平行に引き、 AE を結び付くるときは $AERD$ は原直
線形と公認にして、且つ邊の數が一つ少く直線形なり
所の如く（空一法に類して） EAD なる空の一つの
三角形を作る事を得るは、幾何學に於て争へる所なり
されば、所の如くにして直線形の面積を計算するは
間違はず。

然るに主要な例より土木工學者は、二つの三角形定木を
應用して処理を應用し、 AO, BE, AR, DE 等の原線
形を畫く事にして、直に GE 線を引き取て、一般に土
坪の計算に便し居れり、是れ若し測量にして迅速の方
法には相違なきも、三角形定木の運用中頭領の柱より
往々誤差を免がれず、況んや山林測量の面
積は土坪に比し一層精密の計算を要するや
言を依らず。

故に予は近頃左圖の如き特別定木を提出し
たれば、左に其の構造及用法を説明すべし。

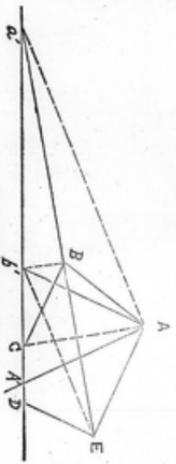
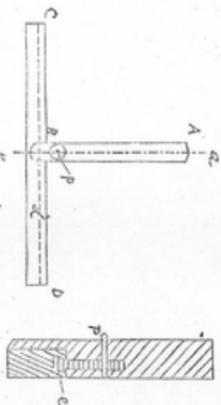
用法。

下圖 OD 邊に當りて、定木 OD を置く、(但し
 OD 邊を双方に延長するを要す)
初めに遊杆 AB を圓 AO を結び付くる所に A
 O 二点上に來らしむ、(即ち圓中點線 AO の中
点が如し)

次に $\angle ABC$ の隣の圓にて AB 杆を B に
移動す、(圓中 Bb の如くする事) 然る時は杆
の足 B 點は b に來る亦次に遊杆の頭領のみ廻
轉せしめて bA 二点を連結する様に置く。
次に遊杆は $\angle BaD$ の隣の圓にて A 點に
移動す、(圓中 Aa の如し)

aE を結び付ければ $aEAD$ は求むる形の三角

構造 AB は遊杆にして、 OD 上を運動し
又 OD と任意の角度に傾斜す。
 OD には A なる標を穿ち、 e なる標を P
の標針にて連結せしむる、(しるくし
て動く程度に於て) AB 杆を頭はしめ得
るの装置なり。



十九

至つた。尤もレッド (Lead) 鉛、即ち鉛筆と云ふたからして其製造材料に少しも鉛を使用する譯ではない事は、後に至つて自ら判然する。然らば此ペンシルを何故に鉛筆と譯するに至つたか云ふに、恐らくは此レッド、ペンシルのレッド (Red) なる語の意味に、通常「鉛」と云ふ意の外に、此處に適中すべき「ペンシル」の心に用ふる「石墨」と云ふ意味があるのを、普通の意味の方に即断したのと、一は其外観の鉛に類似して居るより來れる誤譯である様に思はる。尤も英語で石墨 (Graphite) の事を一に「ブラック」レッドと云ふのは誤稱である。セシテ「テュリ」字典は斷つて居る位だから、本邦で之を鉛筆と誤譯したからとて、あながち無理もあるまいか。

鉛筆の嚆矢は何時頃であつたか云ふに、今より約六百年前即ち十三世紀の頃に「ラヒラス」云ふ人の書いた物に此鉛筆で輪廓がとつて有たと言ふが、之は餘り正確でない。それで、比較的正確と認めらるゝ起原は十六世紀の中頃に瑞西人の「グスネル」云人の「化石論」の「書字」と云ふ章の中に此鉛筆の使用法が書いて有るのが嚆矢である。併し其心にする材料は尙石墨で

はなくて、安質母、尼であつたらし。

(3) 天然石墨鉛筆の起り。
是と殆んど全時代に、かの有名なカンパーランド礦山に於て最良質の石墨の発見ありてより、茲に始めて世界に向つて石墨ペンシルの供給を手廣く充たす事が出來る様になつた。併し之は天然産の石墨塊を其儘鋸にて薄板に挽きたる後、更に之を細き角棒に挽き割り之を「波斯シーダー」(Cypripetens virginiana 杉科植物) 樹の材にて作りたる箱に箱裝密着せしめたるものであつた。

(4) 人工鉛筆の起原。

○フアーベル氏の失敗。 ○コント氏の成功。
○フロックドン氏の專賣特許。 ○其の衰運。
さなきだに、何とか事物に新工夫を凝らさんとするのは人情の常であるのに加へて、此カンパーランド礦山の良質石墨の天然塊の産出は無盡蔵ではない。其處で歐洲大陸でも、英國でも、此礦山の手を離れて何か完全の鉛筆を製出せんものと、幾多の工夫を重ねる者が出て來つた。

其第一着手として顯はれたのが、西暦千七百六十一年獨逸の「スーレンベルヒ」(獨逸の夫一工場と五千五百人の職工を有する) である。

三、鉛筆の製造法。

此處に述ぶるのは、即ちコント氏の製造法の一般である。是に由て其他も類推する事が出来る。

(1) 優等品の製法。

- 原料、○原料の粉塵、○水煎法、○混合練捏
- 心の搾出、○坩堝焼、○鉛筆の硬軟、濃度
- 木棒への嵌裝。

コント氏が鉛筆の原料は石墨粉と粘土末との混合物である。先づ石墨を挽臼にかけて粉碎し、之を細かき篩にかけて後、無機酸の作用によりて鐵分等の夹杂物を排除し、之を水にて洗滌したる後、強熱を加へて焼き氣かすのである。次に之を満桶の水の中に投じて攪拌し以て重くして粗らき部分を沈澱せしめ、輕くして水に濁れる部分を更に他の桶に移して此方法を反覆する事四五回に及び、かくて最後の桶に沈澱したる者は實に微細にして最良なる石墨粉となる。

次に粘土に就ても、同一の方法を施して、其鉄分砂粒等を除去し極度の細密にして一様な粉末となし然る後此兩者を等分乃至は粘土末二、石墨粉一の割合に至る間の各種の比例に混合するのである。(此混合の割合は鉛

筆) のフマーベル氏である。氏の考案は、先づ石墨を粉狀にして之にゴム、樹脂、膠、硫黄等を混和したるものを練り合はして、かのシーダー樹の木棒の中に孔を穿らたるもの、中に練り込むのであつたが、遂に完全なる鉛筆を作り出す事が出来なくて失敗に了つたのは氣の毒な次第である。
次で西暦千七百九十五年に「巴黎のコント」氏が更に一新案を工夫した。此發明が遂に凱歌を奏して、現今世間で使用するが如き石墨鉛筆は勿論色鉛筆等に至るまで、あらゆる鉛筆が盛んに製出せらるゝに至つたのは實に公益の爲め慶賀の至りである。(コント氏の製造法は後) 其後千八百四十三年に英國の「プロックドン」氏がカンパーランド礦山産の石墨の粉、碎片、截ち屑等を原料として之を粉塵したるものを真空中に於て強壓力を加へて天然産の石墨塊に劣らぬ程のものを作り出す工夫を發明して專賣特許まで得たが、惜し哉、カンパーランド礦山に於ける原料の竭盡と一方コント氏の發明が實用上優良なるに加へて、其製法が頗る科學的であつて原料の優劣を問はぬのには、拮抗する事が出来得なく、遂に衰頹の運命に歸したのには、適者生存の理法によることは言へ、氏の爲めには一掬の涙なき能はずであ

筆の硬軟に依りて(條件)
なる事後段に述ぶる。如し)

かくて混合せられたる兩粉末は能く均一に混合せしめ
適度の水を加へて之を挽き合せ挽合せ後、緻密
なる布製の袋に納れ、水力壓器にかけて相當の度まで
其水分を去り、適度の「捏ね餅蒸」となるを待つて袋
より取出し愈々鉛筆心の製造に取りかゝるのである。
即ち此練り餅蒸をば、強力なる螺旋、壓搾器付きの活塞
を具へたる黄銅製の堅固なる圓筒中に入るるのである
此圓筒は垂直の位置に在るものにして、其底部は厚き
黄銅製の平板より成り、是に鉛筆心の太さと同じ太さ
の孔若干を穿つてある。斯くて螺旋壓搾器活塞の作
用によりて、此餅蒸は連続せる長き紐状物となりて、
つき出ださる。之をば平板上に、其真直状態を失は
ぬ様に、受け載せたる儘、數時間板上に放置して乾燥
せしめたる後、尙十分に乾燥せしむる爲め、更に之を
ば、真直の溝線を劃したる平板の溝中に併列せしめて
其上を一枚の板にて蔽ひ、之を温火にかくれば、茲に
始めて硬直の棒心となるのである。

水蒸の度數を減し、若しくは之を略して、前述の方法
によりて製出せるものは、一種の中等品もしくは下等
品である。更に下等のものに至りては、單に石墨の屑
片と硫黄とを混和し、之に柔らかなみを附くる爲めに少
量の脂肪を混したるものを火熱に溶解せしめて、之を
鑄型に流し込みて冷却するのである。尤も是等は普通
木工用として使用せらる。

是に因て之を觀れば、全じ鉛筆にも七八厘の安物から
始めて六七錢の高價品に至まで、其價格に大なる等級
のあるのは、無理もない次第である。

(3)色鉛筆の製法。
色鉛筆は通常、其々の礦物質の色素と粘土、臘及び脂
肪等の混合物を作り、之を前述せる所の優等品の製造
と同一の方法によりて製出さるるのである。併し増瑪
に納れて熱する事丈はしない。

不変色鉛筆 又近年の製出にかゝる不変色鉛筆
は、此礦物性色素に代ふるに「アニリン色素を以て
し、之を粘土とグムの混合物より製出するのである。此
者は常に不変色である許りでなく、紙面にも能く附着
し、且萬一水に浸さるゝ場合にも、字面が甘く溶合し
て恰もインキにて書きたるものと同一の外觀を呈する

である。楮鉛筆の硬度と、墨色の濃淡とは、此處に至
つて其等級がつかぬのである。即ち一は石墨と粘土の混
合比例と、一は増瑪に於ける熱の高低とに關係するも
のにして、一は増瑪を擧ぐれば、石墨の分量多し、且黒色は濃
くなるのである。其鉛筆は柔くして且黒色は濃
くにして仕上げ済みとなりたる鉛筆心をば、シー
ダー樹の材にて作りたる細き角材を縦に二分して、其
内部に此鉛筆心のキツシリ適合する様に作りたる者の
中に填裝して、兩木片を膠にて膠着せしめ、之を輪轉
機にかけて角棒を平滑なる圓柱となすのである。かく
て出来上りたるものに、商標品等の文字を直に之に
刻印するか、若しくは更に此圓柱にリニスを施したる
後に、金銀箔等を用ひて刻印を押捺すれば、是にて全
く鉛筆は完成せらるるのである。

此の如くして仕上げたる鉛筆には、夫々硬度の硬軟、
墨色の濃淡が出来て居る以上は、其用紙の粗滑硬柔に
應じてそれ相當のものを撰擇して使用するれば、其で足
りて居るのである。其れを能く研めて用ふるのは、少
しく滑稽の至りではあるまいか。

(2)粗製品の製法。

●竹林に就き

宮崎 二郎君

明治三十九年十二月廿九日稿

竹は東洋の名産にして我が國林業上其收益極めて大なる
もの、一にして、若し適當に造林せば一町歩より年
々二百餘圓の收入を得べしと、然り而て、竹材の需要
は年々世の進歩と共に増加し來り、其性質の割裂性に
富み、中空にして重量を減じ、節を有して挫折力強く
其形狀の珍奇にして使用に輕便なる、器物として雅致
あるは夙に歐米人の歡迎する所にして、今や其輸出百
余方圓の巨額に達するを見るに至れり。又以て竹の造
林の忽語に附すべからざるを知らざるべからず。
種類。竹の種類は頗る多くして、百五十種以上にして
本邦に産するもののみを算するも四屬數十種以上にして
て、其變形、變種、又四五拾種に達すと。然して各性
質及利用を異にすと雖も、就中栽培して最も利益の大
なるものは、マダケ、マツサウチク、ハチク、クロチ

ク等なり。其中マウツウチクは主として筍の産出を目的とし、他の竹は竹材を目的とするものにして、殊にマダケは竹類中最も上等にして、強大なる材を産出するを以てマダケの造林法は竹林研究に値あるものと云はざるべからず。

生長。志賀林學博士の研究によれば、竹は筍となりて地上に現れしより、僅に四五拾日にして伸長及直径生長を完ふするものにして、爾後は幾年を経るも其体積を増加する事なし。而して其の筍の出初めの伸長は、徐々なるも漸く其伸長力を増加し、二十五日乃至三十日に最大に達し、一日の伸長力一、五メートルに達す。然れ共其後は再び徐々に其量を減す、又此生長量は一日中にも變動ありて、日出後三四時間は最も多く、午後は漸く其量を減すと云ふ。

新植法。マダケは温暖なる氣候にして、殊に空氣中に多量の濕氣を含有する適潤地を好む。但し空氣中の濕氣は、如何に多量なるも害なしと雖も、土地濕潤に過ぐる時は害あり。

新に、マダケ林を仕立つるには、分植法を用ふ、即ち他の竹林より健全なる親竹を運び、之れを新植せんとする地に分ち、植うるなり。分植季節は舊曆五月中旬

を尤も適當とす、即ち筍が生長して新しき枝を出さんとする頃を撰ぶべし。然れ共親竹數本を連續せしめ一纏めとし、根株を大きく掘り來りて分植する法は夏の土用と冬を除くの外は何れの季節にも行ひ得べし。又地方により、四五月頃植の二三寸地上に現れ出でし頃根株と共に掘り採りて植出する法を採る所も有り、此の法は親竹を地上より伐採して其根株のみを残し、筍の生せる地下莖を傷めざる様に大きく掘り取り、丁傘に移植するなり。此場合に植出したる筍が其春生長せざる時は、其の竹が根付かざるものなりと知るべし。植付くべき土地は、二尺位の深さに能く耕し、之れに堆肥、厩肥等を充分に施し、大凡拾坪に一本位即ち一段歩に三百本位の割合に植出すべし。

親竹を掘り取るには、豫め其周囲を掘りて其根を切り置き、其切り口より鬚根を發生せしめ、且つ全時に幹等を二間位の高さより切断し、雨水の浸入せざる様竹皮等にてよく其切口を包み置くべし。

多くを費すを以てなり。翌年に至れば縮小なる筍を生じ、四五年後には大なる筍を産出するを得べし。竹を伐採するには、期節に注意すべし。即ち秋十月頃より冬に涉り寒き時期に伐採すべく、春夏雨季に於て伐採するを避くべし。是れ温暖の際伐りたる竹林は虫害に罹り易きを以てなり。伐採には鉋を用ひ鋸を用ふべからず、若し鋸を用ひたる時は其切口を鉋を以て碎き置くべし。切株腐敗せざる時は新しき根を生せざるを以てなり。而して竹を伐るには小なるものを切り、大なるものを残すも年齢三四年以上のものは大小順次に伐り去るを可とす。

右の如くして分植たる親竹は、年々其の根を四方に伸長し、其地下莖より盛に幼竹を發生するを以て、數年ならずして能く全地を鬱閉するに至るべし。竹林が若も密に過ぎる時は竹幹細く、粗に過るときは日光林中に直射して竹幹の發育をして不良ならしめ、且土地を乾燥せしむるを以て適當の密度に保たしむべし。凡そ一反歩に六百本より千二百本位の密度とすを適當とす。

更新法。循環法によりて、常に互に若き竹林を仕立て置くなり、其方法は全竹林を二間幅位の丹冊形に區劃

し、一區劃毎に之を伐採し行き、其の伐採したる地面は深さ二尺位に掘り起し、伐採したる根を掘り出して能く土地を柔軟ならしめ、其内に堆肥又は動物質肥料等を鋤き込むべし。然る時は伐り残されたる雨側の竹は、此沃地に自由に根を伸延し來り、數年ならずして立派なる新竹林を見る事を得、斯くして新竹林を生ずる時は初めに伐採したる部分を同法によりて伐採し、掘り開くべし。斯く數年置きに同法を繰り返す時は、常に若林を仕立て得るなり。

壽命、及救濟法。元來竹の壽命は割合に短く、普通三四拾年にして枯死するものなり。其原因に二種あり、一は傳染病に罹る事と、他は竹の結實によることなり。竹が若し花を開く事あらば、多くは枯死するの前兆と知るべし。是れ蓋し結實の際には果實の爲めに大なる養分を奪はれ、枯死する外なきに至ればなり。去れば竹が花を開く事あらば、或は多くの堆肥又は動物質の肥料を施すか、或は之を伐採して更に新たなる竹林を仕立つべきなり。若し或る局部のみ枯死せる時は、其部分だけ伐採開墾し、肥料を充分に施して周圍の竹林より自由に根を侵入伸長せしめ、以て新竹林を生せしむべし。

雜 錄

● 秋田の林業

國有杉材五千萬圓
輸出年額百五十拾萬圓

秋田縣の山林は、礦産と共に本邦に於ける有数のものにして、特に秋田杉は木理緻密色澤鮮麗の故を以て其名最も著はる、今臺帳面積に依れば秋田縣の總地積百四拾九萬町歩の内山林原野百二拾六萬町歩に達し、内國有百拾萬民有拾六萬町歩なりと雖、精細なる實測を遂げたらんには總地積百拾四萬町歩、國有林野參拾九萬町歩に減じ、民有林野は四拾七萬町歩に増加する見込なりと云ふ、左れば官民有林野の面積は秋田縣全地積の七割六分を占め、内官有は參割四分、民有四割貳歩に當たり、民有林の廣袤國有林に超ゆるも、國有に在りては原野は僅かに百分の一内外にして他は盡く山林なるに反し、民有は山林と原野と相半ばすととなり、殊に民林は過伐の結果今や殆んど荒廢に傾むき蓋材甚だ多からず、茲に於て縣當局者は植樹獎勵の目的を以て植樹補助金下附規則を制定し、市町村又は町村組合若

葉の收縮する病に罹りたる時は、或は腐朽せるもの有時或は、枯死せんとする病竹ある時は、成丈伐採し或は伐採後燒き捨て、其病害の傳播するを防ぐに務むべし、然れ共此等救済法は餘りに完全なるものに非ず、要するに成る丈古くせざして更新する事最良の策なり。

終りに望み、竹林は之を専業となさざるも、一家の經濟として多少備ふるを要す、即ち筍の際は取りて食用に供し、成材の際は之を伐採して日常の用に供す、殊に養蠶業の發達は常に多くの竹材を要すればなり。又竹林は鶏の飼育場として大に適するならん、即ち筍の發生する際を除き柵を圍らして鶏を飼養する時は、一は以て害虫を啄み、一は以て糞は肥料となるべく、小竹林と雖も常に數羽の鶏を養ふ事を得るならん。

出代りの更に職きが来りたる
出代りの藤吉と申し候に似て
出代りや尻の太りも米の飯
嵐子
紅絲
太鼓

くは市町村内の一部落及市町村立小學校に於て基本財産を造成する目的を以て、一定の樹種を小學校に在りては一箇年五百本以上、其他に在りては五千本以上植栽したる時は、小學校へは百本に付五拾錢以内、其他へは樹種に依り一千本に付參圓五拾錢又は貳圓五拾錢以内、又保安林に植栽の目的を以てする場合は一箇年の植樹數を限らずして百本に付五拾錢以内を補助することとし、貳拾九年度より實施せしに其結果頗る見るべきものあり、參拾七年度迄の植樹數及面積は左の如し。

植樹數	面積
町村部落 三、四二、六五七	九七、三
小學校 二、七九七、六四	五九、五
計 六、〇四四、三〇一	一、五七、〇八

更らに參拾八年度に於ては日露戰爭紀念林の造營盛んにして、此一箇年間の植樹數實に八百貳拾萬本の多數に達し、前九箇年間の植樹數に超過するに至り、補助金豫算額に不足を生じ、一部分補助済に他は未補助なりと云ふ。即ち補助済の通計植樹數は七百五拾四萬千餘本にして、參拾八年度補助未済分六百六拾八萬貳千餘本あり、盛んなりと云ふべし。縣當局者は斯くの

如くにして公共團體の植樹獎勵する一方に於て林業思想の普及と植樹法の改良を促がし、兼ねて縣基本財産作成の目的を以て百箇年計画を以て自ら模範林の造營を起し、先づ二十箇年間に期し約五千町歩に二千七百九拾四萬二千本の杉扁柏落葉樹を植栽し、各樹種の主伐期を五十箇年に豫定し去る參拾五年度より先づ苗木の養成に着手し、次で參拾七年度より植樹を始め、現今苗圃三箇所此面積九町五反餘毎年各種苗木百五十萬本を出すべく、又模範林地買入面積九百六十九町歩にして内現に植樹を終はりたる地積參百四拾町步樹數百八拾參萬本にして、明治百參拾六年度に至らば約參千萬圓の價値を生ずべく、林地買入其他の經費は參拾貳萬圓の豫算なりと云ふ、此計畫にして豫期の如く成功せば飽を一般民林に示し其面目を一新せしむるに至るべきか、民有林の現況見るべきものなきに反し國有林の壯觀殆んど無比と稱するも不可なげん、三十平方里に亘る大森林は全く杉の單純林を爲し、數百年の樹齡を保つ老幹聳々天に朝し、鬱然として山を蔽ひ谷を壓し雲を呼び霧を吐き、其巨大なるものは周圍二尋半長さ三十間に達するもの夥からず、其所在は秋田縣の北部米代川の流域を最とし就中長木澤仁鮮は特に良

材に富むと云ふ秋田森林をして斯くの如き壯觀を擅にせしめたるものは氣候風土の頗る適應せるものあると、舊藩の林制其宜きを得たるものに依るものにして、樹齡は百年以上三百年に至るものあり、平均百五十年なりとぞ、今秋田大林區署の調査に依り有用樹種に就き直に利用し得べき材積及毎年の伐採額を擧ぐれば左の如し。

種類	現在材積	毎年伐採額
杉材	五、九七五、〇〇〇	七、四七、八〇〇
其他の針葉樹	三、一〇〇	三、九六
調葉樹	七、五五〇	三、五三三
(備考)	一尺は十二立方尺	

即ち杉の現在材積約六千萬尺に達し、今後連年七十五萬尺を伐採し得べし、今昨年度に於ける杉立木一尺の平均價格八拾貳圓四厘なるを以て、之に據りて現在杉材の總價格を算出すれば約四千九百萬圓にして其一ヶ年の收得六十一萬五千圓なり、山林の利益亦大ならずや、而して大林區署に於ては年々一定の伐採を行ひ其跡地には直に植樹し、永久保続の方法を探れるは勿論、別に三十二年より向ふ十二箇年の豫定を以て荒廢地の造林を經營しつゝあり、既往支出濟造林費合

計二十八萬五千圓、植樹面積約六千町歩にして今後數年間の植栽事業は毎年十萬圓内外の經費を以て千五百町乃至二千町歩の新植を爲すべしと云ふ、而して大林區署の木材處分は從來主として立木の儘賣拂ひしも、施業上の都合と需要者の便宜の爲め昨年度より官行伐採の規模を擴張し、秋田管内に於て約七萬尺を官伐せしが、本年に於ては更に豫算を増額して斫伐造林の官行を盛んにし依りて以て約十萬尺を出材するの豫定なりと云ふ。

斫伐材の一部は所在停車場より直に鐵道便に依り需要地に輸送せらるゝも、大部分は米代、雄物、子吉の水流を利用し後に組みて各其河口の港灣能代土崎及び古雪三市場に集まり、茲處より海路各地に運搬せらる、三十五年中三市場より輸出高合計百四十四萬餘圓、三十六年同百一十一萬餘圓にして内能代を最多とし、土崎、古雪之に次ぐ、而して其販路は鐵道敷設前に在りては主として北越地方北海道なりしが、今や東京を最とし遠く中國九州地方に及ぶと云ふ、能代には能代挽材株式會社ありて、最も大規模の製材を營み、秋田市に在る秋田製材會社亦六十馬力の機械集を備ひ製材に従事し、其他手挽工場は甚だ多し。

●農商務大臣演說 (要領)

(大林區署長會議に於ける)

本會は會計年度の更りに際したるご戦後の計畫ごに付き召集せる次第なるが、由來山林原野の國家に對する關係は國土保安上に關すること少からざるも、是は暫らく措き、今國有林野の利用に就て一二注意を促さんごす。

日露の大戦は古今に稀なる大事件にして我陸軍の勝利は全世界を驚動せる一方、非常なる財を費し、隨て國家の負擔に重きを致せり、今や平和克復したるも直ちに其負擔を輕からしむること至難の業にして、國債は二十億に垂々として其利子のみにても二十七八年以前は國の全部を要する程の額に上れり、然れども是れは固より戰爭の結果なるが故に議會も之に處するの法案を通過したり、而して國家の負擔單に現在國債のみなりとせば未だしもなれど、戦後の我國は世界列強の列に伍したる結果今後陸海軍の復舊を要するのみならず、將來に向つて諸種の經營に多大の費用を要することを感じざるべからず、而して國家の是等負擔に任ずるの方法如何の問題は第一國民の富力を増して國家

の收入を増加すべきは勿論のとなるも、直接國家の收入を増加することに就て諸君亦其一部の負擔に任せざるべからず。

仰も山林の性質は田畝に次ぐべき利源にして、其利用如何によりては收利を増大せしむること容易なるべく而も我國の森林面積は頗る廣大なれば地方を盡して利益を收むるとに努むるに於ては、其利益は蓋し無盡藏と云ふべきものがある故に、之を利用して國用に供し以て國民の負擔を減少せしむることに努力せざるべからず。獨逸の如きにありては山林收入は國家歳入の一項業となり居れるが、是は地質の良好なるに因ることながら又山林經營の宜しきを得たる爲めなりとせざるべからず、然るに我國に於ては山林の經營に着手せるは近來のことにして、明治の初年頃迄は一個人の所有山林以外に於ては山林の林産物を自由に採るも一の犯罪をだに成さざる如き有様なりしが故に、廣大の山林なるにも拘はらず收入の見べきものなく、其後山林の經營に着手したる以來追々收入を増加し來るも、是は單に幕府時代以來の山林若しくは天然林のみに止まり、勢力を以て經營せしものは未だ今日に於ては其山林に對する經營に就き法律命令等も漸く整理し來りた

れば、之等法令の施行に任じ山林經營の目的を達するは一は其任繋りて諸君の双肩にありと云はざるべからず。左れば第一造林に就ては地の宜ろしきを見て之れに計畫を建て、又從來存在せる成木にして賣却すべきは之を賣却して運用の道を開き、深山幽谷等に立枯れ等の無き様利用せざるべからず、又製材に就ては海外の需用販路等に注意してなるべく海外より利を收むることに留意し、又不要存置林の如きは公供の團體若しくは一個人等に拂ひ下げて之を利用することに怠らず而して保安林に就ては其管にあらざるも是れ又水利災害等に注意して成るべく地方の利益を計らざるべからず、境界査定に就ては訴訟の起る場合も少なからざる如くなるが、中には故障の無理ならざるものもこれあるやに見受けらるゝに付き、其邊の處をよく斟酌してなるべく事の起らざる様心掛けざるべからず、以上列舉したるものは何れも學理と實驗とを應用し、總べて周到なる注意を以て山林の地方を盡さんことに努力あらんことを希望する處なり。尙ほ山林の副産物に就て地方人民の微細なる犯罪處分の如きは、之れを除りに酷發する時は地方人民をして不便を感せしむるのみならず、時に野火等の起りたる場合に之を傍觀し居る等

の恐れあり、又或は之に止まらず進んで放火する等の憂なしとせざれば、よく地方慣習等を研究して處理せんことを望む、之れを要するに、諸君は職務に忠實にして山林の利を起し、國家の財用を充實し、以て國民の負擔を輕からしめ、又一面には農工商の資に充つるを得せしめて戦後の經營を補翼せざるべからず、是れ直接諸君の双肩に繋るの任にして而かも重大なるが故に、今後益々精勵其職に盡されんことを望む、尙ほ來年度豫算施設の細目に就ては局長より指示する處あるべし、云々。

●滿洲の森林

本多林學博士談

林學博士本多靜六氏は河内縣學士同件滿洲各地の森林調査されたり、其途次奉天に於て大要左の如き觀察談を爲したる由。

相違に依り、杉類は何地より何地迄、柏葉樹は何々と云ふが如く土地と植物との關係上に就いて詳細なる調査をなし得たるは非常に愉快なる事にて、學問上並に植林上に聊か裨益せん事を期し居れり。又更に愉快なりしは學說上無くてはならぬ樅樹が是迄鴨綠江岸に無しと傳へられたるを、今回或嶋中に於て繁茂せる樅林を發見したる事にてありし。元來滿州と云はず韓國と云はず、大陸地方にては太古時代より屢々野火の爲め森林を滅盡せしむるを以て、漸次材木の種類を減じ僅に野火の及ばざる島と云は防衛されたる北陵の如きに其種類を残すに過ぎずして、遂に滿州の如き大原野を現出するに至りたるものなり、故に殖林事業を起さんとすれば先づ其殘存材木と緯度系にある材木を調査したる上、種類を選定して植付をなさざれば決して成功するものにあらざるを斷言し得べし、現に余が今回實見せし某試植地の如き幾萬本の苗木を内地より取り寄せ培養しつゝあるも、惜しいかな、苗木の選定を誤り居るを以て其内杉類黒松赤松吉野櫻栗檜櫟小檜樺椴椋の如きは必ず枯死すべしと思はる、稻生育の見込あるものは桑銀杏山檜等なるも其苗木は必ず北海道のものを探らざるべからず、是れ温帯の苗木は寒帯に移植

されて生育する迄に枯死するの恐れあればなり、然らば如何なる種類が滿州に適するやと云ふに、余が調査の結果によれば左の種類の材木なれば必ず生育繁茂するを疑なきものと認む、朝鮮五葉松落葉松ドロノ木アキクシ支那黒松枝葉柳朝鮮椴七カマド御山櫻キハツ水楡柏樺楡、亦北韓地方鐵道沿線に植ゑ付くべき材木の選定を囑せられたるを以て、調査の結果ドロノ木シヨダハリギノの三種指定し置けり、此三種は何れも苗木の植ゑ付容易にして且つ枯死の恐れ無く、生長早くして枝を擴げず、風致甚だ可なるものなりと。(下略)

●水力利用と森林

近着米國雜誌エレクトリカル リヴューは、近來水力利用の漸く盛ならんとしつゝあるに就き、其森林に對する關係を論せる一文を載せたり。曰く、水力の吾人に取り頗る偉大なる價值ある事は、吾人の漸く覺知せんとする所なり、電氣を以て動力を遠距離に移送する方法の應用せられざりし頃に在りては、水力は蒸氣機に比し劣る所ありしも、今や吾人は水力の全價值を覺知し得るに至れり。此の低廉なる動力を應用せんとして放資せらるゝもの頗る大なり、然れ其他の一方に

●日清合同材木會社

同會社に關する設計並に調査材料は、既に内閣に提出し目下法制局に於て審査中の由なれば、遠からず發表せらるゝに至るべきが、其資本金は貳百五十萬圓として、日清兩國に於て各百二十拾五萬圓づつを出資する筈にて、本社は之れを東京に置き、安東縣に支所を設けて諸事業を管理する豫定なり。又全會社は我が國の法律によりて法人たるの認可を受くることに内定し居る由にて、設立後第一に着手すべきは伐木事業なるが、元來鴨綠の山林は荒廢を來すが如き虞少きを以て、方今本邦山林に行ひつゝある人工補植の如きは當分之れを行ふの要なきが故に、差し當り同會社の事業は専ら伐木造林を營む筈なれば、本年度より青森大林區署に設置したるが如き製材所よりも尙ほ一層規模の大なる製材所を設くるに至るべしと傳ふるものあり。

●滿洲森林概況 (一)

昨年九月より本年二月に至る約半年、滿洲森林の調査に従事したる農商務省派遺員の調査報告中より、其森林概況を摘載すれば左の如し

(甲)南奉天、北昌圖、東興京、西新民府、方面。

國內到る處の山林は頻々として伐採せらるゝが爲め、河流の變化を被るは勿論、幾多の洪水をも惹起するに至れり、蓋し樹木を有せざる地方は水の流るゝ事急なるが爲め、降雨あれば一時俄に水深を増すのみ、是れ水力利用者の尤も忌む所にして、其最も好まじきは年中常に同調の水流を得るに在り。之に反して水源若し森林中にあらんか、水流は比較的同一調なり、故に水力の調度を維持せんと欲せば、水源地たる森林を保護する事極めて肝要なり。一舉以て水力を保護し洪水を防止するの兩得あらん。

森林の保護は極めて困難なる問題なり。政府の手を以てするに非ざれば到底効果を收むる事難し、又之と相關連して決行せざるべからざるは國中の水力測量なり。米國地理調査部の水利局は、既に或る程度迄此事業を行ひ、州中亦既に之れに關する有益なる報告を發表したるものあり。又佛國の如きも近頃本問題の調査中なれば、何れ違からず實行を見るべく、且つ同時に森林問題をも研究すべしと。

佛法は障子の引手蜂の松 評六

火打袋に鶯のこゑ

當區域内に於ける森林の狀況は頗る簡單にして、無立木地に非ざれば樹種數個に限れる潤葉樹林なりとす而して其森林の大部は東清鐵道より平均拾里以東に存在し、是より以西に至りては間々人家の附近路傍墓地及廟陵に在るのみにして特に擧ぐるに足る可きものなく、唯奉天の北陵及東陵(一名福陵)の森林は平地林、丘陵地に於ける松樹生長の比較參考の資と爲に足る、即北陵の森林は茫漠たる平原を以て圍める平地林なる爲め、風の侵入多きを以て直徑生長は上長生育に比し頗る大に枝條從て多し、之れに反し東陵は丘陵起伏せる所なるを以て、其露間にあるものは其上長生育頗る多く枝條少き美林を爲せるを見る、而して兩者孰れに在りても其材積は我國に於ける松樹林に比し些か遜色あるを認めず、尙ほ其他の林況を其所在地に就て記せば、

(一)馬蘭火浴附近。區域は馬家寨より馬蘭火浴を経て沙寨堡に至る一帶にして、樹種及歩合はカシハ五分ニレ三分ヤナギ類二分、面積及び材積は約五千町歩八百尺内外にして、此附近森林の多くは林齡二三十年生なるカシハ及ニレの混滑林にして往々カシハの純林を見る、而して萌芽後一二年生なる樺林少からず、秋季其

葉紅を呈し恰も我内地の紅葉に比すべき美觀を呈せるものは主として樺の幼林なりとす、ヤナギ類は主に平地に在りて盛に生長せり、此地都會を去る遠からざるも日露戰役前に在りては鬱蒼たる森林に乏しからざりしと云ふ。

(二)下肥地附近。區域は老爺嶺、下肥地より張寨子に至る附近一帶にして樹種及び部合は、カシハ二分ニレ三分白楊二分樺及び柳類其他三分、其面積及び材積約一萬町歩二十萬尺と認め、而して森林の大なるものは老爺嶺に在り、此處ニレカシハの三十四年乃至五十六年生以上のもの多く、土民之を建築用に供す、其他に於ては所々に散在せるに過ぎず、然れども萌芽せる幼林にして成立の見込あるもの少からず。

(三)大金廠附近。區域は新邊、孤家子より大金廠を経て大林子に至る附近一帶の地にして、其樹種部合は白楊四分カシハナラ類四分ニレ其他二分、面積及び材積は約二萬五千町歩約百十萬尺と見當にして附近頗る森林に富み、彼我軍隊の斧を入れしものもあるも其跡を發見するに苦む程なり、而して特に記す可きは白楊の純林多く、大金廠大林子間には約二百町歩材積約十三萬尺の一團林ありて、附近にある樺の純林と相並んで頗

る美觀を呈せること見なり、蓋し地勢漸く峻峻道路坂多くして運搬不便なれど、日露軍の永く駐屯せざりしとは此の美林の保ちし原因なりと信す。

(四)英領城附近。八子家子より英領城、南山城子に至る附近一帯の地にして、樹種及び都合は柵ナラ類ニレ白楊各々二部松類其他二分、面積及び材積約一萬町歩二十萬尺^ニにして八家子より英領城に至る三里架するに輕便鐵道を以て、此間殆んど全く無立木地なり、英領邊門に至るに及んで附近頗る森林に富み他に罕に見る所の赤松の岩を飾れるを見る、英領城の東北方三

道背嶺より南山城子に至る線より以北年魚嶺、分水嶺にはナラ柵及び白楊林多く、其徑八九寸乃至一二尺一二寸高さ七八間に餘れるもの互に其勢を競へり、此地方の土民は東南方の陽光を受ける事多き土地は山嶺迄之を耕し、他の部分は自然森林の成立に委するが如し

(五)官木山、王家大堡附近。區域八家子二道河子より官木山、王家大堡を経て永陵に至る附近一帯にして、樹種都合は檜樅四分柵二分白楊ニレヤナギ類三分シホナ

サハシバ、クルミ類朝鮮五鬚松一分面積及び材積約五千町歩十五萬尺^ニにして、八家子附近は人口稠密なる都會村落比較的多きが爲めに森林の伐盡されしもの多

りても其軌を同するものなれども、一は日露戰役に於て特に森林上に一大打擊を受けたるに因らずんばあらず、次に樹木生長の状態を見るに其量決して少しと云ふべからず、又其樹産頗る少數の調葉樹に限れるも造林方法宜しきを得ば針葉樹も亦成立の見込十分なり

即ち大林子、八家子、英領城附近の地質は我秩父古生層に酷似せるを以て幼時霜害を防ぐに注意せば扁柏は生育するを得べきか、殊に赤松朝鮮五鬚松の如きは何れの地にも造林するを得べし、夫の奉天北陵及び東陵に在る亭々たる松樹林を見るも其何れの地も松の生育に適せるを認むるを得べし。

(乙)東嶺麓、賽馬集を経て新兵堡に到る西遼河、南蓋平北奉天方面

本區域に於ける森林の成立たる悉く天然生にして、松花江及び鴨綠江流域の大部分は針葉樹二分調葉樹八分の混原生林にして、幼は一年生より老は數百年を起す

へ樹木生存限界に達せるものあるを以て林齡一定せざるも概して高齢なりとす、地味は肥沃にして濕氣に富めるを以て、老嶺附近及瀋江圍地の如きは殊に濕潤地多し、種樹は能く發生の下水を爲せるが故に林相極め

く、八家子より二道河子に至るに屈曲十數回せる渾河を横りて進む間、河の右岸には檜樅樹の森林繁茂し林齡平均二十年に達するを見る、其他各所に小圍林の散在せるあり、王家大堡に於て朝鮮五鬚松約十五町歩林齡八十年乃至百年此材積約一尺五寸尺^ニを見たるは頗る珍とする所なり。

(六)永陵、營盤附近。區域は永陵より木齊、尙家河を経て營盤に至る附近一帯にして、面積及び材積は約八千町歩約十八萬尺^ニにして樹種及び都合は檜四分柵三分白楊其他ヤナギ類二分柵一分なるが、此附近に於ける主なる森林は永陵、木齊間の道の左右に存在する所謂龍崗封禁なるものはなり、面積約五百町歩檜柵白楊柵を主とし十萬尺^ニを算し得べし、平均林齡四五年乃至七八十年平均直徑一尺内外平均高十間に至る他は特に記すに足るべきものなし。

是に因て概括するに、森林面積約六萬三千町歩材積約二百萬尺^ニ、樹種は檜柵白楊を主とし、檜柵ヤナギ類之に次ぐ、即ち殆んど全く調葉樹にして針葉樹は赤松朝鮮五鬚松の存在する所あるも僅少にして之に比すべくもあらず、而して現在蓄積の分布より推すに繁榮なる都會村落に近き程無立木地多し、是れ何れの國に

て不整なりとす、針葉樹は群生混生を爲せる箇所あれども多年調葉樹中に散在混生し頭角を現せるを以て一見針葉樹の混生多きが如きも、林内に入り細かに觀察するときは點生するに過ぎず、左れど針葉樹中には老大なるもの多く目通直徑二尺全長十數間のもの少なからず、調葉樹中にもニレ、シナノキ、カシハの如きは老大なるもの少からずと雖も多くは大小不同なりとす、一町歩の蓄積は廣大なる森林にありては正確に知るに由なしと雖も跋涉したる地域に於て粗密を平均し全面積に通ずる材積を概測推定したるに針葉樹に在りては平均八十尺^ニ(此本數十五本乃至三十本)調葉樹平均三百二十尺^ニ即ち平均一町歩四百尺^ニを算するを得たり、哈密河流域は由來林相密にして有價樹種に富めるが故に早くより利用せられ渾江を流下する筏材は重に哈密河流域より伐り出したるものなりと、故に本流域の中流以下は(通化より約百十里)既に擇伐利用したる残存木に過ぎざれば林相粗なれども、上流に位置する青甸子より馬鹿勾の一帯は斧斤の會て入らざる所謂原生林(ウルツド)にして、鬱蒼たる密林なれば差當り事業を開始するに適當なるは此哈密河流域なりとす渾江流域も亦八道勾以下は擇伐利用したる残存木にて

●滿洲森林概況

(二)

各樹種とも枝徑屈曲多き悪木にして材材となるべき部分少なければ利用に堪へざるも、上流の金廠三岔子附近に曾て斧斤の入りざる密林ありて哈密河流域に亞ぐ良林なり、哈密河の支流たる二密河大連河流域にも針葉混溶林ありて前者に酷似すと雖、林相稍や劣れり、濛江圏地は丘岡林にして低温地多く針葉樹の存立を許さざる箇所あれど、概して林相前者に酷似せる原生林なりとす、而して本圏地は絶対的の林地よりも相對的林地多ければ、人口増殖の曉は今日の原生林も將來は農耕地として開墾せらるや必せり、況んや華樹林子には拓墾局濛江に開墾事務ありて、吉林省より本圏地開墾を奨励するに於てをや、爽皮甸圏地の森林も亦前段の林相と酷似したる針葉混溶林なれども、本圏地の北半部は氣候の關係上西伯利亞の森林に似たる所ありて、針葉樹中にも寒氣に堪ふる白檜の混溶部合前者よりも多く、縦は之に反し北半部より著しく混溶部合を減じ殆ど生育に堪へざる所あり、左れど縦に代はるに白檜あるを以て林位は敢て前者に譲らず、本圏地も亦濛江圏地に等しく原生林なるは氣候寒冷なる東北方僻在し、附近の人口稀薄なるが爲なり永陵圓頂山以西の圏地は全く落葉凋葉天然林にして主木はナホナ

ラ、ミデナラ、カシハ、ニレにして樺類楊柳類楓類等の雜木之に混溶す、林齡は一定せず、蓋し圓頂山附近は清皇帝發祥の舊跡地と稱へ往古より禁伐林なりしを以て殆んど原生林なれども、其他の箇所は高齡のものを隨時採伐したる殘存木なれば良木少なく目通直徑一尺内外全長七八間を超ゆるもの少しとす、分水嶺の圏地も亦オホナラ、ミヅナジ、カシハ、ニレ等落葉凋葉樹を主木とせる潤葉天然林にして、林齡は一定せざれども概して圓頂山附近の禁伐林に近く、高齡のもの大きは此圏地は比較的大なるを以て未だ曾て採伐利用せざるに基因す、本圏地は密なる箇所は一町歩の蓄積五十棚を算すれども、平均は二十棚内外なりとす、今本區域内に於ける森林所在地及び林力の概略を流域により區別すれば左の如し。

第一 濛江流域。(一)哈密河此流域一帯の森林延長十九里平均此方里は通化より三十里と推定したるも、南方約十一里間は既に有價樹種の採伐跡地なるを以て殘餘の十九里間を針葉混溶天然林延長と推定す、概定見積面積十五萬町歩此見込材積六千萬尺、内利用見込三千二百二十萬尺、未利用見込四千六百八十萬尺、成材見込九百二十八萬尺。(二)老嶺山脈。此山脈は帽兒山の

北部北老嶺より濛江の上流を南し、鴨綠江と濛江の中央を南下する山脈にして、北老嶺附近にては實際の林地は哈密河森林と合するものなり、老嶺の森林延長約十五里幅員約一里此方里十五里と認め、概定見込面積二萬三千町歩此見込材積九百二十萬尺、内利用見込二百三萬尺、未利用見込七百七十七萬尺、成材見込百四十二萬尺。(三)龍崗山脈。本山中最も森林の集團したる地方は向陽鐵の南部附近(面積約一萬五千町歩)孤山子南部(面積約五千町歩)(三)叉子附近(約一萬町歩)其著しきものとす、森林の延長二十五里幅員平均約一里と推定す、此方里二十五里にして概定見込面積三萬九千町歩、此見込材積千五百六十萬尺、(内)利用見込三百四十三萬尺、未利用見込二百二十七萬六千尺、成材見込三百四十萬六千尺、以上濛江流域に於ける諸森林の面積及び林力を合計すれば面積二十一萬二千町歩材積見込八千四百八十萬尺、(内)利用見込千八百六十六萬尺、成材見込千三百十萬六千尺)なりとす。

第二 松花江流域。(一)濛江圏地。本圏地は東西を幅員とし南北を延長とす、其位置哈密河森林の北部に位し濛江を中心としたる大森林にして、其地勢丘岡状を爲し僅かに濛江の南方約一里程に稍や高き一山あるのみ、

森林の延長約二十里に涉り幅員平均七里此概定方里百四十方里にして概定面積約二十二萬町歩此見込材積六千六百萬尺、(内)利用見込四千二百五十二萬尺、未利用見込五千四百四十八萬尺、成材見込千二百七十七萬尺、(二)夾皮溝圏地。本圏地は東西を幅員とし南北を延長とす、本林は夾皮溝の東部に在る大森林にして附近著名の名稱を襲用し本名稱を附す、森林の延長約二十里幅員約十五里此概定方里三百方里にして其概定面積は四十七萬町歩此見込材積約一億四千百萬尺、(内)利用見込二千八百二十萬尺、未利用見込一億二千二百八十萬尺、成材見込千六百九十二萬尺にして以上松花江流域に於ける森林の面積及び林力を合計すれば面積六十九萬町歩材積見込二億七百萬尺、(内)利用見込四千二百七十二萬尺、成材見込二千九百九十九萬尺)なりとす。

第三 濛江流域。圓頂山圏地。平圏地は馬連頓嶺より圓頂山に至り永陵街道の南北及び邊外堡并に其西南に亘る森林地帯を云ひ、東西の延長約六里南北の幅員平均約三里此方里十八方里にして概定面積約二萬八千町歩(内)潤葉森林千五百町歩凋葉新炭林二萬六千五百町歩)なりとす。

第四 太子河流域。分水嶺圏地。本圏地は南北の延長六

里東西の幅員一里此方里約六方里にして賽馬集と南孤山との中間に位す、概定面積約九千町歩此見込材積百八萬尺^ベ(内利用見込十九萬棚成材の見込五萬四千尺^ベ)と推定す、以上渾河及び太子河流域に於ける森林の面積及び林力を總括すれば面積三萬七千町歩材積七十四萬二千棚二十六萬尺^ベ(内利用材見込十二萬八千尺^ベ)薪材五十萬八千尺^ベなりとす。

● 滿洲森林概況 (三)

(丙) 北水陵與京廳懷仁縣より渾河口、南岫嶺より大孤山、東鴨綠江、西城廣賽馬集草河口、鳳凰城岫巖方面。

本區域は老嶺山脈の一部にして白石砬子山系に屬す。白石砬子山系は概して東北より西南に走り、全區域を鴨綠江及び遼河の二流域に分つ。其遼河流域にして東清鐵道に沿ふ部分は一望千里渺漠たる平原なるも、東進するに従ひ起伏漸く甚しく、大小摩天嶺分水嶺新開嶺小平嶺等の嶮あり。然れども地勢一般に險峻なりとせず。鴨綠江流域は遼河以北にありては崎嶇極まりなく、山又山にして、遼河流域に比し地勢一般に急斜海抜七八百メートルの高峰所々に屹立し、老嶺黑溝嶺半

拉嶺鳳凰山白石砬子坎嶺嶺五道嶺鎗草嶺の嶮あるも、我が四國紀伊飛騨越中地方の如く急峻ならず。遼河以南の地は地勢漸次緩漫に移り、遂に低丘を爲すに至る地質は川流に沿ふ部分を除くの外は、古世層若くは中世層なるが如し、遼河流域特に賽馬集及び城廠附近は石炭に富み、間々鉄礦を産し、渾江の流域に屬する部分には砂金を産すと云ふ。氣候は峻酷にして、冬季に於ては萬水皆凍結し、風威劇烈十二月の候已に氷點以下十數度を下るを常とするも、夏季に於ては炎熱煩氣の感あるべきは、懷仁方面に於て藍煙草亞麻等の完全に耕作せらるるを以て推定するに難からず。森林帶上より云へば温帯乃至寒帯に屬するも、夏季に於ては温度甚しく昇騰するを以て、樹木の成長頗る良好なるべきは、紅松の人造林其齡五十五年にして平均直徑九寸高さ八間、杉松の人造林其齡三十年にして平均直徑七寸高さ六間に及べりものあるに徴して知るべし。本區域は前述の如く平野比較的少きを以て傾斜甚しく急峻ならざるの地は山頂迄も開墾せらるること我四國中國に於て見る所の如し。而して開墾の困難なる急斜地、若くは岩石地は總て森林を成す、森地と森林外地との比較は局部により一様ならざるも、全面積の凡三

十パーセントは森林地と見做して大差なかるべし。森林の大部分は主として柞木(シメギ、ナラ、カシハ類)楡木(ニレ)色木(カヘデ)榎木(カツラ)樺木(カバ)楊木(ドロ)柳木(ヤナギ)等の落葉潤葉樹の單純、又は混生天然林なり。面積は一區域として廣大なるもの稀なりと雖も、各圍地を集計するときは約三十八萬町歩に上るべし。従つて之より生産する材量も亦多大のものたるや知るべきなり。即ち毎町歩平均三棚とするも百十萬棚に上る。其材木は遼河以北にありては主として薪炭材として利用せられ、地方人民は全林に亘りて伐採利用するを以て老大なるもの少く、稀には數十本或は數百本の老齡木塊狀に残存せるものなきにあらざるも是等が必要に應じ所有者又は地方人民の建築材枅材器具材として供用するに過ぎず、遼河以南は柞蠶を飼養するを以て材木は薪炭材として悉く利用するを得ず、遼河以北に於ても柞蠶を飼育せざるにあらざるも至つて微々たるものなり。

潤葉樹林中の最大なるものを分水嶺の森林とす、又針葉樹と見做すべきものは大恩保小恩保後牛毛溝大青溝小青溝大冷溝前牛毛溝黒古洞向水溝三道溝二道溝等の森林とす、其他到る處墓地に杉松(ウラシロモミ)紅

松(チヨウセンゴヨウ)又は油松(アカマツ)を造林せるあり、或は苗木を養成したる床地に其儘放置せるもの森林をなすあり、或は岩石地に天然生の油松の群生するありと雖、此等は概して面積狭小樹齡幼若にして材積僅少汎く需用に應ずる能はず、僅かに所有者又は地方の必要に應じ伐採利用するに過ぎず、本區域中著しき森林を擧ぐれば第一分水嶺の森林にして、賽馬集に西北四十清里南孤山の東南二十清里に亘り海面を抜くこと四百五十メートル、地勢急峻ならず道路中央を貫通して車馬を通ず、太子河水源の一部を爲し運搬尤も便なり、太子河は遼陽を経て遼河に合する水流にして遼河地方に出ず材木は概して太子河を發流せり、本林は柞木榎木色木楊木等の落葉潤葉樹の混生林にして面積凡七八千町歩、老大木は數十年來連年伐採の結果漸次其數を減じ現に用材に適すべきも甚だ少しと雖も然れども全林の總用材を積約百萬尺^ベ薪炭材約七八萬棚を得べし。地方人民は毎年數十人の合資を以て本林の伐木に従事し、冬季積雪を利用して北方約十清里なる將軍石に運搬し、該地に於て筏を組み春夏の候太子河を流下して遼陽城外俄房に輸送す、毎年の出材高凡二三千本なり、造材は主として九太にして長十尺十八

尺廿二尺の三種とし、元口直径一尺内外のものは九十本を以て元口直径一尺五寸内外のものは八十本を以て一袋の量とす、本林より伐木造材し日露船役の爲め搬出を了る能はずして山床及び將軍石に設置しあるもの約二千本あり、俄房一ヶ年の出材高に伯仲すべし、地方人民の經營に係る事業費は立木代大小平均百本に付き三十圓、此代木造材及山床より將軍石迄の運搬費百圓、將軍石より俄房迄の袋流費一袋に付き凡百五圓にして、經費合計一尺に付凡二圓前後に當ると云ふ

第二は大恩保後牛毛溝の森林にして、本林は平頂山の東方約六七十里懷仁縣の西方約三四清里に在る一團地にして白石砦子山脈の一部に屬す、海拔五百五十メートル地勢概して急斜地味肥沃、深間の延長凡三四十清里面積凡三十町歩にして元來杉松江松楡木樺木色木等の針葉混溶原始林なりしも、老大にして用材に適するものは既に伐採し盡し現存するものは幼木にあらざれば用材と爲すことを得ざる材木なりとす、本林及び附近の地に搬出未了の角材及び丸太材約五千本を堆積せるを見る、本林は所有者なく立木代を要せず、山床より平頂山迄は道路險惡なるも馬車を通ず故に木材は之に依りて搬出し、平頂山に於て筏を組み太子河を降

下して遼陽に輸す、伐木造材費一斥(一斥は七百二十寸にして長八尺即ち四、八尺に當る但し一尺平方を百寸とす)一圓五十錢(一尺に三十一錢三厘)陸上運搬費一斥(馬車一斥積十圓)一尺に二圓八錢三厘)後流貨(一袋五斥立)八圓(一尺に一圓六十六錢六厘)一斥の經費合計十九圓五十錢(一尺に四圓六錢二厘)平頂山より遼陽迄の筏流日数は十日乃至廿日を要す。

第三は大青溝小青溝大冷溝前牛毛溝の森林にして本林も亦白石砦子山脈の一部にして懷仁縣の西南約六七十里に在り、前牛毛溝は後牛毛溝と腹背を爲し面積四百町歩を有す、大青溝小青溝大冷溝は前牛毛溝と川を隔て、相對する一團地にして面積凡二千町歩あり、地況林況略は大恩堡一團の森林に髣髴す、前牛毛溝の森林には伐株跡地に杉松の雜樹所々に密生し天然更新の絕對的に行ひ得べからざるものにあらざるとを證す本林は所有者なく立木代を要せず、伐木造材運搬等の經費大體に於て大恩堡一團の森林と同じ、只馬車運搬費に於て三圓の多額を要するのみ、第四は黒古洞向水溝三道溝二道溝の森林にして本林も同じく白石砦子山脈の一部に屬し、黒古洞向水溝は一團地にして城廠地方に於て大梅林と稱せらる、寬甸縣の東北約百三十四

十清里に在り、面積凡千三百町歩なり、三道溝及び二道溝は前者と腹背を爲せる一團地にして面積凡千町歩あり、黒古洞向水溝及び三道溝は地況林況大恩溝一團の森林に似たり、二道溝は地勢急峻にして所々に白色の大岸巨石屹立す、白石砦子山の稱蓋し之に因るものならんか、海面を抜くこと七百餘メートル上天臺山觀

安官白石砦子と稱する寺院の所有に屬する禁伐材にして杉松及紅松の老大木比較的多數なる針葉混溶林なり往々直径三四尺に及ぶものもあるも用材に適するものは一萬尺内外に過ぎざるべし、向水溝の森林は五道河子に住する王殿尉の所有なるも、木代を拂はずして採伐することを得、三道溝及び黒古洞の森林は無所有なるも伐木する時は一斥に付五十錢を地元へ納付するを要す、木材は冬季牛馬をして積雪上を牽引せしめ二百四十清里に在る東營房に搬出し同地より筏を組み太子河を流下して俄房に輸出す、伐木造材費(一斥一斥は八十二寸とす)一圓五十錢(一尺に三圓)當る但し一平方一斥十圓乃至十五圓(一尺に二圓乃至三圓)後流貨一斥八圓乃至十圓(一尺に一圓六十錢乃至二圓)一袋は四斥又は五斥立とす一斥の經費合計十九圓五十錢乃至二十

六圓五十錢(一尺に三圓九十錢乃至五圓三十錢)山床より東營房迄の運搬日数は四五日、東營房より遼陽迄の筏流日数は七日乃至二十日間を要す。

東鴨綠江を界とせる滿漢境界線、西與京廳より懷仁縣に至る滿洲交通圖上の通路、南懷仁縣より渾

江、北與京廳より通化縣に至る方面。
●針葉混溶林の分布。本區域なる懷仁以北に於ける渾江各支流中少數ながら、紅松杉松を現存する區域を流域別により叙列すれば、一、渾江の本流、二、哈泥河、三、大羅圖溝、四、大平溝、五、新開河、の五流域なりと雖も、起業上より視ての紅松杉松は右一より三に至る三流域に過ぎず、渾江の本流中比較的運搬便なる通化縣内は已に伐り盡されたるも、輯安縣内に入りたる運搬不便の地は尙ほ廣き區域を存して出材額最も多し、哈泥河流域は北は所謂白山系なる老崗を以て松花江上流との分水嶺に及ぶ地域にして、假令初期の松花江ならざるも未流に亞ぐぬ地域にして、松花江上流大森林の餘勢を受けたるご運搬不便の爲め今日迄保持せられたるに因るものにして、大羅圖溝流域是亦本流に近き運搬便なる地點は殆んど伐り盡され、殘存せるは六道溝以奥のみ、大平溝新開河流域は老崗の支脈なる老

爺嶺即ち東面鴨綠江に直注する小支流と西面渾江に注入する大平溝新開河との分水嶺上南北に亘る帯狀の概林内に混在す、其帶狀と雖も西渾江に面する地點のみにして東鴨綠江向きは傾斜急なるに拘らず、本流に直注の便あるを以て殆ど伐り盡され、其他倒木溝上流に採伐林あり。

潤葉林の分布。潤葉林の分布は老嶺附近より老爺嶺左右に存在せり、從來市場に搬出せらるる潤葉樹の用材は前記混滑林中より紅松杉松と同時に出来るものにして、本邦内地に於て見る如く用材的原生潤葉純林は之を發見すること能はざりき、本林中に於て尙伐採すべき用材的潤葉樹あるべきも散點せる狀況よりして起業上の價値なきものと認めたり、混滑林潤葉喬林及び農耕地を除ける大面積は實に矮林の點領とす、矮林の重なる樹種は耐火性の柵にして楡の點生白樺の群生あるも全體より見れば九牛の一毛に過ぎず、斯かる大面積の柵林に變じたる時代如何は之を斷言するに躊躇すと雖も、東邊外移民の速度より推するときは決して數十年の古きにあらず、八道江以奥は目今柵林に變化しつつある時代なりとす、而して白樺の群生狀態により察するに開墾數年後天然肥料の減少したる爲め抛棄せ

る跡に第一樹林として局部の純林を爲せるもの、如く直樹木は平均直径五六寸長さ三間内外なり、故に市場に送るべき用材に適せずして只僅かに地元需要薪炭材柵等に過ぎず、若野火に遇ふことありとせば直ちに柵林に變するを見るべし、散點の楡亦平均直径尺未滿所々孤立の大木あるも屈節多くして市場の用材と爲すに足らず。

青々の焚煙の聲

草庵に御越しの方々にほしはらく煙草のむ事を御幸抱御申候若し一刺半時の坐談にも煙草のなきて吐はぬ御方は用事を葉書に承り可申候御者往來の暇病臥來煙草の煙の眼に入る事の極めていぶせく難耐候煙草の煙は花をも害ない候由依て門前に焚煙の制札を令相立候事知件
花うゑて煙葉じづ春の宿

文 苑

長 歌

- 美ならずや
其處に笹川流る
- 高き峰 低き柵
アナ美ならずや。
- 牧童の叱聲 山女の呟き
其處にいとしき情横はる
アナ美ならずや。
- 木挽の響 樵夫の歌
其處に平和宿る
アナ美ならずや。
- 牡鹿呼び 牝鹿應ず
其處に神秘潜む
アナ美ならずや。
- 黒河内兄を送る
天の星 地の藁ども
慕ひつる 君往きまざば
残るこの身は、

- 男子らは 別れの際に
言はぬもの 多く語るは
少女童子、
- 君往かば 誰と語らん
あなうたて 人の唇にし
多き世なれば、
- 往く人は 且く往けなほも
たわますに 且つも巳の
隙をまもれよ。

和 歌

- 春來れど雪また残る芝山に
今日鶯の初音聞きけり
越えて行く木曾の山路は寂しども
風も色あるふくしまの郷
雪霜の諸將を具して冬王の
- 去りば女神の春あたゝかき
夕榮の色もいつしかわすれ行きて
川風涼し木曾の河の邊

雨晴れし青葉若葉の木下道

風ををりをり露のこぼる、
春がすみいつしか消えへて木曾山の

○青野山如意輪堂にて 安井正夫
青葉に代る夏は来にけり
やしりもてかき残したるふみれば

○富士山
ふらぬ雨にもそてはぬれつゝ
大そらにひどりそひゆる山なれば

○遠州瀬尻山杉の植林を見て金原明善翁に
よみ送る
富士ごや人のいひ名つけゝむ

瀬尻山かざる峰の杉むらは
よみ送る
きまか名高きしるしなりけり

○伊勢に詣て、
世にいちゝるし伊勢の大宮
物ふりて神さひにけりされはこそ

○みやこにある友人の許へよみ送る
たのしさはいちの中よりなかなかに
なるればふかき山の奥かな

○寄山祝

大きみの高きみいつと富士のねは
外国人も仰きみるらん

○大嶋先生の御別れに臨みて 安井正夫
君が行く越の白山しら雪の
道さゝえなば歸り来ませよ

○同じく
今ほよしつれなき袖を別つとも
またの逢ふ瀬を待つぞたのしき

○亡き母を思ひて
母を思ふ胸の涙の隠れ岩
潮の満干に乾くまはなし

○友の遊學を送る
敷島の大和錦を重ねきて
我が故里を照せ我が友

日蓮上人の報告
新巻一斗。たむむ三本。油のやう。酒五升。
南無妙法蓮華經と問向いたし候

○東京にあるとき
ことごとこころうつりてしきしまの
みちのゆくてもむすればてつゝ

○山 居
足引の山又山の奥すまひ
ふあきこころのあり顔にして

○御料林事件に盡方せられたる嶋崎廣助君
によみ送る
つくされし君か功は木曾山の

○御料林事件の解決をよろこびて
さかえぬのちそあらはれにける
つくされし君か功は木曾山の

○御料林事件の解決をよろこびて
さかえぬのちそあらはれにける
つくされし君か功は木曾山の

○南信探勝隊の一行をよろこびて
さかし来るみやこの人のめくみにて
きこえそむらん木曾の山水

○備前岡山の高等女學校にある娘のもとへ
よみ送る
須摩明石ゆきかふみちにありとさきく
ことになつかし岡山の里

俳 句

繪筆見えてのどかに田植かな 玲 朝 生

○からかさをかざして見るや杜若 黒 朝 生

○祝ひ込む 萬歳晚し 木曾の谷 蘇 岳 居 士

○本枯しの吹き出したる 峯の月 曾 間 人 の 斧 ぶ り かね し 櫻 かな

○山 林 學 の し ら べ な か ば や ほ と ぎ す
校 友 の 水 莖 う れ し 花 の 沙 汰

○立つ春や木曾に照る日のうろはしき
涼しきやラムネの泡のきゆる音 小 波 生

○水屋をさがす宿場や夏の月 黒 河 内 先 生 の 別 れ に の ぞ み て
わすれてもまたと會津の男松 深 水

詩

送別詞

其一 送黑河內君到七笑橋、

米山 靜軒

風渡曉霜落葉鳴。此朝蕭々送君行。
勿言蘇峽秋往早。橋上離愁天有情。

其二 送大嶋君到寢覺牀、

曩日迎君春雪深。秋風送別楚江灣。
時看孤鷗雲入去。即酌離杯敘我襟。

○送大島先生

森田 溪水

落去越山前路微。落花流水淚沾衣。
惘然離別幽懷切。曾約斷金君勿違。

○全上

靜 軒

霜滿橋頭殘月微。北風習々卷征衣。
離別一朝千里遠。只今同是舉杯勸。

(以上各詩皆九年晚秋題稿)

滿洲みやげ

僕等が滿洲に居つたとき、支那人の饋湯に折々行つた、
そころたが暖かい湯がない風呂で一浴五銭取るには驚
かざるを得ないが、今五銭發すること頗や腕の毛を割つ
て呉れる、尙も五銭はづれば手足の爪を切つて呉れる、
之が一切錢湯屋で間に合ふのだから一寸便利也。

記 藻

片々

し ま

- 木曾御料林面積三十四万八千余町歩而かも其過半は
檜樾櫛櫛明檜の美林なりとは木曾森林の名ある所以
- 西筑森林殆んど御料林就中瀬戸川經川小川入阿寺入
柿其著名なり而して其面積一万四千二百五十一町歩
- 小川入の森林檜八分を占む然れども接續地の阿寺反
りて樾八分恰も青森に羅漢柏秋田に杉を見る感あり
- 阿寺輕便鐵道布設當初の目的運材にあらず中途變更
して今日に至る不合理の箇所ある元より之れ當然也
- 木曾森林盜伐火災の少なき我國稀に見る處の美点こ
の住民の愛林の念深きため藩制の嚴なりし余波か
- 縣内存在國有林五十五万余町管理官廳長野大林區署
に松本安曇大町白田岩村田上田長野飯田の八小林區
- 小川森林鐵道を布設し上松驛にて中央西線と連絡せ
しめんとはよき思ひ付之を我國森林鐵道の嚆矢とす
- 吾妻村産出の檜笠一年五十余万蓋其價格一万七千五
百圓以上とは流石檜林に名ある木曾之れ計りても明
- 木曾植樹人夫一人一日平均三十六錢一日の行程凡そ

山林改良歌

我日のもとは千早振る
神の植えたる八千木植
茂り榮むて一本だに
さほりさばある木々まほ
殖林法の改良を
種を播むが第一ぞ
曲りなき木をえらみ取れ
踏登りつ、植付けて
夏秋二季に刈されば
樹木繁殖する時は
樹田の水も不足なく
土地のちひなき防ぎつ、
秋の野分も冬の日の
深山幽谷さびなく
殖林法をつこめずば
世にまわれぬ事ぞ知れ
們樹に檜の類ひ
落ちたる者を拾ひ取り
純褐色なるを撥ぶべし
土質氣候のさびなく
樹下の雜草刈りのぞく
それより後はいつまで
斯くては林は繁茂して
國家の前途を思ふなら
樹木を山野に植付けて
はげめやはげぬ此業を
(農業世界改良)

神代のむかし美佐之男
高低山にいたるまで
足らばわめはなかり最
植付け手入れに念入れて
講ずるこそは急務なれ
松杉檜さばらこそ
嶮阻の難の奥までも
樹下の雜草をさす
たちまち生長するぞかし
大に氣候を調和して
夏の照る日も涼しく
夏の作りも枯潤せず
木枯しなきへ防ぐべし
開墾の業進む世は
たゞりてはの缺乏は
そも新炭の真材は
們のたれば自づから
形は丸く大きくて
其木の苗を植ゆるにハ
植えての後も怠らず
五年に承らばうひきりし
七年毎に切るこそしれ
永世不朽につきぬなり
子孫の爲を思ふなら
殖林法を講ずべし
つこめやつこめ此法を
(農業世界改良)

- 百八十本一本の植栽二厘券銀の高きにあらず斜傾急
- 城山林道開けて新たに遊歩に便を之朝夕美林に接近
して自然と同化し得るとは都人士の夢にも見ざる處
- 野尻出張所附屬苗圃の檜苗毎年コガネムシの害を被
り三割以上の枯損とは何ぞか之れが豫防法はなきか
- 林區署所屬森林主事一千四百二十人其過半は林學の
素養なき者營林及林野保護の及はざる故なきに非ず
- 韓國近き將來林區制を設け植林となす計畫なりと如
何に林學修業者を出すも猶且不足を感ずるや明なり
- 清國輸入木材多くは米國産就中多數はオレゴンバイ
ン我國彼れに代用する落葉松を植栽し將來輸出せよ
- 北海道獨立經營森林により立案せりとばしたて然ら
ば森林の重要視せらるゝ漸く北日本にも及びたるか
- 明年奈良農林高等農林學校に變更せらるゝの噂高し
我校宮内省直轄高等農林學校となるはたして何時か
- 里道校舍に接近して設けられ學校大打撃を蒙る茲に
至り移轉の必要多々益々その候補地は上松か小川か
- 木曾の紅葉は天下に比するものなしこれその色の美
なるのみならず緑り深き檜樾の間に散在すればなり
- 天は高し氣は清し百余の健兒を得ば山川を跋渉せよ
而して燈火親しむべき此好期林學研究に熱心なれ

● 駒場便り (第三信) 高橋 博君

○謹啓將に炎暑の候に相向はんと致し候處、我が敬愛せる諸先生を始めなつかしき同窓生諸兄、並に生徒諸君には益々御壯健にて御暮し遊され候段奉欣賀候。降て生業別状なく職務奮勵罷り在り候間、乍他事御放念被下度候。

○昔て二三年生徒諸君が修學旅行として親くし此地を踏査せらるゝや、校長閣下より力めて便宜を計るべき下命に接し居たりしにも拘はらず、固より東播の身の然らしむる處、一向に無風情なりしは實に遺憾千萬の事に有之候。

○余昔て某教授に付て聞く、曰く今や世人の林業に注目するもの漸く多く、青年學生の之れが學術の研究に従事するもの又急に激増し來り、そが學校の新設は年と共に殆ど幾何級數的增加を見るの盛況を呈す、然るに社會の需要は限りあり、此れ等無數の卒業者を悉く收容し得べきものにあらずして、今后數年を経るに至らば激烈なる競争に依り、少數優者を除くの外は或は滿韓に或は臺灣北海道に向て職を索めざる可からざるに至るべし、殊に甲乙種の山林學校農學校の卒業生

呼又寒心すべきに候はずや。素、人情の常として流行を街ひ美衣を裝ふは、皆人の欲する所なる可しと雖も、自己の身分をも辨へずして、徒に美麗なる衣を纏ひ高襟を着けカフスを嵌めチツクを塗たごて誰かは以て賞揚するものぞ、吾徒を以て之を見れば嘔吐を禁する能わざらしむ。總て流行なるものは自己を以て階級の上にあるもの、風を模倣せしむるものなれば、之れを應分的欲望とは決して言ふ能わず、目のあたり得々として模擬狂の奇劇を演じつゝあるものなり、誰れかは憐れに思わざるものぞ。

他は兎に角に、吾人林業界に献身せんとする者にありては、苟も流行に目を注ぐが如き事あらば、之れ決して輕々に黙視する能わざる事と存候。蓋し吾人の身分を省るあらば、世の流行を追わんとするが如きもの、位置にあらざるを思はざる可らず候。

○生近日一雜誌を繕きて、我が世の青年に示さんとするの格言を得たれば、少しく添削して之れを諸君の參考に賢せんとす、幸に全成あらば本懐に御座候。

燕の巢を吊る奈良の酒屋 句傳
親知らず子知らずを飛ぶ燕 華園

に在りては、自ら鑲嵌を手にして進んで事に當り悉く職を勞働的に求めざる可からざるに至る可しと。

○某先生の説甚だ過激に亘るの觀なき能はずと雖も、遠からざるは將來に於て吾人の競争者は各方面より大舉して來る可きは明かに推知致され候、其時こそ吾人たるもの喜んで是等競争者と正々堂々勝敗の決を天下の公論に仰ぎ以て彼等を凌駕せざる可らざる義と存じ候。

然らば、何をか吾人の銃剣とす可き、覺悟は果して如何なるものなるや。

- 一、自身を辨へ、社會の流行に拘泥せず、世の同情を受くる事。
- 二、勞働を厭はず、何事に依らず、總て自己の修養なりと考へ勤勉努力する事。
- 三、自己の職分は一意専心指揮者の居ると居ざるに論なく職務に忠實なる事。

余は、右の簡單なる數項の勵行に過ぎずと、確信致し居候。而して余が日常勵行に努めつゝある處に御座候

○近日見る處、奢靡の風漸く質朴清楚の地にも其勢力を逞くして、青年學生の氣風茲に一變し、流行を競ひ驕奢を尙ふもの比々として皆然らざるなきに至る、嗚

Wisdom and Folly. (題目)

It is of course very well for everybody to wear clean and neat garments. You should dress cleanly and decently for the sake of your health and so as not to offend those whom you come in contact with. But dressing cleanly and decently is altogether different from dressing extravagantly and fashionably. The former is an act of wisdom, but the latter is that of folly. We know some young men who are simply dressing beyond their means in order to appear wealthy and smart. "Foolish" is the epithet that should properly be applied to such young men.

賢と愚

(諸君が清潔にして小奇麗なる被服を着用するは勿論結構な事である。諸君は自己の健康の爲且は又日常接する處の他人に不快の感を興へざらしめんが爲めには清潔にして端正なる服装をなすの要がある。併し、清潔にして端正なる服装をすと言ふ事は、かの奢侈にして流行的な服装をすと言ふ事とは全く別である。前者は賢者の行動なるも、是れに反して

後者は全く愚者の爲す所である。世には服裝の眞の目的を忘れて單に如何にも金持らしく且ハデに見えんが爲めにのみ、着物をきるものがある。誠に其愚や及ぶべからずである。かの Fourier と言ふ語は正に此等の青年に丁度恰當した譯名である。

(丁生補釋)

(此編題目は通信されども其内容を調査の性質を帯ぶるを以て本欄に採録する事とせり 編輯者)

●自然を愛する者は幸福なり

山梨山中にて 繪 陰 生

自然と云ふものは時々刻々と變化して秒時も止む時なれば、之を愛し之を研究せんとするものにして、若し一刻后れなば其自然美の愛者は夫れだけ一代の研究(自然に對する)后れてももうものなり、故に自然を愛するもの一時一刻たりとも怠惰なる能はじ、若し怠惰なる自然美を愛する者ありとせば、夫れは丁度俳優の紳士を氣取ると同然なり、夫れは何處迄も種類に於て異れり、而して若しも彼等は自然美の愛者たり研究者たれば、如何に強大なる誘惑來襲するも其危険は近よる能はじ、之れ其の危険たるや愛の力を打破するか愛の力に打破せらるゝかの二つなればなり。而して愛

の快活幸福満足平和の如き壯健の如き強固なる道德心の如き皆自然美を愛するより來る報酬なり。何と自然美の愛者よ、幸福ではないか、而して此の幸福なる自然美の愛は乞食と雖も大臣と雖も之れを愛し、研究するには些少の故障あるを見ざるなり。見よ、春來れば唯が止めんとするも止むる由なく、自然に爛熳たる櫻花は綻び、季梨の白花、梅桃の紅花、白花は自然に追はれて開く、而して鳥類は鶯雀を始めとして其愛者の爲めに樂みを奏するが如し。然り而して斯は憲法政事となりしによりて然るか、否花は往古より時來れば自然に開きしなり、夏は天界星月諸体光あり綠葉は此野山を被ひ蝶蜂出で、而して飛び万物皆な活氣を帯びざるはなし、秋は四方の草木皆一期となりて葉凋み、唯菊花の開き四方の山々は霜を戴くに至る、冬至れば四方は銀世界となりて如何にも一種の他世界を生ずるが如し、何と自然の變化の多きぞ。而して如何なる金満家も、豪傑も、英雄も、權者も、自然の此偉大なる變化の前に於ては頭を下げざるを得ざるなり、而て如何なる貧者も白痴も狂人もより以上は頭を下げすべし可なり。嗚呼自然は如何にも公平なるものに非ずや、然り、而して、其美は愛者にのみ向てそゞぐなり、以

の力の打破せらるゝが如きものは眞の自然美の愛者には非ざるなり、之れは自然美を標榜して或種の利益を(損?)を博せんことのみを計ればいざ知らず、自然美の研究の樂みまよと云ふものは左様なる小快なるものには非ざるなり。而して自然美の論者が如何に愛鬱なる情の之れを襲わんとする之を防ぐこと能はずして自暴自棄するが如き、薄志弱行のものに非ず、又一時的の快樂の如きは眼前に山と積むとも其れ等は此美の愛者の爲めには乞食に對する人糞尿の如きのみ、農夫ならば直ちに之を集めんやも知れざれば、乞食には用もなきか如く少しも用をなざれば入用ならざるが如く其快たるや此愛者の目には九牛の一毛よりも感し方少きなり。而して此の自然の美は吾人否其愛者にとりては少なる心配の如きは遂に其愛者を襲ふべきの期會を失はしむるを得るなり、而して其愛者をして却て生涯をして有望なるものたらしめんが爲め助力を與ふるものなり、自然美を愛するものは自然美も又之れを愛す而して此者に對しては最も良き報酬を與ふ、其報酬たるや世俗的の陰には惡事をなし陽には利にして、而して受けんとして受くるが如き陳腐も又極まれりやと云ふが如き金銀紙幣財産名譽の如きものに非ずして、身心

上の如き大なる幸福を給はる愛者とは何人を云ふか、唯一語にして盡すのみ。曰く吾人生を托する此宇宙間には實に美妙なる仙境にして、吾人は飽く迄吾人の周圍を繞る無限の美樂に味はざる可らず、唯此の一語のみなり。然り而して此自然美の愛者たる資格は實に得易くして得難きものなり、其れ人は目前の小利に翼々たるものなれば、始めの中こそは吾は自然美の愛者たりと標榜するも如何せん彼等の多くは自然美を大に愛するには相違なきも、夫れよりはより以上社會の名譽金錢情慾等の如き目前の小利に勝を占めらるゝなり、依て社會の小利の方が十中の九迄は勝を占むるが如し然れども實は然らずである、此徒は一時は自然美を味ひしも其真正なる味ある迄は至らずして止まりしものなり、然らば如何にして自然の美は味はひ得べきか、曰く何處にあるも之れを愛するを得夜は天を見れば吾人の一生を費すも究む能わざる處の諸天体は吾を待つが如し、庭に出ずれば草あり、蟻あり、蜂あり、何れも吾人の自然の美を愛すべく容易なすべく務めつゝあり然るに吾人の多くは之を愛せずして殺風景若しくは無趣味の名の下に自然の美を棄れんとす、怪ならずや、然り彼等は天罰は立處に到らん、見よ肺病、腦病、脚氣病

何れも自然美の愛者をば襲ふべきの具に非ざるなり。

●進 取 第一學年 三宅秋波生

進取、進取とは如何なる事を意味するか、抑も亦如何なるものなるか、是れを問はば必ず答へん、今日は昨日より、明日は今日より進歩し、今日の宇内の明日の宇内にあらずして刻一刻と進歩を攝取し、吾人の意志を満足せしむるものは是れなり。實に然り。人は精神上の必要と物質上の要求とによりて長く現在の地位にあるを喜ばず、是れ進取てふもの、依りて生ずる原因とも稱すべきか、進取の氣象は吾人の命脈を連絡し以て吾人をして明日あるを思はしむ、魚は水によりて生棲し、吾人は進取によりて生存す、進取なき時は枯木死灰何の擇ぶ所あらん、人たるもの進取の氣象なくして可ならんや。

進取の氣象の發するや、依りて起る原因あり、即ち物質上の必要及精神上の要求とによりて生ずるなり、精神上及び物質上の満足を來す處、必ず競争心の存するあり、既に競争心ありてこそ始めて眞の進取の氣象は生ずるなり。

見よ遠き數千年前に於ける埃及を、當時は國に食足り

●雪隣友人を訪ふ 南 雲雁生

三更月落ち夜は深く風寒し、孤燈影暗くして四面寂寥たり、此時に方りて余尙机邊に端座し筆硯を役して文を操る、然れども寒氣骨に徹し殆ど堪ゆべからざるを以て筆を捨て、褥に入らんと欲す、偶々一陣の寒風雪を載せて戸隙より入り來る、驚起窓を押せば四境暗黒咫尺を辨せず、只鷄毛の暗中に躍るを見るのみ、早忽戸を閉ぢ褥に就き一睡の夢裡に疲勞を忘れ、翌朝起き出で窓を開けば夜來の降ること數寸、六花尙歇まずして飄々空中に躍る、眸を放てば長峰山脈皓々銀を布くが如く、滿庭の枯木花を着けて笑ふ、其景を愛すべく、其状や賞すべし、覺えず快と呼ふこと再三、家人醒め來つて此に其絶景を賞す、少焉ありて雪歇み空蒼く旭日東天に昇りて銀界を照らす、即ち謂へらく白雪堆埋の中健足を試み以て一日の興を買はんと、輕装一番杖を曳きて家を出づ、向ふ所は有田郡鳥屋城村なる盟友橘の宅にして、道を生石の嶮峻に取れるなり、此日天氣温暖微風輕く袂を吹き、見渡す限り四方は銀世界、滿身快樂を以て滿され、脚進むこと飛ぶか如く、毫も行進の難を覺えず、野中宇より左轉して山徑を取る、野中

地温暖にして何の不足を感ずるなく、安樂に生を此世に受くる事を得たりき、然れども食物に不足を感じ、干地に不便を來し其他種々の苦痛に會合しては、漸く競争心の發展を來すに至れり、下りて日進歩の今日となりては競争なくして一日も此世にある事能く、實に吾人は此競争の世界に生を受けたり、吾人此競争場裡に立ちて、抑も如何なる進取的方法を取らんとするか。大洋の茫々たるは進取の氣象の莫大なるを證するなり、偉人として其名聲天下に轟くは只進取の氣象の多大なりしに由れるのみ、彼のワットの蒸氣鐘を發明せしフランクソンの電氣發明の何物たるに悟到せる、一頓挫の來るも何の掛念する所なく進取して止まず、終に能く成したるなり、彼にして進取の氣象なくんば一匹夫のみ、嗚呼必要なるは進取の氣象なる哉。

物の發展せんとするや一屈あり、知らずや、漢諺に曰く「將飛者伏翼將墮者縮爪」と呼それ進取の氣象を有するもの、亦時に一屈あるを豫期せざる可らざるなり。

雲まれし牡丹に逢へり明くる年 大歌
鳥羽藪には入りぬ安の牡丹枝 鳴響

宇より西月村に至る殆ど二里、其間道路頗る嶮巖羊腸たる坂路嶮峻の間に通じ長峯山脈最高の峰を越へざるべからず、其嶮や知るべく其峻や想ふべし、況んや積雪を埋むるに於てをや、行くこと數町山漸く近く雪愈深し、進で生石の麓に至れば山勢頗る峻しく積雪脛を没し、萬端を攀つれば雪頭上に落ち攀ちざれば登ること能はず、登行の難茲に至りて極まれりと云ふべし、然れども奮然勇を鼓し氣を勵まして進む、過ぐる所雪を掻き杖を揮ひ、戯れに書して曰く青年冒險家雲崖生通行と、書し終て微笑す、百辛萬苦漸く山頂に達し、杖に依て休憩し眸を放てば一望靡々下界亦寸青を見ず、日光銀を照して銀爲に眩せんこと、北方は即ち紀州富士にして秀峯天を衝て雲表に出づ、西北は即ち加太灣にして布帆點々鷺の斯れ飛ぶが如く鳥の翔るが如し、烟波模糊の間白龍の臥するが如きものは是を波路島となす、下瞰すれば貴志川の碧流匯々の間を走り沿岸の村落軒を並べて清く、出で、雪を掻く者は群鷄の俯啄する如く、限りなきの高雅之を水晶宮裡と言はんか將た仙境と言はんか春花秋月決して比すべきにあらんか、飄々恍々竊にあらざるかを疑ふ、然れども久しく止まるべきに非ざるを以て割愛して山を降る、冬字を

通信

通信

過ぐる頃一天墨を流し風伯漸く荒くして寒氣前に倍す少時ありて鵝毛綴紛として降り暴風枝を拂ひ堆雪頭上に落ち天地晦暝殆ど自由を失ふ、勇奮枝を揮ひ軍歌を唱へて進めば風伯益激しく空中に叫び、吹風面を撲て呼吸爲に閉ちんとす、皇天颯れに余が膽を試みるが余何ぞ微少の難苦を懼れんや、顧みれば滿身皆白く恰も幽霊の如く思はず一笑を洩らす、漸くにして友人の家に達し刺を通して來意を告ぐ、主人驚き喜び余を樓上に伴ひ懇待するざる所なし、相共に眺望の絶景を賞すること終日、厚意は碎するに由なくして一泊し燈下に之が記を作ると云ふ。(舊作)

- ▲見たいもの、又士役者の親の顔
- ▲知りたいたいの、文士役者の人格
- ▲聞きたいもの、見識ある人の眞面目な批評
- ▲案でられるもの、文士芝居の將來(T.Y)

要部分を御紹介に及び候。

但し左の教訓は、現在實業界の偉人として又林業界の霸王として英名四表に顯はれたる我が理想以上の理想とせる大人物本多博士の親しく訓誡されしものなれば、一言の微も雖も誤謬の有るべき筈なれば、若し其中に不合理不可能の事の存するあれば全く生の過失なれば、素より其罪は生にありて博士に非らざるを知られたく候。

一、當今青年の弊風徒に外色の修飾に力め、労働を厭ひ美食に馴れ、人を賤しめ、豪然自大なること、蓋し今日の青年は身の程も辨せずして只管外観の修飾のみに力め、自ら手を下して事に當るを卑み、力めて労働は人に譲りて指揮監督を希ひ、常に口先の理屈にのみ長じ口食の美を論らひ、或は衛生に或は其他に口藉して愈々美食を貪るを名譽とし、生活の程度高しとなす又頭目見る處に依れば、一般人民は洋服着し眼鏡を掛け靴を穿てる如きもの(一般學生社會)又は然らずとも髻を生やし一風變りし人(中等の社會に位する人)を見る時は、只管遜辭謙讓頭を低くし、大荷を負ひ牛馬を曳きつゝ有る時と雖謹しんで道を讓るを常とす。之れ淡純愛すべきの風ならずや、苟しくも人倫道德の

本會報が我校内の動靜を諸君に報じ併せて諸君の動靜を掲ぐる事は、學校と卒業生諸君との連絡を作り以て共に與に母校の好良なる發展を期する上に最も必須の要項なりと思惟す。此見地よりして當通信欄は本會報生命の重要成分たり。冀くは卒業生諸君、常に大小となく奮つて其動靜の報導に努められん事を。尙本號に興味甚深にして頗る有益なる通信を寄せられたる高橋君、清澤君外諸君の厚意を謝す。(靜)

●駒場便り (第二巻)

高橋 博君

却説、曩日は結構なる御校々友會報御贈與被下雖有御禮申上候、就ては何か寄稿のアーティクルをと思ひしも、未だ何等自己破天荒の卓説もなく又其他にも有益なる御研究の資に供す可き者も無之候へ共、左の一説は生が日常の教訓として實踐に力めつゝあるものにて他日諸君が社會へ出られし時の御參考にもと簡單に主

一斑を伺ひ知るものならば、尙一層の敬意を表して答禮す可に事は全く背違し、正に然からざる可からずと云はぬ許りの面持ちにて行き過ぎるを例とす、嗚呼又矛盾の甚しきや、彼等も社會の一人なれば我等も又一員なり、筆を採る身と筆を取る身のみ、何等其間に差別あるなし、況んや一方は理に暗く正否辨別なきものに於てをや、然り苟くも社會の中流に位する者に於て世の禮讓を蔑にするが如きあらば、確に社會の罪人たるの汚名を被らざる可からざるものなり。

二、當今青年の誤解、只管安逸を欲し金錢を尊長せず事多くは輕卒なり、抑人は身体の健全ならんを力むべきと安逸を得んが爲めに學問業務を忽緒に附するが如きは大なる誤解なり、病時に人をして過去を反省せしめ將來を警むるの益あるものなれば、病を恐れて職業の怠慢を來すが如きは、普通有り勝の事にて大なる誤りなり。

又金錢は其の使用を謹む可きものにて、同じ金錢にてありながら一は國家社會を紊亂衰亡せしめ、一は隆興富強ならしめ、各自にありても一つは名譽を輝かし敬慕され、一つは情落困難するものなれば、一般人民勿論留意せざる可からざる事なれども、殊に實業界に

● 駒場便り (第二信) 高橋 博君

身を投ずるものに有ては殿に鑑むる處なる可からず故に各方面に我が使育する者には皆俸給の多少に關せず、夫れ一貯金する事としてある、若し世に十圓の時には貯金は出ぬが拾五圓か二拾圓になつたらすと云ふものあらば、夫等の人こそは百圓が千圓でも決して貯蓄なんぞの出来る人でないと言言します、熟々考へて見るに今迄でも安心して事を托す事の出来る様な人は皆此の心掛けのある人である、夫であるから金銭を尊重しないものは事を托するの資格なきものでありま

す。故に若し前述の條項を悉く窮行するもので一應の道理を解するものならば、譬へ高等の教育を受けずとも必ず相應の待遇を以て好位置に上せんと切望すること久しいが、未だ此人の無いのは大に遺憾である。云々

東京農科大学林學部 高橋生

梅笑へども、かへりみす。
人情の春、いくせの
頭領とす幾何の間、
下宿の二階、経路の、
野暮さ笑へども苦にせず、
ついでに世に立つ日を、
書きし「希望」抱くなり。

（露伴氏「出處の一節」）
櫻よへども見へちみす。
おしる旅りあだに、
春の目、或らす前、
障子のやれ、
障子に身を、
夢びの雲に、

我母校も愈々縣立として、茲に再生して諸般の設備も一變し大々新面目を施し來る事と存せられ候。又斯く相成らざる可からざる義にて、吾人の切に期待する處に有之候。
斯かる上は、嘗に有形の設備の完全せるのみならず、又生徒諸君が授けらるゝ學術も時勢と共に一新せられ度きものに有之候。殊に修身上の事柄に關しては充分の注意あらまほしく候。
我等が温古知新の唯一の機關たる校友會報も、第五號よりは遂に其面目を一掃されたるは即ち我校の一進歩を証したるもの有之候。尙編輯長を始め編輯員一同の勤勞の致す處にも有之候はば茲に感謝の辞を呈し候。余が母校を去つてより早や己に二十六閱月、其間造林なる一學科の研究に従事し來りし爲め、其職も年と共に狭まりて、今更我愛敬せる諸君の筆により博は諸學科に亘る耳新らしき説を拜見し得べく、且つは新知識を收め且つは復習が出来る譯にて、之れ實に學友諸君の賜なる事を深く鳴謝致候。
茲を思は諸君がシノギを削りて交へらるゝ筆戰を只傍

觀して惠のみ浴するは余り男らしからぬ様に思はれ候へば、此の駒場便りなる題目の下に我學び得たる造林學の範圍内にて或る三四の者を紹介致す可く候、若し些少なりとも裨補する處あらば望外の幸に有之候。我が攻究せる所を披露する前に、本會報の第五六の兩號に付き我思ひの其儘を批評致す可く候。

第五號にて余が非常にインテレスティングを以て讀んだのは、柳澤熊治君の佐渡紀行に有之候。之れは中々能く調査したるものにて、同君の苦心の程も歴々として見へ余が益したる事は少なからず候。夫れに次で

第貳學年(三十七年度)が木曾の北境を超えて越後を視察したる日記にて、第六號にては河合博士の演説其他大家の經歷事業意見は勿論一点の批難を加ふ可きの余地なし、米山生(とあるは我等の恩師米山先生の御投書なるが)のチークの説明は簡明瞭然ど他に添削の要なく、杉本貞君の上高井郡小布施村栗林調査も我職掌ながら頗る趣味を感じ候。之れは専門以外に亘る文章なるが川岸滋次郎君通信は確に同君の氣質を標榜せるものにて、余が心底より愛敬する所に有之、諸君の悉くが尙此の觀念を以て卒業後貳餐はアツブレンテイースの積りで事業に従事して貰ひ度候。

次に第參學年(生が吉野地方の修學旅行記なり、之れも文才あるクラスの事として文章爽然良く出來て居り候、然れども此の號は概して文學的に傾たる様に思はれ候爲めに頭が一方に偏したる余の如きには一寸齒に合ひ難く存じて拜見致候。

尙茲で豫め一言を參考に迄で本題に入る可く候夫れは樹木の名稱にて種々なる書き方云ひ方有之隨分誤りの出來た例も有之候。

而して其名稱には、學名漢名俗名和名方名等知る有り中、最も正確なるものは學名にして難句語を用ひ博物一切に用ひられ廣く世界の學術界に通用されつゝ有り我國に於て普通用ひらるゝは俗名なれども一つの俗名他の漢名となり、一つの漢名二つにも亘る俗名となる等其間の區別極めて繁雜にして往々人をして意外のうたがひを起さざる可く候、以下少し之れが誤謬の甚しきものを紹介せらるゝ、一區に春つばきは夏のきに秋ひさぎ冬はひらぎ同じく桐と云ふの有之候、然るに之れを漢名にて讀む時は椿はちやんちん、くもやぶり、たうへんばくと云ひ椿に有らず、之のきは朴樹が本字にて極に有らず、楸はあかめがし又はあづさにてひさ

ぎに有らず、ひらぎは柵骨にして終と書かず、桐は辛うじて及第したるも白桐が正しきものなれば之れも確かなるものと云ふ能す、又吾人の常用しつゝあるひのきは扁柏にして檜（は其俗名にしてびやくしんの漢名なり）に有らず、さらば花柏にして榧に有らず、くすは椋にして楠（はゆずりはの漢名にしてくすのきと讀むは其の俗名なり）に有らず、近頃は又だも讀むと云ふ學者現はれ候。

茲に又第五號にて敬見したる某氏の投書にかゝる山禮栽培法にやまならしと仮名を附し有りしも、此の禮なる者は所謂ひめやしやふしの事にてはげしはり又はつちしはりとも云ひ、樺木科はんのき屬に隸し學名あり *Alnus firma*, *S. str.*, *var. multibarata*, *Regd.* 云ひ、土砂杆止用として近頃各地に造林せられやまならしは楊柳科やまならし屬にして學名を (*Populus tremula*, *L.*, *var. ulmifera*, *Wesm.*) 云ひ、腰帶中央より温寒兩帶に亘り乾濕何れにも成育し成長迅速にして木理通直マツチ軸木經木用材火藥用等に供せられ、其用途も前者とは全く相違致し候、之れ投稿者が仮名を附せられたるものには無之極に思はれ候へ共、兎に角以上陳述し來りし如く漢名と俗名の使ひ様に全く用をなさぬの

みならず大なる誤解を招かしむるものなれば、希くは爾今樹名一切ひらがなを用ひ漢字は使用せぬ様に致され度、若し其必要あらば明瞭にかなを附し置かれ度きものに之れ有り候。

以上は參考迄でに申上げし緒言にして次に行を追つて本題に入る可く候。

其一、月桂樹(とうりくのき)

嘗て世界の耳目を震動せしめたる我海軍の東郷上村兩將軍が日比谷公園に手植せらるゝ迄は其名を知るものは只植物學者の或る部分のみにて極めて少く、其名を知るものも雖も極に西洋料理に用ひらるゝものなる事より他に多くは知られざりし月桂樹も、爾后は非常なる賞賛を得て其盛名都鄙に喧傳せられ、壹年生貳參寸のもの一本の價尙一圓五拾錢乃至二圓迄に劇騰し、苟も普通教育有るものにして其の名を知らざるものなきに至れり。

今や時季すでに経過せんごしつゝ有るも其梗略を述べらるは敢て無用の業に非ざるを思ひ、以下少しく我知るる倦を書き記さん。

月桂樹には大葉小葉の貳種有るも、一般に月桂樹と云へば後者を指す。然れども其名同じくして又學名も其栽培法としては播種分蘗接木等有りて、今日普通に行はるゝは播種なれども、良種子を得難きに依り發芽量極めて少なく、2%乃至5%位に止まり、分蘗も至て少なく、且つは日燒霜害等に入手を要し今日の狀態に有りては望み得可きものに有らず、斯かれば吾人の職掌範圍内に屬し難きも月桂樹の如何なるものかの一斑を紹介致したるまでなり。(以下次便)

に *Laurus nobilis*, *L.* 云ひ、又 *Laurel tree* 云ひ、月桂樹なる名稱は近頃理學博士伊藤篤太郎氏の命したる所なり、蓋し *Laurus nobis* (ラウロブノビス) なる意より來るものならん、葉は常綠橢圓形兩端稍尖がり、互生にして短柄全縁肉厚くして上面は深綠色を帯び光澤有り、裏面は淡綠色稍滑くして、長さ貳寸三分乃至三寸三分巾八分乃至壹寸貳分分に及ぶ、四月より五月上旬頃十五乃至貳拾個の白色の小花を葉腋に簇生す。

元産地は地中海岸域、殊に小亞細亞に最も多く、我國にても暖地には栽培する事を得。

古代歐洲に於て樹を最勇なる戰神として戰勝者が榮譽を表はす紀念樹として植ひたるに倣ひて、東亞の勝利者が以て紀念樹として植ひたるものなり、其後羅馬希臘等に於て勇大の名譽あり表彰する爲に其葉にて作られたる冠を戴りて例とせしより此の言の原をなすに至りしなる可し。

葉に香氣あるを以て香料として食卓に上せられ、實より油を採りて藥料に供し、庭園樹盆栽として賞せられ材質は堅韌にして高貴の人の建築材裝飾器機織細工に供用せらる。

希 望 (一)

(露伴氏出處の一節)

奥山に眞栗刈る處、
荒磯にちみ取るあま。
人云ふ人、誰が昔、
人、一日の命あれば、
人、その希望絶えざれば、

谷川に衣あらふ哉。
牛の背に留ふくわらべ。
「希望」のなきて世に在らん。
人、一日の希冀あり。
人、そのいのち絶えぬあり。

●今春渡米せられし會員清澤巳未衛君の本校職員に送られし通信

謹啓、遙か隔たりし異郷にあること、諸先生様の御安否を承るの機會も少なく、如何おはしますか定めし御健在にて天職の許に御活動なされ居らるゝ事と存じられ安心致し、且つは諸先生様の幸福を賀し奉り候。降て小生北米の野に宿望を充さんと月日の過ぎ易きを嘆きて、一生懸命目的に向つて猛進致し居り、一日も早く向上の一路を通貫し、以て母校の一員として肩を並べて行きたきものかなとあせり居り候。小生の只今在留致し居る所は北米合衆國の西北部に位する尤も鬱蒼たる森林に富むワシントン州に候て、而して業務は只今の處已が天職とたのめる林業に御座候、其林業と申すも造林にあらず森林保護の業にあらず、即ち伐木運材製材等利用に關する事のみ只管實行しつゝある、有名なるキャンブル、ランバー、コンパニーに勤務致し居り候て、母校に於て學び得し事柄を實地に窮行するといふに外ならざる次第に御座候、伐木造材運材製材等に關して若し詳報を御望みに候はゞ御報導致さぬわけにも無之候、併し諸先生の御請求を待たぬとて報

導するの義務あることは承致し居り候へ共、時間のなきを如何せんぞ嘆かずんばあるべからざる次第に御座候。而して小生が只今勤務して居る會社をば大方明年五月頃日本より友人か参り候て、小生の代りに勤務する様に相成り候はゞ、小生はシャトルの學校へ參るべき存念に候間、若し夫れ諸先生の御希望であり又何等か御質問に候はゞ明年の五六月頃迄は林業に關することは知得し居る限り御報導致すべく候、前申述べし如く御希望に候はゞ時間のなき爲め報導を見合せ置べく候。

次に諸先生様に御願ひ申上ぐべく候へ共、御校卒業生若しくは中途にても宜しく候へ共、海外飛躍の志あり忍耐あり勉強家であり且つ大なる抱負を待つ者が有之候はゞ何百人にても渡米致すべき様になし下され度勸誘なし下され度候、皆同一コンパニーに奉職させ造材學にても運材法にても製材器械の研究にても御好み次第の處を受持たしむべく候間、なるべく澤山御勸誘なし下され度候、俸給は實際貯蓄し得らるゝ金即ち食料費其他諸雜費差引たる殘金日本金にて一ヶ月四拾圓乃至五六拾圓と思つて居れば大丈夫と存じられ候、若し友人の中にて眞面目に事を爲さんと欲するものはコ

ンパニーになり北米の天下に大事業を勃興さるゝならんと存じられ候、但し之は近き將來に來らんとする豫想と志望に過ぎず候、此志望は決して空想にあらず、果然爲し得らるゝ最も優勢の事業に御座候、若し今より渡米を志望し居るもの有之候はゞ夫等の人達に特に御注意致して頂き度きは英語の勉學に御座候、併し英語を無暗にやれゝと勸めたる所にて他の正課の學業を等閑に附したらんには教授上都合をきたす慮りも有之かは存せず候へ共、其邊は御手加減にて宜しく

有志者の爲めに御便宜を御計りやり下され、以て渡米の曉不幸に逢遇せぬ様御注意なし下され度、偏に願上候米國に在つて英語が若しあやつること叶はず候はゞ啞者の旅行より猶一層不都合に候、啞者は手真似が中々上手に候へ共日本人にして普通の人は世界中一番要手真似が下手に候間、大に不便に候、依つて英語の必要は多言を要せずにて候。

渡米有志者にして、何等か質問ある方々は別紙記載の宛にて御申越し下され候はゞ直ちに御返報致し出來得る限り便宜を圖るべく候、但し眞面目に事を爲さんとする者にして意志強固忍耐心を持つものにして且つ大切なるは健身をもつものたる事は必要に御座候、而し

て成可く御校生徒の便宜を圖りたく候、併し乍諸先生の薦舉に候はゞ、男女を問はず何千人何万の人にも渡米后直ちに信用ある確實なる資本家に托し以て各自の志望通り致すべく候。

小生が右之如き厄介なることを爲すは、只今學生の身分として時間もなく困ることは申せ、唯已が今日迄の境遇を顧みて、自己の目的を貫徹せんとするに方り、手引の必要を要し居るが故に其困難をふんで爲しやるに過ぎず候。

先づはつまらなき事共を申上げ、また失禮に候段何卒御寛恕被下以て、微意の存する處を御汲み取り下されば本懐に御座候。多々頓首。

清澤巳未衛

(清澤君へ發信の宛名左の通りに候)

Mr. M. Kiyosawa,
P. O. Box 1009,
Seattle, Wash.
U. S. A

●特別會員木下君よりの書信

六十四

謹啓時下暑氣之候、先生様には日頃は如何に御座候哉嗚々益々御多祥之御儀と奉存候。降て小生儀當地に罷越し候てよりは無恙消陽罷在り候間乍他事御安心被下度候。

却説、一昨去月一寸申上候通り、採用されてより以來本課の直轄する樹苗圃(本課直轄にあらずして派出所出張所の所轄する苗圃四個所有之々に聞及び申候)の監督を命せられ、日々出勤罷在候、然して苗圃は四個所に点在し、斯業に熟練経験を有する男子を番人に置き専ら人夫の取扱及び苗圃事業に従事致させ居候、樹種は扁柏落葉松其主位を占め、金松、杉、松類も多少有之、尙今年下種したるものには山楡(反別五反歩余)扁柏(一斗五舛余)にて前者は能く發芽致居り候へ共後者は種子下等なりし由にて從て發芽數も驚く程少量に御座候。人夫は地方農民を以て之れに當て、重に女子に致させ居候、賃錢平均拾四錢位にして今の處にては最高拾七錢最低拾錢にて御座候、勞動時間は朝の六時より夕の六時迄にて、肉食時及休憩として一時間半を與へ居り候、當今は除草の爲め多忙に御座候、小

生共は朝は八時に出動し午後は四時に退くが普通に候へ共、苗圃に巡視する場合には五時頃に歸宅仕り候、申迄も無之萬々御存じの事とは奉存候へ共、當鑽業所は新居濱村惣圃に廣大の地を占め、所内は山林課設計課土木課調度課機械課等拾參課に分ち在り候、而して山林課は造林係木村係薪炭係經營係に分ち、小生は即ち造林係附屬に有之候、聞く處に依れば課員は出張所派出所の人員を合せて七拾參四名の由に候、本課の附屬山林面積三五、二五八、町九にて年々五百町歩宛の新植豫定に有之由に御座候。尙種々様子を申度存候へ共、日尙淺く見開狹く且つ兎角五月蠅き苗圃事業に關し居り候こと、て、逆も間暇無之依て取急中亂筆御免被下度候。海上九哩を隔る四阪島の製鍊所へも五里を去る鑛山別子へも共に運輸機關發達致し居り候事故、間暇を少々得て身を文明の利器に委ぬるを得ば、多少門前を窺ふに足ると奉存候、何れ種々知得の上は、御參考迄に御報仕心算に罷在候、先は御無沙汰の御わび勞御報申上候也。敬具。

六月十九日

伊豫住友銅山にて

清

●武久貞一君の通信

拜啓、時下春暖の候と相成候處、會員諸君益御健在にて實學科共に御勤勉の段奉進賀候、次に小生も壯健にて軍務勉勵罷在候間御休神被下度候、扱て此の度は校友會々報御惠送被下誠に忝なく御禮申上候、別世界たごの休業日には食も忘れて繕く次第に御座候、母校の縣立となりし事本會の改則其他論説に通信に一度ならず愉快に又憤慨に堪へぬ次第に御座候、小生も種々通信申上度事山々有之候へ共、何分目下新兵にて第一期檢閲も漸く去月廿七日に了り候次第にて寸暇なく困却の有様なれば、此の点何分悪しからず御了知被下度候又小生は當隊編成に付五中隊に編入相成候間此段御通申上候、

(下關要塞砲兵聯隊第五中隊にて)



●藤原周紫君の通信

謹啓、春暖彌々御地梅櫻紅嫩正に其香を放たんとするの候、之れも小生等山中業者たるものにあては且此職務にありては櫻の美より楡松柳々青緑を増さんとする候の方適切ならんと存候。處三月中の大難關も鞭一聲と打越えられ、第三回の卒業生諸君にも各其向途につかせられ候と存候、尙在學諸君等にも益々榮附として益御勉學の事と縣立第一期生を期せられ益々御勉精校の名聲を發揮せられん事希望に不耐候、扱而度々の雜誌御送付に對し且益々趣味の溢美なることは諸君の御盡力の一重に及ぼさる處と感謝仕候、小生は初め長野小林區署に在勤致し居候處昨年九月より白田小林區海尻保護區官舎在勤を被命該地に勤務中に付右様御諒承被下度候、雜誌にても拜見せし如く御誌の爲何か御投稿致さんにはご考ひ居候ひしも何分業務に取追はれ御報申兼候ひし次第、聊か申開きの爲蕪言申上候につき御參考にも供せらるれば幸甚此事に候。

一、諸君は懇命御研究中とは存じ候も出來得る丈樹種を多數に知られ、且其用途地生長見分法(如何なる

六十五

樹にても)等は御出校直様御應用なさせるゝ事に付散歩の序を以ても御究可然候。

二、成程學理の根本を學ばるゝは必要に候へ共、社會大學に出られたるは到底トランシットの測量樹高精細測法等はある特途の向途を除く外は決して應用致し兼ねるべく、トランシットを一回使用せらるゝよりは羅盤

或はコンパスを三回御實習の方余程必要と感せられ、樹高に付はて先日測法を以て一樹を測り後器具にて精測し、若しくは伐倒して目測の熟練は最必要、尙保護區に於て樹木拂下の如きは悉皆目測にて直徑は輪尺を用ひ一日三百位を調査致し得べく、若し器具等を使用すれば到底其目的を達せられず候、熟練すれば誤差も些少なるものにて特に貴重樹種一尺 β にても莫大の相違あるものゝみは尤も器具も使用いたし候。

三、樹木の單價は尤も林業の損得の決する基なれば地方により異なるも、其平均價格位は御存の方必要すべく其單價美法も又要用の事と存候、今尙都内の價格を列記すれば左の通り、

樺角材一尺 β 平均三圓五十錢
檜薪炭材 一圓貳拾錢
唐檜 一尺 β 平均二圓五拾錢 木炭一貫匁三錢五厘

五、森林家の健康は今更喋々を用せずと雖も、前項の如く八ヶ岳頂上迄は實に上り三里半の途にて一日六里の山路は健康ならでは到底堪へがたく、加之日々森林被害豫防の爲日々巡視を要する次第、大に身体を健康とされん事を。

或は將來の森林家に盗伐者等の豫防は必要と仰せらる君もあれど、成程植栽當時は頼んでも伐らざるかは存せね共、其樹木漸く成長し適當なる材となるに至れば又必ず盗伐者を豫防するの理に御座候、生分担區域余りに廣大なるに付甲州方面よりの盗伐者増加の此頃盗伐狩を施行致し候處、何分未熟練物證據物件のみの結果之れに付ても武術の幾分を習得せらるゝは大に其當を得たるものと考へられ候。

終りに臨んで、三學年諸君の校友會に對する益々精勵雜誌印刷等益御盡力致されん事を希望いたし候。

八ヶ岳の峰白雪皎々たるを望みて
官舎内獨り燈に向ひて
藤 原 周 紫

白檜 一尺 β 平均二圓
樺 一尺 β 平均二圓
落葉樹一尺 β 平均一圓五拾錢 落葉松木炭一坪三十錢
樺 一尺 β 平均一圓五十錢 樺木炭一坪三十錢
此外川胡桃下駄材として需要多く山元にて一尺 β 三拾錢位に御座候。

四、林相注意の事、

此山或は林は后来如何に變化するや、如何にせば將來利益ある林となし得へきか、何樹の適當なるや等、之れも散步の序に御考になされ得べき事と存じ候、小生分担当持區は名に負ふ諏訪甲斐に跨る八ヶ岳の東面の大部分にして、面積大凡二万町歩未立木地五分の一あり、梅樺唐檜外落葉松川胡桃及雜木の針澗混交林にして當保護區官舎を巨る頂上迄三里半有之運搬不便の爲め天然林にも稱すべきあり、朽土尺に達し運搬の道開けなば一大 あるも富源なるを失はず、年々少部分の拂下のみにて千余圓の收入あり、是れを設計に關しては實に好個の問題たるを失はず候、頂上より半里を下りし所本澤と申す温泉有之東京諸紳士等の來遊少なからず、諸君幸に今夏休暇を利用して迎はるゝを得益幸なり、諏訪玉川村よりの本道有之候。

●山梨縣東山梨郡丹波山村泉水谷
製炭場下畑徳十君よりの通信

親愛なる諸君よ、定めて兄等は御多忙の御事と遙奉り候、次に幾多大なる御恩に在學中は預り有難く感謝に堪へず候、小生赴任以來は御庇護に依り至極健全に日々事務所に出動いたし居り候へば他事ながら御安心下されたく候。

願れば、過ぐる日講堂に於て諸君と袂別の宴會を開いて下された時は、如何に小生とは云へ更に面を上げ得なかつたが、頃日は造林の實習に嘸御愉快の事と遙に羨ましく存じ居り候、さて小生在勤の役所の吏員及び之れが模様を報導申上ければ、當事務所には所長は林業技師菊池伊三郎と云ふ人で、次席には林業技師高妻秀季と云ふ人の外、林業技師中川金次、監守大室嘉太郎の二人及び書記一名にて實驗としては可驚敏腕者も有之由候、仕事の手配は所長と書記とは本所詰めて造林係又中川と云ふ技師は燒炭係りにて小生も此係りに屬し居り、監守は例の如く山廻りに有之候、燒炭の方は非常に繁雜にて夜も満足に寝に就く事が出来な、と云ふのは何しろ二百人以上の夫婦と數人の常

夫と、夫れに山小屋とは申せ實にいらいもの其上山の
 嶮なる事は言語にも何にも實際感へる事が出来ない、
 之に比しては諸君の演習林なる大平や浦山の如きは諺
 に云ふ處の朝飯前の御茶の粉と云つても宜しい、恰も
 屏風を突立た様な位です、當事務所にての仕事の大略
 は水源涵養の爲めでせう、其爲めに林相の改良する目
 的で今は雜木に困つて居るので收利の目的でも何でも
 ない故、雜木を伐つて捨て、も造林上に大に差支があ
 るから結局炭に焼くことになつたとうです、其生産高
 は非常のもので其収入月に六千圓位に之あり、而し其
 収入は僅かに其れが経費を償ふて造林費が出る位の様
 子です、其實先は東京市にて價は一吋種々ある様です
 其他造林は一ヶ年に四十万本位にて樹種は大低杉と檜
 にて造林地附近に苗圃を設けて二年生苗を買入山行と
 なす様子です、而し其不足は悉皆尾張信州地方より買
 入れるので、此外白楊、ヤマナラシ、等五六種の挿
 木の試験造林なるもの有之候先は一吋御報送勿々。

四月廿五日

下 畑 徳 十

なる事の心に止まりし事共を摘要し一寸申上候。

- 一、山林は大荒廢に属し居候
 - 一、晝夜寒帯の較差より甚だしく候
 - 一、百般の事業の幼稚なる事我日本國の千余年前位かと思はれ候
 - 一、余りに汚穢なる事は豫想外に候
 - 一、至極殺風景の土地に候
 - 二白
- 手塚先生には電話にて話しました、御壯健の由。
 二十二日柳澤邦信君に遣ひました。
 余は追て申上べく候。 以上
 三十九年六月廿二日

●加藤十七三君よりの通信

拜啓、益向署の候諸兄御壯健中に試験も終へらま近々
 各うぶやに向つて御歸りの御事と奉遙察候、小生歸省
 中は色々ご御厚情を蒙り難有御禮申上候、其後當地に
 參り候間不相變御交誼の程奉願上候、又當地の有様等
 は追て申上べく、先は諸兄よく遊びよく働きよく勉強
 し給へ。 早々

(七月廿五日秋田大林區署内)

●在韓國咸興南道甲山郡惠山社惠山鎮
 陸軍々用木材廠分遣所林與五郎君杉
 本純平君鵜殿正雄君の三氏よりの通信

拜啓仕り候、小生等去る四日出發十日交通九にて下の
 關出帆元山にて高山丸に乗換へ十五日 湖津へ上陸致
 し候、出發以來幸ひ好天氣にて廿三日午後六時無事惠
 山鎮木材廠へ到着仕り候間御安神下さるべく候、越て
 廿四日出廠仕り候處、次の如き下命により日々(休日
 なし)勤務致居候も之れも韓語の必要より當分の間と
 推定致し候。

語學修業者日課日限表

- 語學 自午前六時半至九時
- 實業 自九時十五分至十一時三十分
- 實業 自午後零時三十分至三時
- 語學 自三時十五分至六時
- 復習 自七時至九時

備考

實業は工場掛りの監督を受け諸作業をなし、又は韓人
 を指導するものとす、但し任務を與ふるものは其任務
 に従事すべし。
 斯の如くにて詳報も申上難く候へ共、左に上陸後の主

紀 行

●鎗ヶ嶽、及び穂高嶽。

端がき

M U 生

予は元來旅行好きで、就中山とては三度の食事より
 も好きである、時は昨三十八年の夏季の事でありまし
 た、休暇となる僅か前、鎗ヶ嶽登山の有志を募つたら
 拾名許出来たから、歸省後は探險も近々の内にあると
 喜び、指を屈つて待つて居つたが、折も悪しく驟雨に
 妨げられ之を果すことが出来ず、其内追々と歸校の期
 も迫り、泣く泣く八月二十九日に故郷を立ち出で篠井
 線により漸々と松本平へと進行して、汽車の窓から西
 の方を見ると雲の間より常念嶽や蝶ヶ嶽が帽の底に迫
 り、其露間には白雪が皓々として居る、嗚呼忌まはし
 夫の雲や雨が遂に吾々の望みを妨げたな、よしそんな
 ら是からは一人にても踏破すべしとて松本驛で下車し
 ようと草鞋の紐を緊めて見たが、俟て暫し今不用意で
 行つた所で何の得る事もなく、且つ萬一の場合に一人
 にては大いに都合が悪からんと、吾と吾が心をなだめ

つづつ撫尻驛で下車し曾川にて一泊、翌三十日歸校した夫れが暫く経つと、雨も降り飽きたものと見えて稍懈り勝となつたから九月八日頃でした、鎗ヶ嶽踏破すべしと主唱したら、立どころに應ずる者数名を得た。集まりて相談すると機失ふべからずとて、之れから夜行して是に向ふ事に決心した、同行者には時の三年生にて柳澤熊治君、北原利雄君、一年生にて曾根原重平君なりし。而して出發の途に上りしは同日の九時半頃でした、是れより嶽麓上高地に至る間の記事は友人が記載する筈になつたから、其文は端がきの次に記する事として、目的地の地位を略叙し、直ちにジャパニースアルプス攻撃の段に遷ります。

一、飛騨山脈及乗鞍山脈。

さて、飛騨及乗鞍山脈は東經百三十七度より百三十八度に至り、北緯三十五度三十分より三十七度に及び、即東西十里南北四十余里と唱へらる。鎗ヶ岳を中央として、南、西より北、北東に向走する大山脈で、花崗岩古世層より成り、處々に大山岩を噴出して居るが故に、山勢雄偉で、峻峯が蜿蜒として北に走り、信飛及南越の境をなして其末端は日本海に陥没して、所謂不知親の嶮となる。此脈は日本群嶋中にて最高峻嶮の

地域で、大陸的山脈に特有なる高山性を有し、真高(海拔高以下皆之に同じ)二千五百メートルより三千五百メートルに及ぶ、歐人は之をジャパニースアルプスと稱して居りますをぞす。最近北の高峯を御嶽(火山岩三、一八五メートル)とし、漸次北に延びて乗鞍嶽(野麥乗鞍火山岩三、二〇〇メートル)穂高嶽(石英班岩三、五四〇メートル)鎗ヶ嶽(石英班岩三、五三三メートル)蝶ヶ嶽(古世層二、九六七メートル)常念嶽(古世層三、二二五メートル)大天井嶽(花崗岩三、一八五メートル)獅子ヶ岳藥子嶽(共に火山岩二、九九二メートル)立山(火山岩二、九三六メートル)後立山(火山岩二、七三〇メートル)鹿島鍵ヶ嶽(火山岩二、八七三メートル)大蓮華山(蓮華乗鞍又白馬嶽とも云ふ火山岩三、〇四一メートル)等は其最も峻嶮奇拔なるものであります。松本より飛騨に通ずる野麥嶽(一、四八〇メートル)は最低なる所に此脈を横斷し、大町より越中富山に通ずる針木嶽(二、五九八メートル)は盛夏も猶里餘に亘る雪田を見るに云ふ。此脈中に二千五百メートル以下は針葉樹にありては唐檜白檜梅樺赤松等、闊葉樹にありては栂檜杉七葉樹楓類栗桂等の良材を産する事が少くない、二千五百メー

足りませう。

A、鎗ヶ嶽。

ル以上三千メートル以下は山赤楊梅類假松等が生じ、夫れ以上は全く植物の跡を絶つて居る。特に大蓮華山の如きは其他に氷河や植物岩石の種類豊富なるを以て、有名である。實に愛嬌満々たる山脈であるよな

1、上高地温泉(二、五三〇メートル)及び徳本(二、五八〇メートル)間。

二、上高地。

上高地は信濃南安曇郡の西境安曇村にあり、南北凡そ五里東西十餘町、主に沖積土で真高千五百メートルより千八百メートルに及び、梓川が其中央を北より南に流れ、其水色は靑藍の如く、沿岸には白楊柳落葉松樺能登等叢生し、東は常念嶽鎗ヶ嶽を距つて松本平に至り、西は穂高嶽鎗ヶ嶽を負ふて居る、是等諸山の中腹には温帯植物が能く茂り、夫れ以上は所謂寒帯で四時白雪で蔽はれて居る、中には明神池の歸帆、田代の落雁鎗ヶ嶽の暮雲、穂高嶽の夕照、燒嶽の晴嵐、温泉の秋月、霞岳の朝霞、等の奇勝は木曾八景近江八景等の比でない、實に云ふべからざる所の絶景である。斯かる山水明媚の境に至れば大氣清新洗ふが如く、且たに秀峯を仰ぎては高潔なる心を養ふべく、夕べには清流に釣して口腹を樂ましむに足る、此地たるや酷暑の候も華氏の七十度を超越する事が稀であるといふ。實に、文士雅客も一度此地に入らざれば共に山河の勝を語るに

九月十日晴、午後六時上高地温泉に着き、浴衣を借りて入浴し、晚餐を終り、下婢に命じ明日晴天なれば鎗ヶ岳に登るべければ案内者を雇ひ呉れよと、稍ありて強力求る、登山の準備は如何にせばよきやと問へば、さなり是より五里、明二食と防寒具どもは御着しの冬服と旅の甲冑は三足これにて充分なりと、一同も餘り準備の簡單なるを訝かりしが、彼は一日にて上下するに色々の荷物を持ちては賑つて困難なる事を説けり。夫れからは準備もそこにして直に白河夜舟にいつた、間もなく下婢の叫ぶ聲に驚き覺ひれば、已に午前四時出發すべき時は來れり。よりて一同を呼び起した、其時柳澤君は未だ眠しどて咳いて居つた。早々朝食を淺へ鳴々にて製した餅其の他饅頭を戒めて宿を出立せしは五時餘り、東方が漸く薄明るくなつて來た、梓川に沿ふて登る事東北一里、徳本の小屋に至りし頃天全く明るくなつた、此間に於て森林家の最も多く注意を拂ふべきは落葉松の天然に單純林をなして居る事

であります、面積は甚だ廣くはなけれど約一町歩もありませんか、年齢三十年位で地位は梓川の右岸に添へる平坦なる砂土で、石英斑岩花崗岩及び古世層等の風化によりてなるもの、地下水は平水面上〇、六メートル内外伸長十二間直徑三寸乃至八寸成長可長なり、其他岸に接近したる処には赤楊小梨等良く繁茂して居ります。

2、徳本、木賊(一、六一〇メートル)横尾(一、六七〇メートル)赤岩(一、九七五メートル)間。

徳本の小屋より約一里にして木賊の小屋(右岸)に至る此處には偶然に施業案編成の爲め長野大林區署より出張せらる坂本忠治君(本校第二回卒業生に會した今しも朝餐を終りし処、二三の要談を済まし猶一里許進み川を渉り左岸に達すれば横尾の小屋あり、此所にも大林區署より出張せる一隊がありました。是れより流れを横ぎる數回、其度に水の冷かなる事により足を切り取らる、様でした。其前後には熊笹の密生する所を破り荆棘の間を潜り、或は嶮崖を攀ち、水中に陥る等の艱難を耐めて横尾の小屋より二十餘町來りしと思ふ頃此川の支流なる銚ヶ嶽より出で來る川の左岸に就て數町許りにして赤岩の小屋に達した。此小屋は前數ヶ所

の小屋と異なりて、其趣は名の如く大なる落岩の斜めに突出する庇陰の前面に笹及び針葉樹の葉を以て蔽ふてあるのみですが、前の徳本や木賊等の小屋は凡そ三四坪の地を占め、四隅に穴を穿ち之れに柱を樹て四壁及び屋根は主に笹を以てし、床は笹を敷みて席を敷き、戸の板を以てすると笹にて作らしものごありました。徳本より横尾の近傍の林相は温泉から徳本の間と大差なしですが横尾より以上となりましては落葉松楊等減じ赤楊類の増生するを見ました。

3、赤岩馬場平(二、二六〇メートル)坊主小屋(二、九五〇メートル)山脊(三、四五〇メートル)間。

赤岩の小屋から十余町登ると邊たる緩傾斜をなして居る漬がある、此処の人口に息ふて中食をした、未だ十時半頃であつたが是より上は水がないからです、此近傍には山赤楊赤樺及び偃松等の繁れるを見るのみです休憩する三十分許りで又登り初めた、是から上は道が愈々険しくあります、坊主小屋との間には黒百合、駒草御にく深山きんばうげ、深山大根草、ちんくま、いわききやう、つがざくら等既に霜の爲めに色稍褪せ物さびしげに名残りを止めて居た、是れから十町許りて坊主小屋がある、此小屋は自然に石室をなして僅

修學旅行記

明治三十三年 修學旅行日記

○五月廿八日(月曜日) 福嶋發 瀧尻泊

(午前晴 午後四時より雨)

吾々が豫てより待ちに待ちたる林學實地研究場裡に飛び入るべき旅行の時は來たり、實は五月初旬に於てなすべき筈の処、或事情の下に延期し漸く本日を出發することになりしなり。

從來、當校の旅行出發當時は例年迄の如く必ず多少の降雨ありしも、縣立になりし結果か本年は幸にも降雨なく、旅裝甲斐々々しく草鞋脚絆に身を固め二年三年六十余名は定期の時間内に校庭に參集し、指導の任に當たられたる黒河内先生(米山先生は私用の爲め上京せらる、故を以て吾々ご御同伴せらるゝ事ごなれり)に引率せられ、午前五時卅分校門を出でたり。見送りの爲めに勞を取られたる當校職員並に當學年生諸君には關町の彼方に於て其厚意を感謝し、万歳三唱をなして袂別を告げ、愈々前途遠旅行殆んど十有餘日に亘

かに數人を入れ得るのみです、此れ以上は植物が殆んど其跡をたち、圭角を有する斑岩が筈を亂せるが如く累つて居る、仰ぎて行衛を見れば銚の絶頂が蹠乎として、天漢を扶つて突立つて居る様は、丁度駒ヶ岳の錫杖が嶽に彷彿としてそれよりは一層大きくあります、行く行く積雪を踏み、猶は登る事十町許りにして或山脊に出た、最前から風と霧とが盛んに起つて居たが、此処に出でからいよいよ強くなつたから、其靜まるのを俟つと疲勞を慰せんとして尻を据えた。

更衣 雜巾一つ 出来にけり
足かへや 鴉は黒く 鷺は白し
是はく 蓮ふ子立たり 更衣
やりくつて 又やりくつて 更衣
西行は死そこなうて 袷かな
風 竹
真 瑞
宗 端
鳴 雪
燕 村

る旅途に上れり。

之ぞ此旅行の初陣にてありき、本日の旅程は我木曾山中の事なれば平素見馴れ居り、別段を自新らしく感ずるものなきが如くなれども亦修學研究の材料に乏しからず、或は森林保護學上より、或は地質學上より、或は土地人民と林業との關係より、其他種々雑多の方面より吾々が究むべき事項は此旅途間に充ち満ちて余りあり、此豊富なる材料に就き各自研究を凝しつゝ、木曾川を足下に中仙道を迎れり、川は沿岸より屹立すこ連山と能く調和して風景絶勝真に仙郷と謂つべし、斯くして吾々は難とする鳥居峠を悉なく打越え、奈良井を過ぎて平沼小學校に至る、當校に在勤せらるゝ本校卒業生倉澤寺島の二氏大に生等を歓迎せられ校の一室を與へらる、依て同所にて晝飯をなし一休の後痛む足を引き々々蟹川櫻澤を通りて漸く本山に達す、此處にて疲勞者數名は馬車を馳せて目的地指して出發せり、余も亦其一人なり、途中不幸にも僅少の降雨ありしを以て歩行せらるゝ諸君は或は多少の困難を感せられしならん、午後三点より四點頃迄に吾々一行は無事猿尻川上旅館に投す、此日の行程十二里余、一行總て非常に疲勞せるが如し。

七十四

○五月廿八日 月曜日細雨六時頃より晴(猿尻發東京泊)

午前四時半川上旅館出發、行く事暫時にして鹽尻峠に差し掛れり、峠の半頃に至れば細雨全く晴る吾々欣喜之れに過ぎず此峠の高さは千二百呎なりと、道の一側に行道樹のあるを見る其長さ殆ど一里に亘る、其他十二年生の落葉松植栽しあるを見る、峠を下りて之より諏訪郡に入る、抑も此諏訪郡は吾國製絲業の最も盛んなる処にして生絲の産額日本全國の六分の一を占め宏大なる製絲工場に至る所ありて天を摩するの烟突は殆林の如し、午前七時下諏訪停車場の一茶店に到る茲にて草鞋脚絆を脱して靴に換へ、時余にして吾々一行の乗すべき八時五分の列車は到着しぬ、之に乗じて汽笛一聲諏訪湖を送りつゝ、東京指して運行し、途中四十有餘の陸道と三十有餘のステーションを過ぎて五時半頃飯田町停車場に着せり、下車すれば本校卒業生高種峰谷輪湖の三氏並びに八重垣館主人に迎へられ神田區北神保町十二番地に投宿す、此日殆ど終日汽車中にありしかば別段の疲勞をも感せざりき。

○五月廿九日 火曜日 晴天

本日は汽船に乗じて房州へ向ふべき豫定なれども、汽

船の都合により當地小石川植物園へ朝の八時一同宿を立ちぬ、紅塵萬丈の都下複雑の人事界は此所に於て項点とも云ふべきか、山出の吾々が目に映るもの一ととして珍ならざるはなく一として奇ならざるはなし、約一時間にして植物園に至りぬ、園は理科大學の所屬にして松村理學博士之が所長たり、至れば眼界は目新らしき植物のみにて恰も施術者にかゝりたるが如く愈々催眠しぬ、以て記憶するはなし、嗚呼又時日の制限か然らば心に欲して求めざるにあり、せめては森林植物にてもと思ふたれども之れ亦全斷齋なる各樹木數丈に達し林相を保つのみ、只知る理學の濼澳を極むるの所設備完全に苟も植物と稱するものは園の内外たるを問はず土地の何邊に存するものたるを問はず洽く之れが栽培しあるを知る、十一時頃一同退散し各自三々五々自由の行動を取る、拾一時迄外出許可即ち東京見物をなす。

○五月卅日 水曜日 晴天

本日は房州天津に達すべき豫定に付午前四時頭床を離れ各々旅裝を整へ宿舍たる八重垣館を發しぬ、又案内者に引率せられ市街を南に過りて同六時頭靈岸島に着しぬ、此處に於て殆ど三十分程休憩し居たり、時に早

や汽船の出帆時間も來たりし急ぎ汽船に乗りたり、六時半頃に至るや汽船は汽笛一聲の下に意氣揚々として出帆しぬ、時しも天色晴朗にして海波全く静まり海面さながら靡を敷けるが如くなりき、故に一同皆甲板に出で四方の風景を眺む、船は愈々進みて太平洋に出でぬ、之より波は次第に高まり船は揺れ始めて多少の苦は感せしが又一方には海面に浮ぶ珍魚及び遠くの沖を疾走する汽船を見るも又至極の愉快なりき、斯くて船は午後五時半頃遂に目指す天津港に着きたりき、依て旅舎井筒屋により一泊す、本日の海上航海十時間の間林業上に於て見るべき價値ある所はなかりしが他の方面上に於ては東京灣内の如きは實に社會の進歩上驚くべき所多かりき。

○五月卅一日 晴天

午前六時旅舎を出發し清澄山に向ふ、天津町より東に歩を進むる事約六七町にて漸く登り坂となる、途の傍には天然林らしき三十四年生黒松が續生して居る、此近傍は稍々黒松に適して居るごと見ゆる、坂を登ること約一時間で字切通しと云ふ所へ着いた、此所で一休して又登り始めた、旅人宿人家等を過ぎて行けば程なく彼の有名なる清澄寺に着いた時が午前八時頃であつた

七十五

此所で暫時休憩す、休憩しながら庭前なる杉の大樹を測り見るに其胸高直徑約貳間高廿六尺余あり、其年齡確ならざれども大凡七八百年位と見ゆ、此所を後にして少し戻れば之れ大學寄宿舎である、米山黒河内の兩先生内に入るや程なく農科大學林學部實科生松村先生と共に由來る、而して松村先生は吾々に奥山養魚池を見んと欲して共に東に向て出で暫く下山すれば山下に養魚池があり、此所で先生は養魚に關する左記の如き御話があり、又其山の土質に就て話された。

此山は水成岩であつて、其岩は實に脆く、斯くの如き岩の上を流るゝ水と雖も遠からずして掘れて溝の如くなり段々中に掘れ込む、從て其山も崩れると云ふ有様で樹木が成立し難い、併し斯の如くであるけれども岩が柔かである爲めに、崩壊したる後に直ちに雜草が繁茂するが故に崩壞も割合に少ない。

話了りて寄宿舎に歸る途中に奥山の苗圃がある、杉、扁柏、樺の類あり、話によれば扁柏の苗の如きは年毎に新しき土地を開墾して播種しなければ好結果を得難いと云ふ事である、此所を過ぎて寄宿に歸りし時は正午に逢ふと云ふ頃であつたから此所で晝飯した、程なく松村先生は演習林の地圖を手にし吾々に對して林

相其他種々此山に就へて左記の如き御話があつた、了つて後先生に禮を遣へて原生林を見んと他の人に從つて行く、此林は寄宿舎の東北の程遠からぬ所にある、闊として晝尙暗く雜木繁り、其下は一面落葉を以て被はれ、傾斜急にして實に木曾山にも劣らない位の所であつた、此所を去つて椽の造林地を見んと山越え谷越え漸くの事目的地に着いた。

椽の造林地は凡そ四町歩あつて、其植え付けたのは明治三十二年である、其高さは五六尺より大なるものは七八尺になつて居る、而も椽の樹との間に此樹の保護の爲めに四尺より六尺位のかやを植付けてある、此椽樹は生育が割合に良好である、此所を過ぎて歸途に就く、途中杉林を見る(四五十年生)實に直幹無節の美林であつた、此所を去つて朝通りし切通に出で暫時休憩し、案内者に禮を遣へて直ちに旅舎に戻る時午後六時。

農科大學林學部清澄山 松村先生談話
(一) 養魚池に就て

現今養魚池は三つありて面積合計三百六十坪、周圍は岩を以て成る、第三の池即ち最下の池には池中に木製の樋あり、これ上池の掃除の際濁水の下水道に混せ

ざるの要なりと、本池は今を去る五年前佐々木忠次郎氏の考案によつて試験的目的を以て始めたもので、一の池は本年五月十七日に於てこしらへたものである、一つは三四年前に造りたのである。

(イ) 魚類の選擇

魚の種類を撰ばんとする時に於て二つの説が出た、一つは鯉で、一つは鯉である、然れども鯉はまゝ濁水に植込み山間清水に適せず、且つ其他の關係よりして鯉を養育することにしたのである。

(ロ) 買入地と孵化法

鱒は日光に産するものであつて、先づ之を買ひ入れんとするには卵の時に於てするので、先づ牝性のものを十一月頃に於て釣り上げ、陸上に引き上げるや直ちに頭より下方になで下す時は卵が出る、少しく水を濡れたる桶に入れる、此間に於て注意すべきことは少しも日光に觸れしめぬ事である、斯くする事數匹、其後牡を釣り上げ前の如くにして腹をなで下し精液を卵にかける、然る時は其卵は受精して卵子が漸く生子と變する、其間は約廿日余りである生子となつて卵から出た時には雛卵を以て養ふのです而も生子の長じて餌を得る様になれば始めて池に放

すのです、然る時は一万粒の所から三千位の幼魚を得ることが出来る、然れども本縣の如きは氣候の暖き爲二三年生となる迄には四五百匹に減するので、之を養ふにはさなきや其他のものを以てします。

(二) 清澄山に就きて

農科大學演習林は面積凡二千四百四十余町歩にて、房總の國境によりて奥山と清澄山とに分れて居る、此内清澄が三百三十六町歩である、清澄の林の目的は主として教師及び學生の研究並びに學生諸生徒の實習用に供さんとて傍ら林業上の模範林をも含味し利益收入を得て廣く世人に林業の念を起さしめんこの目的である。

此清澄山は明治廿七年農科大學演習林となつて以來林地の測量及び區劃をなして現今では十四林班に分れてある、又未だ嘗て斧を以てない原生林なるものが十四町歩ある。

(三) 奥山に就て

奥山は上總國君津郡龜山村に在つて、東南の一部に於て房總兩國に界せる山脈を以て清澄山に連る、樹種は主として常緑闊葉樹のあかし、やまざくら、かき、きかき、などである、針葉樹にてはのみ、つ

が、其他には松類にて此等を上木とする中林様の森林である、本縣に於ては明治三十年始めて農科大學の所屬となりしものにて、日を經年すること未だ淺きを以て施業の見るべきものがない。

(四) 造林の目的

造林は用材を以て主なる目的とするのですが、現今にては製炭となつた、用材となるべき林は少くして且つ下等なるもので自然に薪炭材となるの止を得ざる次第である、此の山に於ては一種特別なる方法で、其法は半兵衛と云ふ人の發明になりし故に半兵衛法といふた、炭の焼き賃は一日男三十四錢乃至四十錢輸出先は主に上總である。

(五) 一般に就て

1、植付け
植付も其試験法として種々なる者がある、今吉野地方に於ける植付けと天龍地方に於ける植付けとを比較する時は粗密の度合が全く反對である即ち天龍地方では粗であつて吉野地方は密である清澄の如きは開伐の目的に於て植付けに多少があるけれども、坪に約四乃至五本を植付けるので然る時は直延成長をなすのである、之に仍て用材形数は六乃至七となる

即ち六十パーセント乃至七十パーセントである。

2、地質と各樹種
赤松は最も乾燥地に適するのであるが此松に次で乾燥地に成立するものは扁柏である、扁柏は之を他の樹種に比較する時は甚だしい乾燥地に成立するものである故に本山の如きも杉の成長し能はざる土地には扁柏を造林するのである、之れ將來に於ける作業法の一である。

3、收入の見込額

兩山の生産面積、奥山に屬するものは一千八百余町歩、清澄に屬するものは三百三十六町歩であるが、之を概算して扁柏或は杉の人口林となるべきものは矮林又は中林として保存を要するもの、清澄に於ては杉及扁柏林二百八十町歩であつて矮林のもの約廿町歩である、奥山に屬する杉扁柏の林は千三百廿町歩矮林四百八十町歩である、今日に於て將來を押し時は杉が第一である。

4、伐期年齢

伐期年齢は松にありては六十四五年、杉にありては七十五年である。

5、柵

本山に於ては薪炭材として輸出するには柵を以てするので、其元口は約一寸三分で末口は七八分位から以下のものは之を入れることがなく、又曲幹及び枝木等を取らない、其積方は六六三の積方です。

6、用炭材

薪炭材の主なるものは柵である、炭に焼ての五パーセント位で、次は山櫻で之は僅か六パーセント乃至九パーセントであつて、其他の雜木にありては十二パーセント以下です、つゝ、じ類は其小なるものに比して長時間の保火力を有するものである。

7、入費高

造林に要する費用は大なるものにあつては壹町歩貳拾貳圓内外を要します、又かやの成立して居る所である壹町歩六圓内外です、其他雜草の成立する場所は八圓乃至九圓を要するのである、其下草蒨に至つては植附てから二年で止め、其後は蔓などを薙り取る位の事なのです、其費用壹町歩壹圓五圓六拾錢位(年二回)又苗木植附は二人で一日に五百五拾本位です。

8、苗木の價格

苗木は其の良否に依りて多少の差異はあるのですが

大低杉苗壹万本貳拾圓から極高價の時で四拾五圓位

に至ることもあるのです、其苗木は三年生で長さは二尺から二尺五寸位である、扁柏は四年生のをを植樹して又時には三年生のをを用ゆる事もあるのですが其の價格は三十圓乃至四十圓位です。

9、錯酸石灰と曹達

錯酸石灰には溶液二斗三升に石灰の一貫目を入れて二貫目の錯酸を生ずるが、此價は僅々廿五錢から卅錢位で買却する、之を釜にて計算する時は三圓乃至拾五圓を得るに止まつておる。

曹達に至つては更に甚だしきもので、良き具合に行くと時には四圓位を利するも失敗する時は四圓位を損するので、其上釜でも破れる様な事があるので、から本山に於ては不利ながらも錯酸石灰の方が勝てるのです。

只今申し上げた通り、清澄山の如きも樹種に困難であるばかりでない、諸君は後日此日本の荒廢せる森林に對して整理せんとするには何れも其大多數は本演習林と大同小異或はそれ以下に位するものである、故に本邦の森林教育を受け後日社會に立たんと志さば必ずや此錯雜なる所の作業法に就て自ら考思發見する所な

かるべからずである、然らざれば此學を應用して之れを以て國家經濟の樞軸とすること能はずである、諸君が後日に於て爲すの責任豈大ならんや」と

○六月一日 快晴 金曜日

本朝は愈々又乗船して舟小僧の物笑ひとなるべきも、出船の都合により午後に出帆する事となり、白衣をまこめて洋々たる海波の押しよす松風に答ふるあり、或は大波を頭上より頂きて快を叫ぶあり、海邊の遊覽山岳住居の吾人にどりて物珍しき事のみ多く時の移るも知らざりき、午前九時頃旅舎に別を告げ一行は天津町海岸傳へにて三々五々海波を友として行く事里余鴨川町に着く、茲にて晝をすまし午後三時出發の第三房州丸に乗船す、過ぐる日の船酔に比して今日は誰一人酔ひし者なく、勇敢なる軍歌の下に船はいつしか房州灘も打ちすぎ日も將に暮れんとする黄昏時、彼方の燈臺よりは物待ちがほに孤燈を光らし水烟模湖として鼠色暗脆いつしか宵華の巷にさまよふあり、十二時靈岸嶋に着す。

○六月二日 晴天

今日は東京帝國農科大學林學科及び日黒山林局林業試

験所を視察するのである、併し昨日中の汽船の酔も睡眠の不充分なりしが爲め非常に身體が衰弱して居つたので船中より出づるや直ちに船客待合室に到り十數分間許しベンチの上で眠つたと思ふと早や全く夜も明けたので、其時先生よりは午前八時迄に澁谷停車場に集るべき命を受けて、此靈岸島を發して各自隨意に行動を取りて進み、漸くにして皆澁谷停車場に着し集合する事を得た、又直ちに茲を出發して行く事約十數町にして豊科大學に達した、茲に吾々の先輩なる高樋博君が幸にも務められて居たので案内を乞へて校内の林木見本園及び苗圃を見た。又校舎内は他の人の案内にて教室及び木材標本、陳列室、測量、測樹、器械、造材、伐木、器具室等其他林産物製造室を視察した。

農科大學林科視察事項

A、見本園。(面積一町四反歩)

1、神樹。

原産地、支那。

特徴、互生羽狀複葉にして、雄蕊は香氣高きを以て有名なり、材は淡黃色なり。

効用、材は劣等にて薪炭材(生長よきを以て)行道樹日除樹に用ふ。

6、ニグラカンパ。

原産地、北米。

特徴、材は淡綠色輕軟なれども緻密なく、湿地によく生ず。

効用、家具材薪炭材。

造林、白樺に準ず。

7、ビクノミアツツ。

原産地、北米。

特徴、葉を裂くときは惡臭を有す、花は白色にして六七月に開く、材は輕軟にして土中には保存期長し。

効用、庭園樹。

造林、大造林の見込なし、寒地に適すと云ふ

8、ニセアカヤ。

原産地、北米。

特徴、小葉は雨天又は夜間は榮むの性あり、夏季白色の花を開き芳香を有す、木質堅剛保存期長く濕氣に堪ゆ。

効用、行道樹用材林新炭林地方改良の効あり。

造林、瘠地造林に適し、分蘖分根又は播種によりて苗を仕立つ。

特徴、
効用、
造林、
原産地、北米。

特徴、皮は白色にて黒点を有す、材は緻密にて生長強く強健ならず。

5、アメリカヒバ。

原産地、北米。

特徴、

効用、

造林、

原産地、

北米。

特徴、

効用、

- 9、ラーゲ松。
原産地、北米。
特徴、海岸に近き低地に生ず、生長速なり。
効用、特別な用途なし。
造林、赤松の造林に準ず。
- 10、落羽松
原産地、北米の東南沼澤地。
特徴、葉は羽状を有し柔軟輝綠色を呈す、冬季黄變して落葉す、特に水湿地に抵抗する力強し。
効用、材は水中用材として保存期長し。
造林、温暖帯に適し水湿地に造林の見込あり
- 11、獨乙赤松。
原産地、歐米亞細亞。
特徴、二葉松葉は短く鋭し、陽樹にして厚き皮を有す。
効用、指物、用材、屋内造作、用材、
造林、我赤松に準ず。
12、リキダ松。
原産地、北米。
特徴、三葉松枝幹の中途より葉を出す、又よ
- く萌芽に依りて更新するを得。
造林、吾が赤松に似て強き陽樹なり、湿地に適するも乾燥地に堪へ東京以北より北海道全部の造林に適す。
- 13、ヤマナラシバルサム。
原産地、北米。
特徴、葉は心臟形なり、邊材は殆んど白色にして材緻密なれど輕軟にして強からず。
効用、製紙の原料、燻す。軸木、經木等に適す、
造林、アメリカヤマナラシに同じ。
14、チエーリツツの木、一名ハンテン木。
原産地、北米。
特徴、北米にて潤葉樹中最大なるものにして大なるものは四十間直徑二間余に達するものあり、其葉の形狀は日本職工の印半天に類似するを以て此名あり。
効用、材質輕軟なるも緻密且つ纖維通直刻むに適す、松に代用す、机家具椅子其他小用材に用ひらる、保存短し、其木の根及び枝を以てリニフダントリンなる藥劑を製す。
造林法、播種に依りて吾がシホデに準じて可

- なり。
15、グランヂボクエデ。
原産地、北米。
特徴、葉は對生羽狀複羽にして七乃至九の小葉を有す、材は淡紅色なり重堅にして脆く置粗なり。
効用、造林は内地のしばちと同じ。
16、大王松。
原産地、北米。
特徴、三葉松世界松類中最長大の葉を有し、材の比重又大にして良材を得べし。
効用、最も上等なる指物材と最良質なる樹脂を産す。
造林、温暖より暖帯の植樹造林に適す。
17、ベクチナモミ、(獨乙モミ)。
原産地、歐洲の中部。
効用、テレピン油を採集す。
18、ストロージン五葉松。
原産地、北米の東部。
効用、保存期長し、建築用材又は庭木とす。
造林法、五葉松に準ずべし。
- 19、エキセル松、(ヒマラヤ松)。
原産地、印度ヒマラヤ山の高地。
特徴、葉は長く灰綠色にして下垂し、正しく輪狀の枝を發す、生長速なり。
造林、温暖帯に適す、朝鮮松の造林に準ずべし。
20、ウエビヤモミ。
原産地、ヒマラヤ山脈。
特徴、樹冠傘狀を呈す、球果は美にして樹脂を以て常に蔽わる。
効用、内地の樞に等し。
造林法、樞に等し。
21、フロンバイン。
原産地、北米。
特徴、北米にては重要樹木の一にして長大の良材を生ず、材質強堅にして弾力に富み保存期長し。
効用、堅硬通直にして建築、橋梁、船艦用材に供す。又小材は杭木指物等に用ゆ。
造林、植樹造林法に依り杉に準ず。
22、歐洲落葉松。

原産地、歐州。
効用、建材、木工、土工又は鉄道枕木に使用せらる、テアナ香油を製す。
造林、寒地に適す、植樹造林に因る、我が落葉松に同じ。

23、コノテカシハの一種。

原産地、支那。

特徴、枝條向上し箒状をなす。

24、オクチデントヒバ。

原産地、北米。

造林、我属柏に準すべし。

25、亞米加栗。

原産地、北米。

効用、劣等の家具材桶又は家具材料に供す、ミツバクりに似たり。

26、海岸松。

原産地、歐州北部、亞弗利加。

特徴、海岸の開放せる砂地に適す、材質は強硬にして樹脂に富む。

効用、佛國にては海岸の防砂林として造林す

盛に樹脂を採集す、材は建築用材木工及船艦

用材に用ひらる。

造林、暖帯海岸砂地の造林に適し、黒松に準す。

27、鉛筆ビヤクシン。

原産地、北米。

特徴、一種の香氣を有す、少しく苦味あり、故に虫害に罹り難し。

28、コノテカシワ。

原産地、支那。

効用、櫛用及び庭木種子は漢法醫の藥品として用ひらる。

造林、木幹高く伸長せざるを以て造林の價値なし。

29、臺灣赤松。

原産地、臺灣、南支那。

特徴、二葉松にして枝廣く伸びて其針葉長くして稍軟かなり。

効用、吾が赤松に同じ。

造林、吾が赤松に準すべし。

其他、

クワドリ、ホリアンタル、ラウランヒノキ

ナ、ブリスレンチスナ、ミチスマツ、センベ

ルケブレス、ラウウレノキヒマラヤ、トグラ

スツガ、ベグ、ウエビヤモミ、ストロブ

五葉松、ペクチネモミ、トーンントザ、カリ

ヤ、ボルチナカリヤ、バルストカシワ、ルブ

ラカシワ、セルリスカシワ、フェルコーザカ

バ、獨乙タラヒ、ヒマラヤ、モリンダトーヒ

、スピカト、グランヂ、ニグテ、ジルパチ

カ、アルバリヤ、モニリヤマナラシ、バルサ

ム、イネルミスビクノニ、レントカカンバ、ニ

グラカンバ、等なり。

B、林産物製造室。

林産物製造所に設置せられたるもの次の如し。

1、木材乾燥装置。

2、闊葉樹乾餾装置。

3、針葉樹乾餾装置。

4、瓦斯溜。

5、大小蒸溜釜。

6、蒸發爐。

7、瀉過袋。

8、アセント製造装置。

9、松脂採取器。

10、直火式松脂蒸餾装置。

11、過熱水蒸氣式松脂蒸餾装置。

12、焦性松脂油製造装置。

13、松香油より人造樟腦を製し、松香油固松油

より煉漆ペンキを製するが如き、特別な器

を用ひずして實驗すべし。

14、樟腦製造實驗装置。

15、樟腦精製装置。

16、木纖維製造装置。

17、鋸屑酒精製造装置。

18、木質維電氣漂白装置。

19、燃料の熱量試験器。

20、單家製造器械。

針瀉乾餾装置より出づる木瓦斯を貯ふる爲め設けられたる瓦斯溜は、直徑六尺高さ七尺、鉄板製の瓦斯溜は直徑七尺深さ六尺、木製の貯水槽よりなし百七十五立方尺の瓦斯を貯ふるを得べし。

蒸溜釜は大小二ヶの二種あり、大蒸溜釜は最大直徑一尺五寸深さ一尺六寸銅製にして三斗を入れるべく、小蒸溜釜は最大直徑一尺二寸深さ一尺二寸五分銅製にして

一斗二升を入れるべし、此貳個の蒸溜釜には何れもピストリー氏の冷却器を接続す。
林産物製造品標本左の如し、

- 1、木炭。
- 2、木醋酸液
- 3、木精。
- 4、鎔酸石灰、
- 5、鎔酸。
- 6、アセトン。
- 7、クレオソート。
- 8、フォルマリン。

椎 茸

- 1、椎茸胞子、椎茸の褶に生ずる胞子の集まりもの、此胞子の飛散によりて天然に到着し椎茸は發生す。
- 2、椎茸菌絲、椎茸の菌絲は肉眼にて識別し難し、其集まりて白毛状をなしたるものは漸くに認むべし。
- 3、椎茸發生、椋木標本、甲、椎茸の胞子を新椋木に播付けしものにして一年にて椎茸發生したるものあり。

- 4、椎茸發生椋木標本、乙、純粹栽培に依りて胞子より發生せしめたる菌絲を新椋木に播き付け、一年にして椎茸を發生せしめたるものあり。
- 5、椎茸發生椋木標本、丙、椎茸の盛に發生する椋子の一部を伐取り新椋木に嵌込みたる物にして、一年にして椎茸を發生せしめたる者なり。

- 1、粗製ポツタース。
- 2、精製ポツタース。
- 3、精製結晶ポツタース。
- 4、利用及び森林設備學陳列品。

- 1、林學教室二階廊下。
- 2、普通使用する木工、器械、圖面、及び土木、石工、地形工事に関する構造圖面を見る。
- 3、製圖室。

- 1、本試驗所は明治三十二年の設立であつて、從來の西ヶ原樹木試驗場を移轉して、更に其規模を擴張せしものである。
- 2、製圖室。
- 3、利用教室。

4、利用學陳列室。

木材人工着色研き出しの材料及び建築石材等を陳列す、其他木曾森林に於ける舊幕時代の成木の習慣圖示したる扉額を掲ぐ。
歐洲にて盛なる木材研き出しの標本、又木曾森林に於て現今行へつ、ある伐木装置寫眞を掲ぐ、其他歐洲林業に關する寫眞を掲ぐ、又本邦産の木材標本と示せり、歐洲の山地に於て使用する簡單なる水車鋸器械の模型を見る、又東西に於ける鉄索運搬装置の寫眞を陳列せり、又澳洲沙防工事の寫眞及び學術的林況の寫眞を掲ぐ、香木、唐木、木材割裂の難易を示し、又本邦竹類各種の標本を見る、及び熱帯地方産の木材と經木の陳列せるを見る。

5、第三號製圖室。

森林設計に關する諸圖案を示す、中央の机上には澳國に於ける最も完全なる設計案一切を陳列す、四方の壁面には主として授業上用ふる設計圖を見たり。

右之觀察を終りて澁谷に歸り、乗車して目黒驛に下車し、十數町にして農商務省山林局試驗所を見る、左の

如し、

- 一、本試驗所は明治三十二年の設立であつて、從來の西ヶ原樹木試驗場を移轉して、更に其規模を擴張せしものである。
- 一、内外國産材木見本圖 一町七反三畝
- 一、試驗苗圃 三町八反九畝
- 一、試驗林 七町三反四畝
- 一、試驗室官舎道路業 二町六反
- 一、試驗室事務室、試驗室、標本陳列室、及官舎等構内建築物は事務室、試驗室、標本陳列室には内外國林業上の參考品等蒐集してある、今其概略を掲ぐれば、
- (一) 木材及び木材標本。

是れを分ちて内國産外國産とす、

- 内譯
- 針葉樹大材、 全中材、 全小材、
- 闊葉樹大材、 全中材、 全小材、
- 單子葉類、
- 小笠原産及沖繩産の材鑑、加工木材、雜材、其他の木材あり。

暹羅支那南洋印度北米等の産出に係る木鑑あり。
朝鮮歐洲の雜木材あり。

(二) 森林副産物、并に製造及び加工品標本。

内譯

副産物、(内外國) 蠶類、樹脂、樹皮、五倍子、纖維、土石等なり。

製造品、(内外國) 樟腦、澱粉、油木炭等なり。

加工品、(内外國) 加工物、彫刻物、木地、指物、經木

燒寸、等なり。

(三) 森林動物、植物、標本、及狩獵産物。

内譯

植物内外國。

種子内外國。

高等動物内外國。

昆虫及其他動物内外國。

狩獵産物、内國産、毛皮、羽翅。

全上、外國産、骨、角。

四、林業器具器械。

内譯

測量製圖及測樹器(外國)

造林器械。

伐木、造材、及運搬、器械。
狩獵器具。

(五) 其他林業上の器具器械。

模型品及寫真。

内譯

森林及貯木場の模型。

寫真類(林業上に關する)

(一) 苗圃に於ける目下試驗中の事項次の如し。

苗圃の成長と土壤の關係。

本試驗所は土壤の理學的并に化學的性質の如何なる

狀況が苗木に及ぼすかを調査せる爲に、畑地上

層の土壤、同下層土壤、上層土壤粘土、打土の四

種を六尺平方五尺の深さの木製枠に容れ、之れの

各種の苗木を栽植して其生長の如何を調査す、而

して其樹種は赤松、落葉松、樺、杉、扁柏、樟、檜

等なり。

(二) 苗木の生長と土壤の粒の大小との關係。

林木は同一樹種と雖も其土壤の粒の大小及び水分

の含有の量によりて其生長を異にす、是れ等の關

係は砂防林の樹種の選定或は造林上必要なるを以

て之れを調査す、其樹種は赤松、落葉松、樺、杉、扁

ンバイン、落羽松、樹の一種等、歐州唐楡トネリコ、

或は印度産テラター杉等は生長最も佳にして、

將來本邦に樹栽して庭木或は森林となすことを得

べき見込あり、歐米産の松は生長不良にして害蟲

に罹り易し。

前に記せるが如き觀察を終はりて、直に目黒停車場に

到り乗車し、品川に於て車を下りこれより電車もて歸

舎せり。

六日三日、日曜日、晴天、

指導教員より『昨日は東京附近の主なる觀察を終へし

故に明日は自由に行動を取ること。但し可成深川貯木

場に行き觀察すべし而して夜は十一時迄外出を許す』

この命ありしを以て、起床時間は一定せずして早き者

遅き者等なり。

吾々は本日は東京滞在の最終日なる故に出來得る限り

東京見物をなさんとして先づ各望みの場所に歩を取れり

或は深川貯木場、或は公園、或は動物園、博物館、各

赴きを異にして所々方々を見物して午後六時半頃宿に

歸り夕飯を終へて又外出して時間通り十一時に歸り直

に床に就きたり。

六月四日、月曜日、前雨曇、

柏、羅漢松、樺、○、楡等なり。

三、苗木と受光伐との關係。

林木の生長と陽光とは、密接の關係を有す、實地に

就きて注意すべき樹種は金松、羅漢松、落葉松、樺、

樟等なり。

四、畦蒔法試驗。

種子の形狀大にして且つ幼時成長の甚だ迅速なる

樹種に對しては、從來の平播を用ひずして其畦市

を稍廣くせる畦蒔をなし、翌春根切法を行ふて第

一回の床替を省略し、滿二年生にして適當の形狀

を有せる山出苗を養成するを以て目的とす。

五、苗木床替省略法。

杉、楡或は落葉松、松、及び其他の苗木に根切法を

行ひ、第二回の床替を省略し得る事は前年來の試

験に依りて之れを證明する事を得たるを以て、昨

年來其根切法施行の季節に就て試驗中なり。

六、外國産樹種移植試驗。

本試驗は十數年來之れを繼續せり、而して米國産

樹種リ、デントロン、ブラタニス、ニセアカチヤ

、モニリフエフ、白楊、リキダ松、カナダ樹、ビルゴ

ニヤ、ビヤクシン五葉白楊、ブンゲン唐松、ヲレゴ

覺れたる時は凡そ五時半なりき、本朝旅館八重垣館に於て二年の諸君と別れたり。

天空を見れば今にも雨の降らんとする模様なりし故に大に恐れ、吾々参年級の團体は急ぎて上野の停車場に歩を進めたり。

午前七時半日光行列車に乗り込みたり、列車の發車せし頃より雨は降り出したり、先づ上野より日暮里田端を経て宇都宮停車場より日光線に入る途中、文萩停車場より杉の並木に沿ひ午前十一時半日光停車場に着す。旅館小西屋に行き荷物を預け案内を履ひて日光の神社に参拜す、朱塗の門宮等の説明を聞く、全山は杉を以て蔽はる、此杉は直幹無枝具樹の揃ひたる見事なるものにして徳川三代將軍時代の植栽に係る。日光を見物して其の美麗なるを費用の大ならん事を思ひ、此に依りて大に驚きて此處に祭られたる人物の如何に偉大なりしかを思ひ出したり、見物終はり旅館に歸る時五時半。

六月五日、火曜日、曇天、行程七里半。午前七時旅館を發し、先づ道を高山植物園に取りぬ、高山植物園は旅館より六七町の處東照宮社の北方二町許の處にありぬ、短時間の視察は只吾人眼界に珍花緑草水

麗の岩に當りて飛ぶを見るのみ、然りと雖も筆を借りて之を誌せば日光の理科大學植物園は明治三十六年四月創立に係り總坪數三千二百坪あり、主として高山植物培養の爲めに設備されたるものにして小石川植物園長松村博士之を主管し、常務は望月直義氏専ら其の任に當り、植物の蒐集と培養とに盡力し居れり、園内の様子は築山式にして石をば女校山千疊ヶ原等に倣ひて敷み上げ、深間には數條の堰布を懸けて華嚴霧降などに摸し、而して山麓より頂上に至る迄の間々の土質の處に植物を植付け、其分布の位置を示す爲に最高地にあるものと低地山岳に發生するものとを別ちて總て自然の分布に則りたり、由來日光は海拔千七百四十五呎の高地にありて花期頗る遅く、高山植物も四月末に至りて岩團扇、春虎の尾、深山金梅、深山龍洞、など漸く花を開き、本月に至りて日光産の蘭科植物尤も多く花を持てり、聞く所によれば日光にて既に發見されたる蘭科植物六十八種あり、其内園内にて人に見付け易きものを舉ぐれば一葉蘭、鈴虫草、土蜂草、うちよう蘭、鴨蘭、白山千鳥草、のびねちぢり、小のびねちぢり、麝香千鳥、はうちぢり、等なり、又其他の種類にては燕窩年青、一輪草、二輪草、雪割草、(櫻草科の分花鐘草、日光鐘草

狸を袴、深山狸を袴、石楠、黃花石楠、岩梅、みねつを、岩髯、白根人參、深山壁、麓壁、虫取草、(三十七年白根山にて發見の南山)蝦夷壁、同じく變山、(三十七年中禪寺三澤にて發見の南山)すたやくし、岩團扇、岩鏡、等信州産にては駒草、羽衣草、黒百合、うるつぶ草、箱笠草、(以上二種は白馬山にて發見)ちんだるま、澤山龍洞、つくも草、大葉黃蓮、黃花駒の瓜、深山金梅、三輪草、戸隠の麻、大櫻草、南京小櫻草、等もあり、箱根産の岩櫻草、小岩櫻、上州産の深山酢醬、おさば草、岩手縣早ヶ根産の深山薄雪草、繼櫻草、姫小櫻草、等もあり、以上の草は花色何れも、淡泊にして濃艶ならざれども、嗚へば小女の風姿一入憐れむべきものあるに似たり、要するに高山植物は學術研究の資たるのみならず、世の賞翫家中今や尤も之を珍重し草花中特に價貴きもの多く高山植物中にありと云ふ、止ること三十分余にして脚を當地の各地に届しぬ、當地は元より名稱多く人は静にして雅、夏向寒ければ文人墨客の來る多く、又以て佳人の寓に適し皇太子殿下又此地に玉の宮居を置かせらるご。

行くこと七八町にして弘法大師の投筆と聞くがまんゝの淵に至りぬ、淵は大谷川の流れにあり、弘法大師石の扼せる所に投筆せると、大師岡より凡人に非らざる

中禪寺湖畔一茶店に休み晝飯を食す、一時を期して清冽なる中禪寺湖を舟にて横きらん、中禪寺湖は往時は噴火口にして今は水を湛へ其周圍七里に及び文人墨士の來り遊ぶ多く、湖畔又外人の別荘多し、一時此處を發して國幣中社二荒神社を拜す、社は大穴無地の尊を祀れると時に吾等の先輩なる足尾鑛業會社員山下君及加藤君の出迎ひを忝ふす、折しも風は立ちて波は激して小舟又横斷するに供する能はず、湖畔を過りて以て彼岸に達せんと折り返して湖畔の間を行くこと一里半にして豫定の地に達す、是よりは八町昇りと稱する昇りなり、嗚呼秀粹なる二荒山清冽なる中禪寺湖よ、清きと秀でたると一致せる日光の人此清冽秀粹に浴して又以て藤村が悲觀を取る勿れと、二荒山見へず湖現れざる八町峠の彼方に至りぬ、未だ見ゆるは山殊に著しきは遠近の山林荒廢なり、足尾と思ふ邊りなるや殊に大なり、されど此地には尙極めて稀なる白樺類とかやどを見る、足の急激なる變化の運動は疲れを増すこと大なり、下る事十數町にして嶺に出づ、川に沿ひて行き／＼て頓愈廣く山愈急に草木此所に至りて全く跡を止めず、須臾にして足尾町間藤村に至る、烟毒鼻を衝ひて臭く人心胸を顔色青く目閉み聞藤人民の前途は

如何、日光果して樂園なれば山を隔てたる此地は果して地獄かと思ふに對稱して以て吾人一行の膽を寒からしむ、されど讒て思へば足尾銅の名聲は國土に洽く、本邦輸出金屬の主位を占め本邦經濟界に獻するの大なるを知れば、反面の悲惨なる理なきにあらざるや、朽木旅館に足尾が視察の陳を取りしは之時五時半なりき、先輩山下加藤古畑君等の訪問を忝ふす、外出九時までにて故郷の夢が結ふにつく。

六月六日、晴天、足尾滞在

午前七時半出發鑛業所に向ひたり、當鑛業所は左の五大課に分たる。

- 1、探堀課、岩石を碎き鑛石採掘す。
 - 2、撰鑛課、(1)を受けて機械的に精撰す。
 - 3、製練課、(2)を受けて化學的に銅分をよき分く。
 - 4、工作課、鑛山全般の土木建築等の工作を司る。
 - 5、調度課、上記各課の要求に應じ是を調度す。
- 而して一行は調度課に至りしに、鈴木同課長は懇篤に次ぎの説明を與へられたるは一行の感謝する所なり。

抑も本鑛山は、林業上の視察としては殆んど全く其甲斐なきものなり、何となれば本山は鑛業を以て其主業とし、林業の如きは唯僅少の木材を供給するの

み、しかも其額實に微々たるものにして従て其方法の如きも敢て視察に價するものあるなければなり、然れ共、諸君が態々御光來の事なれば其狀况を御話せむ、

- 1、運搬機關。
 - A、電氣鐵道、主として鑛内と鑛外との運搬益にして僅少の部分のみ、
 - B、馬車鐵道、撰鑛材料及雜品の運搬にして範圍廣し。
 - C、牛車鐵道、製品運搬を爲す。
 - D、鐵索、左の數種あり。
 - 1、ブライヘルド複線式。
 - 2、改良ホドリ式。
 - 3、ハリデー式。
 - E、以上鐵索既成、目下使用し、木材運搬主た
 - 4、玉村式。
- 目下建設中。
- 而して三種鐵索中、
- 1、は運搬力大に且つ最も安全なるも、是を仕掛くる費用及び手入に費用多きを以て、

規模の最も大なる場合にあらざれば收支相償はず。

- 2、は費用多からざれ共、搬器墜落下し自他を害するの不利あり。
 - 3、は其運搬力前者の如く大ならざれ共、費用多からず、搬器落下の懼もなければ當所の如き小仕掛けにては尤も利益なるもあり
- 2、鑛山使用材種及び其割合。
 - A、薪炭材 五割七分六厘。
 - D、用材(建築用) 壹割六分二厘。
 - C、まき 壹割六分
 - D、止木(支柱用) 七分六厘
 - E、板類(矢板) 二分八厘
- 年々是等總材積二拾七方尺、内外を要す。
- (備考)
- 蓋し當事務所は、製練所にて使用する事夥ろ穴内其他の建築材よりも多きを見る。
- 止木用材は、重に三寸乃至六寸角長六尺乃至拾二尺のものにして、矢板は長さ四尺巾一端は一寸六分其他端は六分なり。
- 3、材の供給法。

現今村は群馬縣利根國有林及平川國有林の二箇所より供給す、何れも皆鐵索に依るものなり、而して利根國有林よりは年々約百參拾町歩宛の伐採を爲す、然れ共其材漸く所要の三割八分位に過ぎず、次に平川は總面積六千町歩にして年伐面積二百町歩内外（更新期二拾四五年の計畫）にして根利と相待ちて其需要を充す、若し平川森林にして其面積今の二倍を有し、年々四百町歩宛の伐採する時は以て當山の需要を充すに足る。

斯くて説明終るや、同課事務員の一人案内となりて撰鑽課に導かれたり、茲に撰鑽課の役員案内の勞を取られ、第一第二第三等と順序を追ふて其工場を案内説明せらる、事いと懇篤なりしが、惜しむ可し機械學の知識なき吾々は見ながら是れを解する能わず、唯々轟々たる響に耳を襲われたるを覺るのみ、然れ共其撰鑽の順序の大体は知るを得たり、即ち先づ穴内より持ち來れる鑽石を機械によりて破碎し、其善性物と悪性物とを選擇し、惡を捨て善は更に粉碎撰鑽を繰返し、全く粉末となりたる後は水を水によりて最後の撰鑽を行ひ是れを製練部に送る、而して此撰鑽に用ひたる水は流れ渡瀨川に入り、名にしはう鑽毒事件を起したりし結

果、今は消毒法として毒水に石灰を加へ更に複雑なる機械によりて是れを成度迄蒸し、比較的毒分を減するの濾置ありたり、又水中に含める銅分を採集する目的を以て合銅水中に鐵類を浸せし、一ヶ月三拾貫位採集するを得る由、撰鑽課視察のや更に製練課に導かれて説明を受けたり、然れ共激酷なる亞硫酸瓦斯の襲撃に出あへ咳くものあり、掩ふものあり、吐血するものあり、實にこは轟々たる爲り折角の説明も聞く事能わず殆んど全く不得要領の中に漸く命だけ助かりて出で來れり、更に導かれて有名なる砂防工事を見る、然して其方法は次の如し、

先づ壘を以て長さ六尺直径五寸位の束を針金にて嚴重に締めたるものにて正方形を作り、其一對角線をして山腹に平行ならしむる様傾斜面に是れを置き、二尺毎に長さ四尺内外の木杭を打ち込みて是れを止む、而して此六尺四方内に砂止植物四株植へ、此砂止植物に最も善良なるはイタドリにして、是れにつゞきをカヤ類、檜、竹、松、トチ、アブラナチヤ、ツルウメモドキ、三葉楓等なりと、檜苗木は三年生のものを用へ、名古屋方面より輸入するものにして一本平均九錢の高價に當ると言

六月七日 晴天

ふ、又一坪の砂防工事をなすに材料を除き單に人夫賃のみにて參拾錢を要すると言ふ、斯くて調度課に至り晝食をなし午後は鈴木課長の案内により銀山平に至り鉄索運搬法及び鑛工場を見る、然れども機械學上の知識無きを以て説明する能わず、唯グライフェル式ホドソン式ハリデー式を視たるに止る、斯くて足尾に歸り探堀課長の案内により穴内を見る、内部は支柱と矢板とにて鳥居形アーチ形等に造らる、而して是等木材類は湿地よりも乾燥地の方保存期長しと、而して支柱材の負擔力は全徑のものにありては長さよりも短

午前六時出立の途につき、加藤君の案内にて徒歩すること凡そ三十町余にして本校卒業生山下右畑両君の奉職せらる、掛水出張所につき両君より當事務所につき一場の説明あり、

かき方大なる理由に依りて、若しも上部の壓力大なる時は此部分に使用するもの短かくても、縦に使ふものを長くして、側壓大なれば是れを反對にす、又藥液注入試験成績を示さる、藥劑はカーボリウム、ウーダールにして三拾六年九月よりの試験成績に依れば栗尤も宜しく、サルヌベリ、ユギ、ミラカバ、之れに次ぎ、掬尤も不良なりと、課長の言によれば藥劑は効果大なる故に今後は主として藥劑注入を爲すと、辭し以て旅宿に歸る、時に時計は七時即ち一日の足尾視察を爲す。

一、製板所の構造、
電氣力により。
二、當事業所の柵につき、
通常は十九束を以て一棚となせど當処は二十二束とす
電氣力により製造す。

三、石灰石、
四、森林荒廢の害。
當所の如きは銅山を巨つる事僅なれども能く森林を成立せしむることは容易であります、銅山の如き全く只今の所では全山只山骨のみ残存すると云ふ甚だしき状態で、毎年復舊工事や砂防工事や又は造林等に非常の苦心して居りますが、斯る有害なる化學的性質を含む場所に置きましたは到底數百萬の財を投じて是れを行ひましたも、果して其効は百分の一にも及ばないのです、故に復舊工事の重大にして急務なることは茲に論述せずとも明かで御座います、先づ弊害の著しきものを舉げて見ますと、

一、飛石の甚だしき事、風の起る場合。

二、氣候の不順なる事、朝夕寒て日中炎熱。
三、水の悪しき事、飯料水。

等につき兩君説明せられ、之れより山下加藤の兩君が足尾本町端まで見送られ萬歳の聲諸共に別れを告げぬ此れより我等一行は三々伍々歩一歩毎に發汗を拭ひつゝ大間々をさして進み、午后四時着す、暫く休み五時半發の列車に乗して六時前橋停車場前の鉄線亭につきしが、今日の勞れと空腹に報文んと夕食を待てども中々の事、九時過ぎ漸く夕食に取りつき濟むや、先生と共に上州第一の都會を見んと町に出づれば寂然として人影もなし、先づ勸工場縣廳等を夜目に見て戻りぬ。

六月八日 晴天

前橋發八時拾五分の列車を借り、間もなく高崎につき長野行に乗り替へ、飯塚安中松井田につけば左手の彼方向ふに其名も高き妙義山は巍然として聳え、其麓には老杉の並木は森森として見え、又平地には上州竹と知らざる竹林を見渡しつ、松井田横川過ぐれば世にも名高き碓氷峠(昔日本尊命吾が妻はと呼ばれし所)の隧道に入るや、一同は鉄道唱歌に時を移し出づれば避暑に名高き輕井澤、四方見渡せば心も浮ぶ追分原の右手の方に見る淺間の山は白雲立て、天をも焦さん許りな

り、其山麓には本多林學博士の間伐(吾等昨年視察せし所)を行し落葉松單純林を見、行々点々落葉松の造林せるものを見つゝ何時しか善光寺平條ノ井驛に着ぬ此に於て一農夫に問ひしに答へて曰はく、
此地方は森林の荒廢せる事は甚だしく見る通で御座います、之れと云ふものは御承知の通り斯様の平坦地でありますものですから、農業を重じて未だ林業の如何なるものなるかを解せざる事と、一は人造肥料の高價の爲め勢人造肥料に代ふるに諸々の山々より秣草を刈り込み肥料とするものですからして、只今の林業の發達にも係らず斯くの如く秣草山となして置く有様で御座いますと、語り居る中に汽車はプラットホームに來たれば別を告げ横尻行に乘車し、現今する間に松本も過ぎ横尻停車場に着き、是れより行き先き狭き本曾谷道に入り、進みて本山玉木屋につき定泊しぬ、時は七時頃なりき。

六月九日 晴天

午前七時本山を出發して細き谷道たどりつゝ、貫川平澤奈良井を過ぐれば奈良井峠にかゝり勞れし足を引きづりつゝ辛うじて頂上に達せり、時は正午にて中食をなし、四方を見渡せば遙か向ふに御嶽山は巍然として

山里は霧のかげりの絶えくゞに
水聲鳥の聲聞こゆなり

其頂きには未だ雪の点々も見ゆるありて如何にも寒冷なるかを思はせたり、之れより峠を下り敷原につきしが、連日の疲れにて馬車の方を借りて行くものあり、徒歩するもありて宮の越宿に着けば一二學年の諸君に出迎ひを受けて、勞れを忘れ、勇氣も出て、日光足尾の話しに何時しか校庭につき、万歳の聲に各戻りぬ

○明治三十九年 自六月四日 至全 六日

修學旅行日誌 第二學年

○六月四日 曇天后晴

本日は三學年生諸君と東京に袂を別ち、諸君は奥羽線により向日光方面に、吾々二年生は之より歸路に就く豫定なり、中には三年生諸君と同行したき希望を懐く者もありしが何分財囊の空乏と數日の疲勞とによりて懐しき學校に歸るの却て樂しき心地せられたり、即ち午前六時三十分八重垣館前に於て三年諸君は東に吾々は西に互の健康を祝して別る、七時二十分飯田町發岡の各行の列車に乗す、是より前先生の御考案には中央

線中音に聞ゆる甲府市(甲斐第一の都會にて縣廳には當校卒業生岡戸原近藤三君在り)を素通りするも遺憾ならずやとのことにて評議忽ち一決し、今朝に至りて發表となりしなり、豫定は當夜甲府一泊にて本日午後だけ視察のこと、后一時拾五分かうん停車場に着す時に近藤岡戸原の三君出迎えて待ち居る吾々の喜び一方ならざりき、之より直ちに三君の案内にて先づ縣廳に至り各自の雜囊を下し後當地に名高き舞鶴城へと赴く、此城は元甲府城主淺野長正の據りし處にて深き濠大なる石垣等若くして古の偉を存す、然れども今は此地に珍奇なる植物などを數多植ゑ市民の遊覽場とす、故に一に舞鶴公園と稱す、時殆も一府九縣聯合共進會陳列場建築最中にて、一般人民の入園を禁しあるにも係らず特に吾々の爲めに許可せらる、茲に於て入りて仕事場を通り植物の栽培しある處に行く、然れども吾々は小石川植物園其他農科大學見本林等の規模の大なるものを觀たる後なればにや少しも目に止らず、是より本丸に昇りて四方を見渡せば甲府市街一眸の中に入る、中にも目に立ちまはる若尾銀行師範學校小學校商業學校英和女學校等にてありき、是より下りて山梨縣經營の苗圃及び模範林の參觀に行く、地は市街を去

る南方二十町許の処にあり。

△苗圃

面積凡一町步余(斯位のもの縣内に八ヶ所ありとの

由)

樹種は檜、扁柏、黒松、唐松、くぬぎ、ポプラス等。

右苗圃中樺の二年生苗木二畝歩程全く枯死せしもの

ありき、如何なる故かと問ひしに之れ床料の際假植

し置きしが枝葉の切込みを忘れたる爲め一夜にして

悉く枯死せりと、以て苗木手入には鎖細の事にまで

注意を要するを知る、又此地に於ては赤松の播種後

雀の害に罹るもの多かりしに、之が豫防として種子

に鉛丹を塗り播種せしが成績良好なりと、

△模範林及試験林。

全面積四十三町步、

内

廿四町步

内

拾八町步

内

一、ポプラス、二、三年生三林班、各區共更に二分

現今は赤松くぬぎノ混交林なるがく

ぬぎの單純林に更新の豫定なり。

現在の林木を伐採して試験林の目的

にて種々の樹木を植栽す。

試験林は已に十林班程植栽ありき、今其樹種を擧ぐ

れば、

し半は切込をなし他はなさいるものにてせざるもの、方成長遙かに良好なりき。

二、ユウカリブタス三年生。

三、ビキナス、リギダー。

四、やまはんのき單純林。

五、ひめやしやぶし。

六、けやき、はんのきノ混交林。

七、ポプラストくぬぎの混交林。

八、赤松ノ單純林等。

右試験林中に長さ三百間余幅九尺にして最も完全な

林道あるを見たり、其工事費一坪凡一圓に當ること

云ふ、(但し之れは設計費を除き單に人夫賃のみなり)。

○六月五日 晴天

午前六時三十分起床、甲府發七時四十五分の列車に

乗じ時々山間より隠見する芙蓉の秀麗を稱しつゝ、拾一

時四十五分岡谷驛に下車す、此處にて晝食を喫し之よ

り三々五々隊を組み小野峠を越ゆ小野驛に出で、是より

櫻澤街道を辿りて途を路人に尋ねつゝ、休みては行き

きては休み齋者と繁茂せる森林の間を通り、午後七時

七時寶川驛坂本旅舎に投宿す。

○六月六日 晴天

午前七時半寶川坂本屋を發す、天拭ふが如くなれば一

同喜びて足を早め歸路に付く、鳥居峠は遙か我が目前

にありしが歸路の勢か將た一同の健脚の爲めかいつし

か絶頂に達しけり、茶屋にて休憩す、四方の景色甚だ

良くして遠く御嶽萬年の白雪を載き雲上に聳え、下には

即ち岐蘇の深流、曲折紆索して流れ、實に美觀たり

奇觀たり、斯くする内に午前十時を報じれば此處を

降り足を早めて福嶋に近づけば、一學年生諸君の迎へ

らるゝあり、午後三時一同無事且つ愉快に旅行を終へ

て歸校するを得たり。

旅籠を出でし折りに扱ぬものは
踏まなきやめなりけり

瑠璃子

第一學年遠足旅行記

(明治三十九年度)

松澤生

六月十四日夜消燈後、我等第一學年寄宿生は直ちに第一室に集まれる命あり、即ち會するもの三十一名、百瀬先生あり未だ一言をも發せず、我等の心は亂れて麻の如し、先生斬く口を開きて明日運材及伐木を見んため阿寺に向ひ遠足旅行に出發すと、皆其急なるに驚き

吁然たり、稍ありて其嬉しき恩命を喜び各々室に歸り寝に就く、夢は己に旅路にあり。

夫れ旅行は人生の快事なり、而して我等は變化なく從

て趣味乏しき寄宿舎生活に倦み日々學術の研究に精神

を疲勞せり、況んや林業に多少の趣味を持ち机上に學

びし所に實地につき山高く谷深き森林而かも作業に従

事する所を觀察するは之れ所謂百聞一見に如かざるの

謂なるに於ておや、何ぞ夫れ斯の如き快事に相遇して

誰れが之れを喜ばざるものあらんや、然れ共我等は此

れを喜ぶを以て止むものにあらず、必ずや林學上に地

理學上に社會學上に於て多大に得る所あらんことを期す。

六月十五日金曜日、曇り夕立模様、福島發野尻泊、行程七里。俄の旅行なれば少しも準備なし、依て午前十

時漸く出發するを得たり、總勢四十八名寫眞器を携るものあり雙眼鏡を負ふものあり、百瀬先生指導の下に

中仙道を南に進む約一里半にして棧に着す、時に午前

十一時半なり、晝食を喫す、路傍芭蕉の句あり

棧や命をからむ萬かつら

今は道平坦にして棧は名ののみ留む、然れ共水曾川の流

は脚下を洗ふ、岩石河中に峙ち碧流之れに碎けて白泡

を濁り、木曾八景の一なり、風景佳絶、此所を出で上松を過ぎ、寢覺に着す、寢覺の床は國邊を下る一丁余なり、木曾川の急流此に至りて迫り其幅僅に二三間なり或は瀬となり潤となり其水深さを知らず、兩岸奇石岩重疊起伏、突兀柱の如きものあり、平坦壘の如きあり、各々形状により象岩、腰掛岩、獅子岩、豆腐岩等の名あり、奇怪万狀筆紙のよくなる所にあらず、寢覺より半里にして小野の瀨あり、道の左側に位す、清流斷崖より墜落して雲霧を噴く、旅客座ろに涼冷を感ず、立町を経て須原に至る、名物花漬を嚙く

須ばらしいぞへ須原の櫻

漬けて沸湯の中に咲く

長野を過ぎ午後五時頃野尻に着し加納屋及び木戸旅館に泊す、晚餐後先生より明日の出發時限其他種々の注意あり、午後九時半寢に就く、氣候福嶋に比し温暖蚊往々襲來す。

六月十六日土曜日晴天

阿寺視察行程五里

豫定の如く午前六時阿寺に向て出發す、途中崎嶇寸製遺所に至る、折悪しく休業なりしを恨みとなす、然れども懇切なる説明を與へられて大に得る所ありき、半里許にして木曾川の西岸に渡る、即ち阿寺川の木曾川

に注ぐ所なり、目的地は此地流に在り、既に運材の機關なる輕便鐵道の着点あり、此鐵道を通り阿寺川に沿て上る愈々上れば山愈秀で深愈深し、或は棧道ヲ設け或は山腹を穿ち或は橋を架して鐵道を敷けり、脚下は流れ滾々瀝して蒼派となり懸りて飛泉となる、仰げば峻岳巍々雲表に聳老杉古松枝を混へて鬱蒼たり、山路の妙溪流の奇形容するに詞なし進むこと二里にして伐木事務所に至る時に午前九時校長先生の小川より來山せられあり、小憩後校友岡田彌兵衛君の案内により視察に就く、山險峻にして坂路の困難名狀すべからず或は岩を踏み巖に攀ち或は葛に捫り繩に縋りて登る、息は喘ぎて急に汗は流れて潮をなす、漸く運材をなす所に至る道僅に半里にして時己に午前十一時なり、中途しゆら、とひ、せき、さで、うす、とめ等の運材機關を見たり、運材人夫は他ト舊口を携へたりおほ、い(注意して仕事せよの意)ごぶしよ(五分しよにて少し動かせる意)の聲勇ましく蓋口を用ひ運材をなせり、運材を見ること暫くにして二の澤出會所に至る、時正に午の刻晝餐を喫す、

校友仁科春君あり、食后とめ、しゆら其他に付きて説明の勞を取らる、山を下る途中岡田君よりさで、うす、

せき、とひ等に付きて説明を聞く、午後三時再び事務所に至る、岡田仁科の兩君の好意により我等一行に飯を給せらる、二八と稱しき飯なく空腹なれば忽ちにして平々、餓えたるものは食を撰ばすと異なる哉其美味實に忘れ難し、深く兩君に感謝する所なり、食後製板所を見る、而して我等は事務所の好意によりとろとろくに乗じて歸路に就く、走ること速にして涼風面を掠め實に無上の快感なりき、二里の道も僅に三十分余にして至る、其れより木曾川を渡りて野尻に着し木戸旅館及び加納屋に投ず、時に午後六時半、今日見聞せし所の要点をは之を別記す。

六月十七日日曜日晴天野尻發小川伐木所視察歸校行程十里

鷄鳴に夢を破ぶられて起く、今日は山越をなすを以て案内者を雇ひて宿を出でしは午前六時頃なりき、長野より木曾川を渡りて殿村に出で小川に沿ひて逆る、都合により直に歸校せしものありて一行二十九名に減ず、藪蔚たる樹木の間を行けば河中に岩あり平にして數十人を座せしむべし、乃ち座して一休す、進むに従ひ流れ漸く小さく樹木益々大なり、漸く進めば唯巖洩る清水石に激して銀花の散然たるあり、大樹森々として天

を蔽ひ蒼苔を纏ひ糾纏枝に生するを見るのみ、進む事二里許により途に流れ盡き少しにして頂なり、此れより下り行く一里弱にして深淺たる一流に會せり、之れ即ち昨日視察せし阿寺に上流なり、其れより少しく登れば眼界漠として遠くは御岳乗鞍槍ヶ岳の運峯を望むべく、近くは伐木作業の所も見ゆ、約半里にして小川伐木事務所に着す時に正午なり、晝餐をなす、小時休憩の後伐木作業地に向ふ、偶々二三學年諸君の來るに會す、乃ち太田事務所長は諄々として伐木其他に付きて懇切なる説明を答へらる、我等は二三木の伐木を見紀念の爲め袖夫と共に撮影す、此地は阿寺の險峻なるに反し傾斜甚だ緩なれば、運材の機關は多くさでを用ひすしゆらを用う、事務所に來る時己に午後四時なりしかば直に歸校の途に着く、降り坂なれど空腹の爲め歩行珍ららず午後六時半に至り漸く上松に着す、即ち一茶亭に入りて晚餐を喫す、已にして日全く暮れたれば道暗し、されど満腹なれば元氣事の外旺盛にして棧も難なく過ぎて學校に着す、時に午後九時半なり、今日小川伐木所視察要項は之を別記す。

(阿寺) 伐木事業

伐木を始めしは明治二十年なり。

明治三十八年度即ち、昨年 に於ける 伐採地面積は四十三町歩なり。
今年度は伐木を中止し運材のみを行へり、故に柚夫は僅に一組にして数人あるのみ。

運伐事業

今年度に於ける運材の材木數五万七千四百三十本、材積三万六千十八九尺^β、外に製板材として九千九百六十六尺^β、内譯左の如し。
花柏、壹万八千三百七十一尺^β余。
扁柏、二万七千二百二十八尺^β余。
ひめこ、四百十四尺^β余。
ねすこ、四尺^β余。
あすひ、八分九厘尺^β。
計、三万六千九十九尺^β。
外に、九千九百六十六尺^β。
總計、四万五千九百八十五尺^β。

運材の機關

山落しの機關としてとめ、しゆら、さで、らす、せぎ、とひ等を作れり。
1、とめ、とめは又、まや、こも稱し落來る材木を一旦止むる所なり、一個の完全なるとめを造るは凡そ六十

工を要すと云ふ。

- 2、さで、さでにはのらさで、そらばんさで、たんばさで、もつこさで、等の種類あれ其主にのらさでを設く、のらさでは材木を滑らし落すものにして傾斜六尺に付き八寸乃至一尺長さ大抵二三十間の棧道なり。
- 3、らす、運材の方向を轉するものにしてのらさでより材木の落ち來る所に設くるを常とす。
- 4、しゆら、さでと同じく材木を滑らし落す機關なれど、のらさでより傾斜の緩なる所即ち其傾斜六尺に付き八寸以内の場合に設く。
- 5、せぎ、河水をせぎ淵を作りたるものなれば大谷にして水のある所に設く。
- 6、とひ、必ずせぎの次ぎに設く、材木を組立てたるものにしてせぎより水を通ずる事を得るなり。

運材の方法

先づ最も上方のとめに材木を集む之れを集材と云ふ此所にて一時材木を止むるなり、而して之れをしゆら又はのらさでに致せば滑り落つ、しゆらは直ちにさではうすに當り方向を變しとめに至りて止む斯くの如くにして小谷より大谷に出すれば淵よりとひ中

に流しとひよりしゆらに致し滑らせば再び淵に至る斯くして輕便鐵道の起点に致す、夫れよりとろつくにより木曾川に致し筏と成して愛知縣地方に送る。

運材の人夫

運材の人夫は之れを日雇と云ひ、組織整へり。日雇總頭は日雇をなす總管す、其下に日雇代人あり。各一組の日雇を統率す、一組は三十人よりなる、現今七組あり、去れど農蠶等の爲め僅百六名に過ぎず又各組に人夫頭あり之れは人夫の供給人なり。

仕業時間

朝は七時に始まり夕六時に終る、晝飯十一時にして其間に於て十五分間の休憩あり、食後三十分の休憩をなす、午後一時半頃十五分の休あり三時頃に十分休憩ありて其時小晝飯を食す、而して後上り迄に十五分の休あり一日の労働時間は十一時間にして休憩時間を引き去るも尙九時間半なり。

賃金

日雇者は日當二十二錢にして増金五錢あり、日雇代人は三十六錢より四十五錢なり、總頭は四十八錢より五十三錢迄なり。

給與品

毎月五月より十月迄は一人一日白米九合十月より五月迄は八合を給し、其他味噌三十匁鹽三匁を給す。(小川)

伐木事業

伐木を始めしは明治二十八年。今年度に於ける伐採地面積は三十一町歩なり。

伐木の方法

斧を用ひ地上一尺許の處に三方より穴を穿ち三本足なる様にす、而して倒んとする方向の穴を少しく大に反對の穴を稍小にす、其倒さんとする方向の穴を受口と稱し他の空を追口と稱し、而して其三本足をつると稱し受口に接する二ツをよこつると稱し、他の一つの追つると云ふ、各穴の通ずるときは内部より外に向ひ鋸にてつるを切り僅に外部を殘し後つる止めを行ひ而して追つるを斧にて切るなり、斯くすれば受口の方角に倒る、此伐木法は材量を損するこゝとあれども材木を割製するの憂なしと云ふ。

人夫

伐木の人夫(柚夫)は十二人を一組とし、十組ありて柚夫代人數人總頭一人を置く、現今は僅に六十人の

雜 報

み、貨錢は上等柚夫は一日一圓五十錢下等と雖も四拾錢にして一人平均六十錢なり。
運材人夫は百五十人の處、六十人のみ其組織及貨錢は阿寺に於けると同一なり。

●第三回卒業證書授與式

去る三月二十日午前九時第三回卒業證書授與式を舉行したり、生徒職員及び渡邊郡長東郷御料局長師大澤縣會議員等の來賓一同着席し、先づ君が代を合奏す、次に松田校長の勅語捧讀米山首席教諭の本學年に於ける學事報告に次て證書授與及び賞品の授與を終はり、校長の訓辭大嶋教諭の職員總代の祝辭渡邊郡長(現佐久郡長)大澤縣會議員の祝辭演説あり、夫れより山下藤一卒業生總代として答辭を朗讀し了りて午前十一時全く式を終れり。

本日卒業證書を受領せし諸君の氏名を左に掲ぐ

(身長順)

- 鹿兒島縣平民山下藤一君 長野縣平民清澤巳末衛君
- 長野縣平民鶴殿 正雄君 長野縣士族柳澤 熊治君
- 長野縣平民小林桂一郎君 熊本縣平民山下 常記君
- 石川縣平民寺尾 敬二君 長野縣平民千村 重喜君
- 長野縣平民池井 深一君 石川縣平民但馬 廣造君
- 石川縣平民宮崎清太郎君 長野縣平民松原 秀吉君

弘法を狸にしたる 蚊道かな
蚊はこちへはいる隣の蚊道哉
雲龍に借芝おはす蚊道かな
支考 也 有 召 波

- 長野縣平民加藤十七三君 長野縣平民下畑 徳十君
- 長野縣平民北原 利雄君 長野縣平民代田善次郎君
- 長野縣平民古畑 金藏君 岡山縣平民戸田 續君
- 長野縣平民宮田 實君 長野縣平民寺島 正治君
- 石川縣平民宮森太一郎君 長野縣平民小藤作四郎君
- 長野縣平民宮下 信一君 長野縣平民野知里慶助君
- 岐阜縣平民河島 正己君 石川縣平民岡田彌兵衛君
- 愛知縣平民三宅 周吉君

●木曾山林學校第五回創立紀念 寄宿舎祝賀會

明治三十九年五月十五日は吾人の最も紀念とすべき吉辰なり、即ち今を去る五年前の今日に我が木曾山林學校は此の世に生れ出しなり、されば吾々舎生たるものは如何ぞ此の吉辰を究しく過すべき、茲に於て介生相談の結果に依り寄宿舎の祝賀會を山緑に水清く黄鳥囀するの時に開かれぬ、午前九時第一鈴を報するや一同會場に来る、式場は國旗を交又し祝意を表せる所の扁額を掲げ儼然たるものにてありし、やがて來賓なる松田校長を初り諸先生順次着席せられる、此の時舎生惣代西野入徳君開會の辭を述べたり、先づ順序に依り會

員各自の住所姓名等の紹介あり、次に本日の祝賀の獻立たる牡丹餅の御馳走出づれば會員一同は吾鼓を打ちならし之を賞味し、満腹に至りて漸く箸を投けたるもの、如し、暫時休憩午後一時半拍手の中に再び開會せられたり、先づ會員有志諸君及び來賓の有益なる演説ありて後に餘興始まる、そは或は劍舞或は詩吟或は福引となり、大に愉快を盡したり、午後三時を報するや百瀬先生の音頭を以て天皇陛下の万歳を三唱し、次に木曾山林學校の万歳を三唱し、芽出度閉會を告げられ

●御料局木曾支廳の城山林道

御料局木曾支廳にては城山をして遊山に便利ならしめんため、今春より支廳裏より幅四尺長一里餘の林道を設け、所々に四方屋を作り休憩所に當て、而して其附近に間伐を行ひて風致を添へん計畫なりとぞ。

●小川伐木所の森林鉄道

小川伐木事業所にては愈地元村民と調停成り、事業所より木曾川沿岸迄森林鉄道を布設する事となり、目下測量中。

● 頗る長機手

小川伐木所にては今春從來使用の機手よりも倍餘のものを作りて運材に供し、可否の試験をなすつゝありと。

● 寄宿舎と道路

福島町道路改修の結果八澤より直ちに八澤橋を渡り、西方寺の西傍に至り木曾川に沿ふて上れる新道を経て大手橋に至り、小学校前の埋立て裁判所の横手を過ぎ、寄宿舎と學校との間を通過し、以て支應に通せられたり。茲に至り愈々我が木曾山林學校々舎改築の必要益々急なるを覺ゆ。

● 滿韓旅行

大戦後の跡地且つは今後我が國民により經營すべき滿韓をして、第二の國民たる青年に之を觀察せしむるは必ず其の効果少からずとの主旨よりして、今夏文部省にては特別の待遇を以て學生生徒の滿韓旅行なるものを企つ、我校にて之に加はりしは指導教員としては林先生三學生生徒藤原政一君二學生生徒竹内茂君全霜田時三郎君なりき。

● 山村少佐と普蘭店

測量製圖を爲したる報酬として贈られし金貳圓を以て校友會大旗を作り寄贈せらる。

● 卒業生の寫眞

三十八學年度の卒業生寫眞を木曾山林學校及法制科教授屬托たりし原田源一郎君へ寄贈す。

● 福島町の外觀一變

數年前に比すれば、近來の福島町に其外觀一變して舊知の人と雖も見違へる許りとなり、即ち別項にもある如く、國道は下町より舊土井倉を直貫して八澤町の中部に出で架するに八澤橋を以てし、橋上より北望すれば我太平演習林は手にとる如く一眸の中に落ち來る、又大平の橋より裁判所郡役所の前を出で、御料局木曾支應に直通する大道は開通せられて、車馬輻輳の聲は吾人が自修學習のインターラクトをなすに至れり、尙我校門前より木曾川を直過して上町中央に至る架橋は來二月中旬には竣功すべく、一方建築物につき見て見ると、福嶋町役場は廣小路の奥に北面して巍然たる二層樓をなし、木曾銀行は舊中金時十字街の角に形勝の位置を占めて輪奐の美新たに成り、御料局木曾支應と

募參の爲め當地に來られし静岡隊の山村少佐に懇請し四月二十二日當夜々友會に於いて普蘭店占領の實戰談ありしが、頗る有益にして趣味多かりき。

● 客年十一月中の主なる來校者

○十一月一日、久米山林局長、橋口東京大林區署長、戸澤長野大林區署長、石北山林技師、照井山林屬、巡視せらる。

○全月二日、渡邊御料局長、佐々木御料局主事、春宮審査官補、岡田長野縣事務官、和田木曾支應、田中技師東郷技師、赤浦技師、巡視せらる。渡邊御料局長には本校生徒の爲めに一場の講演をなしたされたり。

○全月十八日、我が農會の泰斗なる農科大學長松井博士には務臺縣屬を隨へて巡視せられ、本校の教授に就きて終日周到なる視察を遂げたる、後に最も適切なる所の批評を施したりとか。

○全月廿八日、中川文部視學官には唐澤縣視學を隨へて巡視せられ、我が寄宿舎食堂に於て舍生と畫餐の會食を試みられたり。

● 校友會大旗の寄贈

三十八學年度の三學年が、福島町上町の橋梁に關する

幾多の官舎とは町の東北方に其宏莊の洒灑の觀を戦はすあり、其他某々旗亭の二層高樓の木曾川に臨みて増築せらる、あり、斯く福島町は山谷中の一都會として頗る其體面上の光彩を發揮し來れり。

● 古刹興禪寺烏有に歸す

木曾峽の古刹として、又山村家の菩提寺として著名なりし興禪寺は、昨冬十二月廿四日午前二時半頃本堂の背面の一角より出失し忽ち俱利に延焼して炎焰天を焦がせり、當夜幸ひにして風はなかりしも附近消防に資すべき水利の殆んど絶無なりし爲め、見る／＼内にさしもの大盛も全く全焼し、除炎は觀音堂鐘樓山門にまで燃移りて午前五時頃漸く鎮火せり。

● 山林局の製材事業

農商務省山林局にては各大小林區にて拂下つゝある材木を製材として拂下げ、林業の收入を圖る目的にて、昨三十八年來製材所の設備に着手し、青森大林區署下に一箇の製材所を設け製材の販賣を試みたるが、其設備には種々不完全の点ありて事業の進行は十分ならざれども、製材の販賣は從來の拂下げに比して極めて好良なれば、本年度より秋田熊本兩大林區署下にも製材所

を設置する事に決し、秋田の方は既に土工に着手し來四十年度には製材に取掛る豫定なり、因に現在の青森製材所は一ヶ年十餘万貫を製出し得る組織なるが、秋田製材所は三十万貫以上を製作し得る大規模なりと。

(毎日電報)

●製材所よりの申込み

青森製材所にては已に本校卒業生數名を雇聘し、夫々事業に従事しつゝある事なるが、尙來年度に於て青森秋田兩大林区署より本校卒業生六七名の聘用申込に接せり。

●樟樹栽培現況

元來樟樹は暖地を好むものにして、本邦に於ては九州南半及び四國南岸の地方を最も適當とす、されば鹿児島熊本高知の三大林区署に於ても近時務めて之が植栽の方針を執り、去三十二年以來全管内に於ける樟樹植栽反別は總計六千餘町歩弱に達したる由、尤もこは霜害蟲害其他野火等に對する關係上大概松又は雜木等と混植林をなせるものなれば、單純樟樹林としての面積は前記計數よりは餘程減少すべく、而して又明年度同管内に於ける植附總反別豫定は二千町歩なりと聞けり

●縣設苗圃の成績

本縣下の山林原野は其面積頗る廣く殆んど林業國を以て目すべし、然るに維新大政の更革と共に林政大に弛み、濫伐其極に達し、水霜害頻りに臻り其損害尠からず、加之用薪炭材の欠乏は製糸其他事業に影響し、之が救済策を講ぜずんば將來豫測す可からざる大患に陥るべきにより、本縣は各地適當の各種苗木を養成し、山林原野所有者に無代下付し、最急のものより漸次造林の目的を以て明治三十一年の通常縣會に謀り、翌三十二年度より四十一年度に至る十ヶ年を一期とし、縣

費十六萬八千八百七十一圓廿七錢を同年間に支出し大小十ヶ所の苗圃を設け、三十四年六十五萬八千八百四十九本の苗木下付を初めとし、爾來年々苗木養成と同下付をなすこと六年間、苗圃設立計畫以來八年を経るに至れるを以て、本縣は開が既往成績を調査し種々の方面より事業經營上必要なる事項を調査する處ありしが、今該調査の要點を擧ぐれば、本縣が昨秋迄に下付したる苗木數は、六千五百四十三萬九千七百九十五本にして、十ヶ年間の豫期數五千萬本よりも既に千五百四十三萬九千七百九十五本を超過し、植林反別は當初十ヶ年豫定一萬六千町歩に對し既に二萬八千八百三十三町二反六畝十五歩を超たり、是亦五千八百三十三町二反六畝十五歩を超たり、而して樹種の最も歡迎せらるゝは落葉松を第一とし赤松、杉、扁柏、栗等順次に之の次ぐの結果を呈し、又無立木地即ち將來殖林を要すへき面積は十九萬四千四百八十八町あり、將來所要の樹數は尙補植苗木を合せて五億八千九百四十九萬七千九百八十本の結果を見たり。(一月十二日長野新聞)

●北海道の林業一般

北海道は未だ拓殖の時代にあるを以て、森林原野の區

劃常に動搖し、兩者の面積を明かに知るを能はずと雖も、最近の調査によれば本道の森林は國有林四百九十五萬九千四百四十六町歩、御料林六十一萬五千町歩、公有林一萬六千五百六十一町歩、合計五百五十九萬七百七十七町歩にして、全道總面積の五割八歩六厘強を占む而して森林一町歩の平均立木材積は森林を大凡を五級に分ち、一等林の材積は千二百尺³乃至千五百尺³、二等林は八百尺³乃至千二百尺³、三等林は六百尺³乃至八百尺³、四等林は三百尺³乃至六百尺³、五等林は一百尺³乃至三百尺³とすことを得べきか、今假に全道を通じて一町歩平均の材積を三百尺³とせば全道森林の立木總材積は十六億七千七百三十一萬二千二百尺³に達し、之を百年輪伐とすも其年伐材積六百七十七萬二千二百廿一尺³を得べし、而して一尺³の價格を平均八錢とせば六百七十七萬二千二百尺³に對し一ヶ年の收入百三十四萬千七百六十九圓六十八錢に上るべし。

北海道森林の利用樹種は約五十種に上り居るが、今其主なるものを擧ぐれば針葉樹に於ては檜松、蝦夷松、赤蝦夷松等にして調葉樹に於ては山毛櫸、刺楸、樺、コ柳、白楊樹、桂黃櫸、檜、胡桃木、大槐、樺等なり、中に就

て枕木として海外に輸出せらるゝは檜、松、刺楸、蝦夷松、檜松等にて三十八年中の輸出高は五十二萬三千四百十九石其價格百十萬八千二百七十一圓、又建築材及び板材としての輸出高は三十九萬二千八百七十五石其價格五十七千七百十六圓に達せり。又松及杉は駄材として白の樹皮著提樹は構寸材として、又蝦夷松及檜松の板材として内地の各港に輸出するもの亦少からざり、是等の用材は官有林より拂下ぐるものと未開地より伐採するものと相半ばするの狀態にあり、又松材、蝦夷松は常に材用として使用せらるゝのみならず、製紙原料若くは構寸箱原料として、白楊樹は構寸軸木の原料に好適し、將來大に利用せらるべきものなるに、濫伐の結果從來渡島後志石狩膽振等に産出極めて多かりしも今や僅に北見十勝釧路の諸地方に之を見るのみにて其産額著しく減少せり。(二月十日時事新報)

職員出張

△松田校長は事務打合せの爲め、昨年四月三日出縣全九日歸校。

△全校長には昨年六月十三日林業視察の爲め、小川及び阿寺伐木所へ出張、全十八日歸校。

△校長には文部省の開催にかゝる全國實業學校長會議に出席の爲め、昨年九月三日出京全二十日歸校せられたり、此上京中に於て宮中振天府の拜觀を始めとして、横須賀造船所農科大學其他公私の實業に關係ある學校官衙製糸所等の參觀の便を得て、會議以外に益する所大なりしと云ふ。

△大島教諭には昨年八月廿九日林業視察の爲め、小川及び阿寺伐木所へ出張、全九月四日歸校せられたり

△松田校長には木材小谷狩狀視察の爲め、昨年十月十八日郡下大桑村及び駒ヶ根村へ出張全二十日歸校

△全校長には、事務打合せの爲め舊臘十二月廿二日出席全廿六日歸校。

〔會員動靜〕

○特別會員黒河内祐紀君。全君には本年四月本校教諭として赴任以來、専ら測量、數學、森林保護、等の教授を担任せられたるが、昨卅九年十二月一日一年志願兵として仙臺歩兵第廿九聯隊第七中隊へ入營せられたり。

○全上杉本謹吾君、昨年四月一日本校書記として就職以來、専ら會計事務を担任せられたるが、全十二月

一日一年志願兵として東京府下赤羽工兵第一大隊第一中隊へ入營せられたり。

○全上大島五郎君、全教諭には本年一月本校に赴任以來主として造林の教授實習を担任せられたるが、昨年十二月六日金澤市野戰砲兵第九聯隊第四中隊第二給養班へ入營せられたり。

○全上加藤純市君、第二回卒業生同君は東京赤羽工兵第一大隊第二中隊第八班に現役。

○全上遠藤治一郎君、同君は滋賀縣吏員として卒業以來來職中なりしが、今回石見國濱田歩兵第廿一隊第六中隊へ入營。

○全上杉本實君、福井利吉君、杉本君は昨年長野縣廳を辭して鹿兒島縣下に至り、其より又福井君は三重縣尾鷲町實業補習學校より今回三重縣廳第三部に轉任せられたり。

○全上松原秀吉君、は下高井郡立農林學校教員を辭して御料局木曾支廳上松出張所に勤務の事となれり。

○全上鈴岡實藏君、元本校書記たりし全君は先年臺灣總督府服務技手として赴任の處目下は全島花運港に在りて其業務に従事せられつゝあり。

○全上伊東兵太郎君、第一回卒業生全君は曩に三年現役

として北海道旭川に現役服務中なりしが、舊臘十二月歸休兵として除隊歸せられたり。

○全上征矢野助教諭、近衛騎兵特務曹長たる全教諭は過般卅七八年職役の功により勳六等青色桐葉章一時金貳百五拾圓を下附せらるゝ事となれり。

○全上西本龜千代君、元本校助教諭たりし全君は曩に山陽鐵道工事として同鐵道の建設に従事せられ居りしが今回居を但馬國生野町口銀谷三丁目山田方に移し目下上京中なるが多分播但線の工事に従事せらるゝならむ。

○全上林卓次君、西筑摩縣若園に就職せられたる全君は、昨冬山梨縣第三部に轉任。

○全上北原利雄君、一年志願兵として高崎歩兵第十五聯隊第十中隊第五班へ入營。

○全上原四郎君、は客歲十二月一年志願兵として東京歩兵第三聯隊第四中隊第一給養班に入營。

○全上武久貞一君、下關要塞砲兵として現役中なる全君は多分近々二年歸休兵として除隊の筈なり。

○全上木下清君、全君は昨年秋より伊豫國別子住友銅山山林課に勤務。

○全上輪湖正由君、東京牛込區若松町七十二番地手塚

方に止宿、早稻田大學に通學。
○全上加藤十七三君、足尾銅山より秋田大林區署に轉

○全上齊藤正雄君、兵庫縣立有馬農林學校助教たりし
全君は目下廣島大林區署に轉勤、同縣下豊田郡高坂
村三原小林區署官舎に在り。

○全上川岸滋次郎君、新潟縣立加茂農林學校助手たり
し全君は目下金澤野戰砲兵第九聯隊第四中隊に入營
一年志願兵服務中。

○全上澤柳友一郎君、福島區裁判所澤柳判事には別項
辭令欄に掲載の如く、昨年四月より本校教授囑托と
して原田君の後を受け法制の教授を担任せらるゝ事
となり。

○全上原田源一郎君、全君には法學研究の爲め長野區
裁判所書記を辭して上京、目下神田區猿樂町養真館
に止宿せられ居れり。

○全上赤浦力君、御料局木曾支廳技師赤浦林學士に
は全しく別項辭令欄に見ゆる如く、本校教授囑托と
して、三學年の利用科を担任せられつゝあり。

○全上浮田吉太郎君、元休職本校教諭たりし全君は昨
年三月滿期退職の後暫らく故山に歸休せられたるが

○全上森田長次郎君、今回杉本君の後を繼ぎて福嶋郵
便局より當校書記に轉せられたる全書記は、爾今專
ら會計事務を担当せらるゝ事となり。

○全上但馬廣造君、全君には昨冬一年志願兵として金
澤市歩兵第七聯隊第四中隊へ入營せられたり。

●新卒業生諸君の消息

本年三月當校を卒業せられし諸君には、家に在りて實
業に就くもの、進んで遊學の途に上るもの、壹年志願
兵となるもの、各地の需めに應じて遠く任地に赴くも
の等、各自大に發展せられんとす、通信に任せ左に其
消息を擧ぐ。

- 足尾銅山鑛業事務所 山下 藤一君
- 米國ワシントン木材會社 清澤巳末衛君
- 韓國陸軍木材廠惠山鎮分運所 駒殿 正雄君
- 青森大林區署 小林桂一郎君
- 修學の爲め上京 柳澤 熊治君
- 鹿兒島大林區署 山下 常記君
- 東京農科大學林學部雇 寺尾 敬二君
- 長野大林區署 千村 重喜君
- 在宅實業に従事 池井 深一君

今回新に本縣更級郡農事巡回教師に任命せられたり
○全上遠藤宗作君、一年志願兵として現役服務中なる
同君は過般少尉候補生の試験に合格せられたり。

○全上三澤義治君、長野大林區上田小林區署森林主事
たりし全君は、過般森林技手に任せられ上田小林區
署勤務を命せられたり。

○全上岡戸廣治君、山梨縣林業手たりし全君は、昨冬
一年志願兵として東京竹橋近衛歩兵第一聯隊第十一
中隊へ入營せられたり。

○全上近藤昌平君、全縣林業手たりし全君は、昨春同
縣下南都留郡林業巡回教師に榮轉。

○全上乙谷耕吉君、一年志願兵として金澤市歩兵第七
聯隊第七中隊に入營中の全君は、昨年四月廿五日上
野原の演習に於て提防飛躍の際不幸に左足關節を捻
挫せられ、百有餘日の長き金澤病院に呻吟せられし
と云ふ。

○全上手塚先生、在北嶺甲山郡惠山鎮用木材廠第一作
業班長たる全先生は、嚴寒の候にもかゝらず無事
にて日々公務に就せられつゝあり、尙近々同事業が
民間の經營に移るにつき種々調査の爲め多忙を極め
居らるゝ由なり。

- 一年志願合格 但馬 廣造君
- 御料局札幌支廳 宮崎清太郎君
- 御料局木曾支廳上松出張所 松原 秀吉君
- 秋田大林區署鑛業所 加藤十七藏君
- 東京府林業事務所 下畑 徳十君
- 一年志願合格 北原 利雄君
- 在宅 代田善次郎君
- 全上 戸田 續君
- 足尾銅山 古畑 金藏君
- 韓國木材廠惠山鎮分運所 杉本 純平君
- 御料局木曾支廳見習生 前野 實一君
- 全上 宮田 實君
- 未定 寺嶋 正次君
- 青森大林區署 小藤作四郎君
- 修學の爲め上京 宮下 信一君
- 新潟縣東蒲原郡津川小林區署 野尻 慶助君
- 名古屋支廳 河島 正巳君
- 御料局木曾支廳阿寺伐木所 岡田彌兵衛君
- 未定 三宅 周吉君
- 青森大林區署 木下安太郎君

●會員の遠逝

○會員有賀昇君、客月三月二十日二學年を修業し歸省中病死せし趣を、全君の嚴君より報せられたれば、三學年一同より帛詞を贈りたり。

○會員志津辨次郎君、日露戰役に出征中名譽の戦死を遂げたる確報ありて、昨年四月十五日郷里なる岐阜縣姪子村に於て葬儀を營むべき報道ありければ、會長代理として全縣人なる三學年生廣瀬靜之進君を會葬せしむ。

○會員越谷光香君、森岡高等農林學校入學志願志望を以て東京遊學中不幸にして病魔の襲ふ所となり、昨年八月歸省父母兄弟の温なる介抱の下に永眠せらるる會員櫻井銀次郎君、心臟病の爲めに昨春以來名古屋市某病院に入院治療中なりし同君は、藥石効なく、遂に昨初夏白玉樓中の客となり、哀悼の情轉々禁する能はず。

○特別會員下條順作君、同君には永らく本會擊劍部教授の任に當られ懇切に指導せられたるに、惜しい哉昨卅九年十月十八日俄然腦充血の爲めに遂に他界の人となられたり。

●明治卅九年年度演習林及苗圃概況

本校に於ける、明治三十九年度演習林新植面積及び苗木數、苗圃播種面積及種量は左の如し。

(甲)演習林(字裏山)新植總面積三町七反五畝二步五合

内譯

- (一)、一町貳反三畝八步五合(畝地) 扁柏、花柏。
- (二)、一町八畝貳拾四步 (全上) 杉。
- (三)、一町四反三畝 (全上) 落葉松。

苗木數

- (一)、扁柏 一千五百二十五本
- (二)、花柏 一千三百九十三本
- (三)、杉 三千八百本
- (四)、落葉松 七千三十八本

以上の内、野火の爲め落葉松新植地面積約五畝步(苗木數約貳百五拾本)損傷せり。

(乙)苗圃播種及種量面積合計貳拾八坪

内譯

- 杉種子 拾坪(坪二合) 貳升
- 扁柏 拾坪(全上) 貳升

落葉松 八坪(坪二合五勺) 貳升

春季定期演習は四月七日に始まり五月五日に終れり因に云ふ、一昨年度播種の杉種子は在來の經驗により寒氣の爲め其嫩苗非常に損傷を免れざるの恐ありしを以て、十分排水霜除け等の手當を施したるに、其結果頗る良好にして、當地方の如き寒地に在りても尙ほ杉苗の成育移植の全く絶望に非らざるを示せり

●秋季運動會

明治三十九年十月廿一日秋季運動會を本校運動場に開けり、此の日朝來の雨降りしきりしも、折角準備の整ひつることなれば何の猶豫もなく、午前九時の號砲を合圖に先づ三學年の發火演習より始めぬ、仇なる降雨はなかなか止むべくもあらざれども、愛ねて招待せる所の賓客はいち早くも來られ、又參觀の男女も夥しく詰めかけ非常なる賑ひをなせり、競技は豫定の通り順次行はれて徒歩八百メートルを以て全く終はる、時正に四時三十分、雨尙止まず、校庭泥濘甚しく競技者の困難言はん方なかりし、さて本年は東京時事新報社より金牌大阪毎日新聞社より銀牌の寄贈あり、又町内の有志者より優勝旗を贈らるゝありて各級選手競争を

- 行ひしに、優勝旗は三學年生永田精一郎君の手に落ち八百メートル競争に於て三學年生中島利君金牌を得たり、尙當日餘興として劍舞柔道東西古今の行列等あり、喜劇は少しく事情ありて見合はず、又開會中に矢鱈減報を配布し運動場裡の時事を報道し、又売店ありて競技者及び參觀人の便利を圖れり。
- 一、徒歩二百メートル競争
 - 一等 和田宗吉 二等 川崎本雄 三等 岡戸郁二
 - 二、韓信股滑
 - 一等 原田英二 二等 霜田時三郎 三等 中島要人
 - 加藤精一 小林 彪
 - 三、三人三脚
 - 一等 大島角造 二等 瀬在 實
 - 木下敏臣 霜田時三郎
 - 四、盲人旗拾
 - 竹内房太郎 仲俣伍市
 - 五、巾飛競争
 - 一等 樋口 勇 二等 小松六三郎 三等 上田銘二
 - 六、徒歩四百メートル競争
 - 一等 川寄本雄 二等 宮川永三 三等 木下敏臣
 - 二等 百瀬本義 二等 木下敏臣 三等 三宅 功

七、觀音競争

一等 藤原政一 二等竹内房太郎 三等奥原喜左衛門
高橋金作 松尾忠恕 田中吟重

八、武裝競争

一等 小林 彪 二等 竹内 茂 三等 仲田惠令

九、數學競争

一等 西野人徳 二等松澤莊太郎

拾、誦讀競争

一等 平野浦治 二等 寺島俊一 三等 中島要人

拾一、戴囊競争

一等 小林 彪 二等洞山鹿之助

拾二、擔荷競争

一等 松澤萬吉 二等 竹内 茂 三等霜田時三郎

拾三、薪拾競争

宮寄惠喜太 一瀬袈裟齋 小山田喜十郎

拾四、背面負球競争

一等 小池新吾 二等 田中吟重 三等 竹内 茂

拾五、障害物競争

一等 本多清右衛門 二等 土屋浩三 三等 矢崎辰雄

拾七、初陣

一等 水野忠一 二等 川崎本雄 三等 三宅 功

一等霜田時三郎 二等 藤原政一 三等 一木虎雄
小山田喜重郎 中嶋昌利 嶋田雄太郎
北川信美 上條嘉一郎 原田英二

拾八、關取競争

一等 宮川永三 二等 上田銘二 三等奥原吉左衛門

拾九、樽廻競争

一等 小山田喜重郎 二等竹内房太郎 三等 小池新吾

二十、徒歩五百メートル競争

一等 中嶋昌利 二等 和田宗吉 三等 松嶋九平

二十一、食パン競争

一等奥原吉左衛門 二等 松島九平 三等新田忠次郎

二十二、匍匐競争

一等宮崎惠喜太 二等本多清右衛門 三等 原喜四三

二十三、桶拾競争

一等 矢崎辰雄 二等 山下廣治 三等 田中吟重

廿四、蛙飛競争

一等 木下敏臣 二等島田雄太郎 三等 野村光智

廿五、竹馬競争

一等 上田銘二 二等 芦澤庸三 三等 林 省三

廿六、徒歩二百メートル競争(福島小學校尋男)

一等 水野寛一 二等井口錠太郎 三等 宮田彌助
廿七、實習服裝競争
一等 樋口 勇 二等 松島九平 三等 仲俣伍市

ラグレース

一等 松尾忠恕 二等 百瀬本義 三等 水野忠一
木下敏臣

廿九、徒歩六百メートル競争

一等 大嶋角造 二等竹内房太郎 三等宮崎惠喜太

三十、四百メートル徒歩競争

一等 松嶋九平 二等 田中吟重 三等 小池新吾

卅一、旅裝點燈

一等 松尾忠恕 二等 加藤清一 三等 塩澤英一

卅二、籤引競争

一等 山下廣治 二等新井喜多雄 三等 高橋金作

卅三、盤根錯節

一等 仲田惠令 二等 上田銘二 三等 仲俣伍市

卅四、蠟燭クランプ

一等新田忠次郎 二等 原喜四三 三等本多清右衛門

卅五、各級撰手六百メートル徒歩競争

永田精一郎

卅六、八百メートル徒歩競争

一等 中島昌利 二等竹内房太郎 二等 和田宗吉
雨天の爲め各小學校其他多くの飛入なく又省略あり。

職員辞令

依職木曾山林學校助教諭兼書記 征矢野茂樹
復職ヲ命シ兼職ヲ免ス

任長野縣立甲種木曾山林學校書記 杉本 謹吾
(以上明治三十九年四月一日)

福島區裁判所判事 澤柳友一郎
木曾山林學校教授ヲ囑托ス
(明治三十九年四月廿六日)

任長野縣立甲種木曾山林學校教諭 黒河内祐紀
(明治三十九年四月廿五日)

御料局木曾支廳技師 赤浦 力次
木曾山林學校教授ヲ囑托ス
(明治三十九年七月)

木曾山林學校教諭 黒河内祐紀
依願免本職

木曾山林學校書記 杉本 謹吾
依願免本職

依願免本職

依願免本職

依願免本職

依願免本職

依願免本職

依願免本職

本會山林學校教諭

大嶋 五郎

依願免本職 (明治三十九年十一月廿一日)

任長野縣立甲種本會山林學校書記

森田長次郎

(明治三十九年十二月十六日)

休職本會山林學校教諭

浮田吉太郎

退職ヲ命ズ (明治三十九年三月三十一日)

休職本會山林學校教諭

手塚 長十

退職ヲ命ズ (明治三十九年十月三十一日)

校友會例會及臨時會記事

○臨時會、明治卅九年二月廿七日 月曜日

松田會長開會の辭を述べて曰く、今回今井先生(元校醫)

征矢野先生(休職助教)凱旋せられたるに付、懇々茶話會を開き慰勞の意を表せんとすと、今井先生起ちて挨拶を述べ、次の談話をなせり。

一、赤十字の世界に於ける成立の起原、日本赤十字社の起原及現在の狀況(平時と戦時との別)、今回先生の赤十字社に於ける服務の狀況、負傷兵取扱ひ方(エツキス)光線の説明、韓國の風俗。
征矢野先生挨拶を述べ、次に左の談話をなされたり。

一、東京より樺太に至る航海中の有様、及び樺太の戰況、及び全地の人情風俗。

○臨時會、明治卅九年四月廿三日 日曜日

松田會長山村少佐を紹介して曰く、少佐には日露戰役に出征の所被擧の勳功を立てられ、今回凱旋慕參の爲め歸郷せられたるを幸とし、非常に御多忙の中を顧みず一席の實談を請ひしに、御承諾を得て此より少佐の御話あるべき旨を述べて壇を下れり。少佐には年齢未だ四十に充たず、實に好箇の武將なり、威ありて猛けからざる温容もて、徐に戰圖を画きつゝ左の演題に就きて述せしが、趣味津々たるものありき。

一、少佐の普蘭店占領に於ける實話。

○第廿八回通常例會、明治三十九年五月十三日日曜日

午前九時開會松田開會の辭を述べ、

一、役員撰舉

撰舉の結果は雜報欄に掲げ置けり。

正午閉會解散せり。

○第廿九回通常例會、明治三十九年七月八日 日曜日

午前八時開會、太田研究部副部長開會の辭を述べ、

一、所感に就き

一、岳北乙種農學校の狀況

卒業生加藤十七三君

全 松原 秀吉君

一、野尻湖 會員 中島 昌利君

一、滿洲へ造林樹種 全 竹内房太郎君

一、雜感 全 竹内 茂君

一、演説の態度に就き 特別會員 百瀬 教諭

一、會計報告 會員 永田精一郎君

此れにて茶話會に入り、席上百瀬教諭自己修養談ありて正午閉會せり。

○臨時會、明治三十九年七月五日午前九時開會の辭に

次ぎて農科大學林學部學生修學旅行として當地に來れる農科大學教授三村先生に一席の講話を請ふこととせりと述べ、先生起ちて左の講話をなせり。

一、林學を研究する者の心得

右講話約壹時間にして終はり直ちに閉會せり。

○秋季運動會、明治卅九年九月廿一日

午前九時開會、午后四時閉會、當日の狀況は雜報欄に掲ぐ。

○臨時會、明治卅九年十一月二日

午前十時開會松田會長渡邊御料局長の來郡を幸とし一場の講話を懇請したりと述べ、渡邊御料局長には本會報の學術欄に掲げたる演説をなす約三十分、直ちに閉會散會せり。

本年四月役員撰舉を行ふ其結果左の如し

理事 西野入 徳 宮崎 二郎 永田精一郎

役員改選

○第卅十回通常例會、明治卅九年十一月廿二日

午前七時開會西野入研究部部長開會を告ぐ。

一、山梨縣の林業 卒業生 岡戸 廣治君

一、煩悶の解決法 特別會員 大嶋 教諭

一、滿洲の風俗 全 林 教諭

一、自重せよ 全 百瀬 教諭

一、社會と個人 特別會員 霜田時三郎君

一、軍隊に關する話 卒業生 伊東 兵太君

一、人生は如何にして送るべきか 會員霜田時三郎君

一、神津牧場の視察談 全 藤原政 一君

一、研究地として北安曇郡 會員 太田喜代松君

一、理性と感情 全 西野入 徳君

一、校風論 特別會員 百瀬 教諭

太田喜代松 大島 角造 廣瀬静之進
 研究部長 西野入徳 全副部長 太田喜代松
 雜誌部長 宮崎 二郎 全 宮城 忠藏
 聲劍部長 中島 昌利 全 赤岩藤太郎
 柔道部長 霜田時三郎 全 新田忠次郎
 庭球部長 和田 宗吉 全 川崎 本雄
 弓術部長 平田 稻男 全 大島 角造
 遠足部長 竹内房太郎 全 唐澤 勇策
 會計部長 永田精一郎 全 肥后金四郎
 庶務部長 廣瀬静之進 全 藤原 政一
 尙各部へは其々先生方に請ふて顧問の任に當らる事の快諾を得たり。

●新入會者

本會を員として客年四月より新に入會せられし諸君は左の如し。
 長野縣 松澤莊太郎君 全 木下敏 臣君
 小澤 重一君 全 松尾 忠怒君
 百瀬 本義君 全 橋都 伍郎君
 宮入 汎省君 全 一之瀬製薬壽君
 原 喜四三君 全 塚本 英一君

栗野原治平君 全 蜂須賀宮次郎君
 宮川 永三君 全 三宅 功君
 島田祐太郎君 全 川中 勝助君
 中島 要人君 全 田中 吟重君
 日野 雅亮君 全 山田五六男磨君
 丸山 廣見君 全 橋本 新吉君
 加藤 清一君 全 土屋 浩三君
 矢崎 辰雄君 全 向井辰二郎君
 中田 辰雄君 全 山本安太郎君
 原 七郎君 全 野村 光智君
 木戸 定治君 全 宮澤 清輔君
 山口 賢治君 全 若林遊龜尾君
 洞山鹿之助君 全 若澤 庸三君
 征矢野和夫君 全 小松六三郎君
 中村 要君 全 茨城縣本多清右衛門君
 和歌山縣南勝右衛門君 全 山梨縣 仲田 惠令君
 山梨縣 一木 寅雄君 全 山梨縣 磯村 益雄君
 岐阜縣 新田忠次郎君 全 岐阜縣 森 巖君
 原 健助君 全 靜岡縣 平野 浦治君

●第貳學年級會記事

△昨年九月十五日滿韓旅行より無事歸ありし霜田竹内二君の慰勞會を兼ねて級會を長福寺に催す、會するもの三十餘名、級會當番の開會の辞、霜田竹内兩君の旅行談及大嶋福澤兩主任先生の講話あり、亞ぎて茶菓の饗應をなし會員互に十二分の歌を盡して午後五時散會す、當日講話者の題目左の如し。
 林業官としての日々
 大島先生
 福澤先生
 霜田君
 竹内君

次て晝餐を喫し其より級會を開き、瀨在霜田二君の談話ありて閉會、夕刻歸校の途に就く。
 ●生徒心得細則
 第一章 綱 領
 一、教育に關する勸諭の聖旨を奉讀し常に實踐躬行を勵む可し
 一、校規を遵守し師長を尊敬し其教誨訓諭に服従す可し
 一、學業に精勵し勞働を厭はず常に實業を旨とし操業に注意す可し
 一、信譽を守り廉潔を重んじ禮節を慎み誠實を旨とし過良の徳を養はん事を務む可し
 第二章 細 則
 第一條 敬 禮
 一、敬禮は上下の分を明にし其秩序を正し中心より恭敬の實を表するを要す
 一、敬禮は直立不動の姿勢を取り目を禮すべき人に注ぎ最敬禮にありては体の上部を前方に傾け兩手を膝に至らしめ通常敬禮にありては体の上部を少しく前方に傾くるものとす
 一、靴を脱ぎし時は右手を以て其前趾を揃ひ之を樂直に掲げ其内部を右股に對せしむ可し
 一、後れて教室に入る時は教師に對して敬禮を爲し直立して指差を待つべし
 一、論中に於て尊長の來るを認めば大凡其人の六歩前に歩を止め禮を脱して式の如く敬禮し其答禮を俟て前退すべし
 一、尊長の室に入らんとする時は先脱帽して入室し上位にある人に對

△全年十月十三日造林上の視察として午前八時校庭に集り、大島先生引卒の下に上松方面に出發す、其目的とする所は全地蜂須賀氏所有の苗圃並に氏が多年經驗せる種子採集其他の實況を聞かんとするに在りしが、折節不在ありしため臨川寺に至り廣葉杉を見其樹下に於て紀念の撮影をなし其幼樹一本を我校見本園に貰ひ受くるの約をなし、越後屋に於て一同休憩す、時に大嶋先生より木曾川沿岸に於ける竹林並に河川運材としての木曾川等につきて講話あり

- 一、 敬禮をなした次に在室のものに敬意を表すへし
- 一、 尊長の前に出づる時は大凡其人の六歩前に於て敬禮を行ひたる后 仰立、位置に前進し事務らば退きて直前に復し更に敬禮したる后 右に轉進して静かに退出すへし
- 一、 廊下或は運動場にて尊長に出逢ふときは右方を譲り敬意を表すへし
- 一、 生徒相逢ふ時は互に禮を施すへし

第貳條

教室

- 一、 始業の鐘報あれば直に教室に入り自席に着席すへし
- 一、 終業の時には教師の退出後にあらざれば席を離る可からず
- 一、 課業時間の外勝手に教室に入るべからず
- 一、 課業時間中教師の許可を得ずして教室に出入すべからず
- 一、 課業の終始には校長の合圖により教師に敬禮を行ふべし
- 一、 課業中來賓の臨むときは教師の指揮によりて敬禮を行ふべし
- 一、 教室に於ては教師の對する質問應答の外講話を禁ずべからず
- 一、 教室に於ては主任教師の許可を得ずして雜物を用ふ可からず
- 一、 教室には課業に必要な書籍文具の外の物品を携帯す可からず且 必要な文具書籍は貸借を禁ず
- 一、 教室に備付の黒板圖書器械標本藥品等は教師の許可なくして使用す可からず
- 一、 課業中病氣其他止むを得ざる事故の爲め藥を受け難き時は教師の 指導を乞ふべし
- 一、 教室に主任の指揮によりて之を整理し且つ交番掃除の任に當り清潔を保つ可し

第參條

控所

- 一、 間断其事由及び日数を記載し寄宿生は舍監の認印を受け過學生は 父兄若しくは保證人連署を以て速かに校長宛の届書を學校主任に 差出す可し
- 一、 但當日届書を差出す能はざる時は當日より三日以内に必ず届出つ べし
- 一、 欠席届出日限内に出席せざる時は其旨學校主任に申告すへし
- 一、 病氣欠席一週間以上に達する時は醫師の診断書を添付すへし
- 一、 病氣又は事故の爲め遅刻又は早歸したる時は其旨學校主任に届出 づべし
- 一、 届出の手續を履行せずして欠席遅刻數度に及ぶ時は相當の處分を 受すべし

第六條

雜則

- 一、 時々訓令告示は掲示場に掲げたる時より一般に知了したるものと 認むるを以て常に能く之に注意すへし
- 一、 掲示を破毀塗抹又は汚損する者は相當の處分を爲す
- 一、 生徒は校の内外を問はず喫煙をなし及び喫煙の用具を携帯す可ら ず
- 一、 貴重物件の外飲食店劇場等に寄附可からず
- 一、 生徒は校の内外を問はず飲酒を禁ず
- 一、 金銀を募集す可からず
- 一、 許可なくして諸種の集會を催ふし又は金銀を募集す可からず
- 一、 校内の建物其他物品を汚損破毀し又は作物の建物に損害したる時 には相當の賠償を爲さしむ其故意に出でたる者と認むる時は前條罰 金を加ふ
- 一、 車野頭劣なる言を爲すべからず
- 一、 風教に害する書籍新聞雜誌等之を閲覧す可からず

- 一、 帽子外套其他見での携帯品は指定の場所に整理し決して亂雑なら じ可からず
- 一、 紙屑及古其他不用品は振りに放棄す可からず
- 一、 生徒控所において定時の外決して食事なす可からず
- 一、 振りに小便室に立入る可からず

第四條

制服

- 一、 生徒學校の際に制服正朝を着用すべし 但止むを得ざる時は主任の許可を得て簡雅袴を以て代用する事な 得
- 一、 正朝は海軍形にして地質は黒色羅紗とし制定の徽章を附するもの ぞす
- 一、 自六月一日 白木綿の日服をなす可し 但夏季 至九月卅日迄は夏服を着し其他は冬服を着用すべし
- 一、 夏朝を用ふる場合は次の如し
- 一、 夏朝用品質紗襪編み方形普通形師の襪三寸以内鉄巻黒色襪 結び所定の襟章を前部に附す
- 一、 上衣ジャケット形前角の鈕止にして地質冬服は紺色のヘル地とし 夏服は紺陣小會とし凡て所定の鈕を用ふ
- 一、 袴は普通ジーンズとし地質上衣に同じ
- 一、 外套は士官形外套にして地質は紺羅紗とし鈕は本校所定のものぞ すとす
- 一、 脚絆は茶色麻製のものぞす
- 一、 六月一日より九月三十日迄は夏服を着し其他は冬服を着用すべし
- 一、 帽子及服製の形狀次の如し(圖は略す)
- 一、 欠席及遲刻
- 一、 病氣其他止むを得ざる事故により欠席せんとする時は當日始業時

寄宿舎細則

第一章 總則

- 一、 生徒相互に金銀物品を貸與す可からず
- 一、 校用品及び食料の物品書籍等は丁寧に取扱ふべし
- 一、 寄宿舎は生徒の品性を陶冶し學生の水分を盡さしむるを以て目 的とす
- 一、 寄宿舎生は本校諸規則を遵守するは勿論能く舍生心得を履着し 舍監の指揮に服従す可し
- 一、 寄宿舎に於ける各役員は常に共同して生徒心得の實行を奨励し 舍風の振奮を期す可し
- 一、 寄宿舎生にして退會を命ぜられたる時は直に退會す可し
- 一、 寄宿舎は毎年夏期休業冬期休業學年末休業中は之を閉つるもの ぞす
- 一、 但休業中も雖も閉鎖せざる可し
- 一、 寄宿舎を分ちて組長一名副組長一名各室に室長一名 學友若干名を置く
- 一、 徒の舍室は舍監之を定む
- 一、 第八條、寄宿舎には當直を當 組長副組長をして輪番之に當らしむ
- 一、 第九條、寄宿舎には事務員並に炊事勤勞者若干名を置く
- 一、 事務員 役並其任期
- 一、 第十條、正副組長及室長事務員於勤務間を役員と稱す 拾遺 役員は互に互に互に 舍監之を命ず

第拾貳條、各委員の任期は左の如し

- 一、正副議長 二ヶ月
- 一、室長 一ヶ月
- 一、炊事顧問 二ヶ月
- 一、炊事委員 一ヶ月

第四章 役員勤務

第拾參條、正副議長は會室の指揮を受けて組内の生徒を導き左の事項を司る可し

- 一、會室の命令指示の傳達及其實行の監督
- 一、組内の清潔監視及衛生等の監督
- 一、火之元戸締の注意

一、組内生徒より差出したる願書等の取扱ひ

一、其餘組内に於ける臨時諸件に關する取扱ひ

第拾肆條、室長は會室及正副議長監督の下に左の事項を司る可し

一、會室不在の時口某室の上級生徒が代理たる可し

一、室内の整理資與品の保管學友の監督命令の傳達學友の願書等の傳達

一、人員検査及其他検査の際に部下の學友を指定の場所に整列せしむ可し

第拾伍條、當直の組長若しくは副組長は毎日起床時間に於て交替す可し

第拾陸條、當直組長は會室監督の下に左の事項を司るべし

- 一、寄宿舎日誌の記載
- 一、人員検査等の調製
- 一、物品請求書の整理並に現品の受渡
- 一、願書、受附書の保管

一、郵便物受渡物の整理及び郵便物の受渡

一、命令の傳達

一、寄宿舎全般に關する掃除の監督

一、寄宿舎備付品の保管

一、火之元戸締の監督

一、其他全般の風紀に關する注意

第拾七條、炊事委員は會室監督の下に左の事項を司るべし

一、食堂炊事場炊事用具浴室の清潔監視を保つ事

一、炊事場の監督食品の献立を爲す事

一、食品の献立は毎一週面分宛每週土曜日に之を調製して會室の閣議を以て可し

第五章 日課起床飲食入浴

第拾八條、日課起床飲食入浴等は毎朝規定の時間を遵守すべし

第拾九條、自修時間中は所定の座席に在りて黙讀すべし

故なく他室に往來し若しくは放歌高聲をなす事を禁ず

第廿一條、就寝後は談笑を禁ず

第廿二條、常に燭火燈火の取扱を厳しし決して危険の虞あらしむべからず

第廿三條、所定の場所以外に飲食すべからず

第廿四條、生徒の勝讀せる圖書類にして無用有害と認むる時は之を没収することあるべし

第廿五條、寄宿舎所定の日課起臥人員検査等の體音は操鈴を以てす

第廿六條、大祭日曜日及毎日就寝後に於て之を許す

但門限は時々之を定めて掲示す

第六章 外出

第廿七條、普通掃除は毎朝人員検査後及就寝時間前に於て之を行ふものとす

第廿八條、大掃除は毎土曜日後就寝後に於て之を行ひ普通掃除より一層周

密に之を爲すものとす

第廿九條、臨時掃除は臨、必要に應じて寄宿舎の全部若しくは一部につき之を行ふものとす

第卅一條、廊下階段等の掃除は各室交替に之を行ふべし

第卅二條、掃除終了時は會室の檢閲を乞ふ可し

第卅三條、検査を別つて左の三種とす

一、人員検査

二、清潔検査

三、物品検査

第卅四條、人員検査は毎朝起床後及歸舎時限に之を行ふ

但所定時間以外に臨時之を行ふ事あるべし

第卅五條、清潔検査は寄宿舎の内外の清潔監視及被服等につきて之を行ふ

第卅六條、物品検査は生徒の所有品及資與品につき品類員數並に損否につきて之を行ふ

第卅七條、物品検査に於て生徒所持品中不適當と認むるものある時は之を没収する事あるべし

第卅八條、非常避難練習の爲め不時召集を爲す事あるべし

第卅九條、學費金の保管出納

第四十條、寄宿生徒の學費金は左の方法により之を保管す

第五十條、學費金の保管及出納は校長之を監督し各學級主任之に當る

第八章 撤除及敷戻

第卅一條、病氣等の爲め規定の時間外に就寝せんとする者は會室の許可を受くべし

第卅二條、病氣其他不得止事故の爲め歸省せんとする者は願書の許可を受くべし

第卅三條、父母の病氣其他不得止事故の爲め歸省せんとする者は願書の許可を受くべし

第卅四條、外山若しくは歸省中病氣其他の故障の爲め規定時間に歸舎し能はざる時は診断書又は事由を證明したる書面を添へ會室を経由して學校長に届出づべし

第卅五條、病氣其他の事故にて欠課したる者は其日の外出を許さず

但特に會室の許可を得たる者は此限にあり

第卅六條、病氣に罹りたる者は會室に届出で診断を受けたる者は要治療に投醫の必要を乞ひ之を會室に届出づべし

第卅七條、會室に病氣の種類に依りては投醫の意見を以て歸宅又は外泊治療を乞ひ若しくは病室に就かしらる事あるべし

第卅八條、會室に生徒甲に病氣ありと認むる時は投醫の診断を受けしむる事あるべし

第卅九條、病氣等の爲め規定の時間外に就寝せんとする者は會室の許可を受くべし

第五十一條 保管金は必ず金簿に保管金通帳に依り之を整理す

第拾壹章 食費徴収

第五十二條 食費の徴収は前月末日に於て之を徴集す

但来日休明に當る時は繰上げとす

第五十三條 食費徴集は食費之を取扱ふ

第五十四條 食費は毎月其翌月の定額を示して之を徴集し過剩金は繰算

後に於て拂戻すものとす

第五十五條 食費を滞納するものは退會を命じ且つ登校を差止むるものとす

但食費滞納の許可を得たるものは此限りにあらず

第拾貳章 炊 事

第五十六條 炊事は生徒の自炊とす

第五十七條 炊事は炊火を雇ひて之に當らしむ

第五十八條 炊事全般に關する事は當該の監督を受くるものとす

第五十九條 炊事顧問及委員は炊事全般の監督に任ず

第拾參章 雜 款

第六十條 金銭衣服等貸借を禁ず

第六十一條 荷物を含外に持ち出さんとする時は當直組長を経て金監に

申出で許可を受くべし

第六十二條 金内にて集會をなさんとする時は當直組長を経て金監に

申出で許可を受くべし

● 舍 生 心 得

一、智徳体を養ふは學問の基礎なり三つの者並び進ま

ん事を期す可し

一、自重自任品性を高尚になす可し

一、禮義を尚び廉耻を重んず可し

一、氣象は剛毅沈着快調なる可し

一、体成を共にし患難相助可し

一、誠心誠意以て業務に従事す可し

一、質素を旨とし勤儉を守る可し

● 通學生取締規則

第一條 通學生は本校寄宿舎規則の趣旨を遵守す可し

第二條 通學生諸願届は各自の學級主任を経て學校長

に提出す可し

第三條 通學生は住所の門前に左記鐘形の票札を掛け

置く可し

長野縣立甲種木曾山林學校
生徒 何 某

第四條 通學生にして自宅外に宿泊するものは父兄若

くは後見人及び保證人家主運署を以て校長へ願出

で許可を受く可し

第五條 外出する時は制服正帽若しくは筒袖袴を着用す

可し

第六條 學友間は勿論其他にても金銭物品の貸借を行

ふ可からず

第七條 通學生にして其宿所を轉せんとする時は第四

條の手續を爲し豫め學級主任を経て學校長の許可

を受く可し

● 會費領收報告(卒業生諸君の分) 第一回

- 一金五拾錢 岡田 彌兵衛君
- 一金五拾錢 鶴 殿 正雄君
- 一金五拾錢 寺 尼 敬二君
- 一金五拾錢 正 又 實次郎君
- 一金五拾錢 高 樋 博君
- 一金五拾錢 戸 田 續君
- 一金五拾錢 遠藤治一郎君
- 一金五拾錢 松原 秀吉君
- 一金五拾錢 九 山 春君
- 一金五拾錢 森 正 次君
- 一金五拾錢 武久 貞一君
- 一金五拾錢 平澤 政吉君
- 一金五拾錢 南村 末吉君
- 一金五拾錢 小林 桂一郎君
- 一金五拾錢 千村 重喜君
- 一金五拾錢 中嶋源一郎君

- 一金壹圓五拾錢 三澤 義治君
- 一金五拾錢 與 牧 金次郎君
- 一金五拾錢 平 野 正平君
- 一金七拾五錢 小 松 精内君
- 一金七拾五錢 鶴 飼 政義君
- 一金七拾五錢 川 岸 滋次郎君
- 一金七拾五錢 温 井 誠一君
- 一金七拾五錢 青 戸 爲九郎君
- 一金七拾五錢 坪 倉 藤三郎君
- 一金七拾五錢 山 下 藤一君
- 在 來 清 澤 巳未衛君
- 野 知 里 慶助君
- 計金拾九圓五拾八錢也

(以上明治廿九年十二月末日迄領收之分)

● 特別寄附金報告

左の諸君より本會を費の内へ特別の寄附をせられたるを謝す。

- 原田 源一郎君
- 正 又 實次郎君
- 計金七拾錢也

●運動會特別寄附報告

一金壹圓	福島町	小嶋 清助君	一繪はがき 六拾枚	全	佐藤 正太郎
一金貳圓	全	原 豊七君	一銀牌 一個	全	時事新報社殿
一金貳圓	全	川合 兼吉君	一麥酒 貳本	大坂	毎日新聞社殿
一金七圓五拾錢	全	神村 律君	一金參拾錢	福島町	角間覺兵衛君
一カビキ寫真原版三枚	全	岡本寫真店殿	一金壹圓	全	加藤紋次郎君
一金四圓	全	吉村 勇七君	一金壹圓	全	井口幸右衛門君
一金參圓	全	杉本 源助君	一壹圓	全	十四銀行支店殿
一金貳圓五拾錢	全	住茂商應殿	一金五拾錢	全	木曾 銀行殿
一金壹圓	全	住屋茂三郎君	一金貳拾錢	全	大村 太藏君
一金四圓	全	征矢野半兵衛君	一金參拾錢	全	松嶋 正徳君
一金壹圓五拾錢	全	和合 久助君	一金參拾錢	全	百瀬伊兵衛君
一金貳圓	全	小野 久助君	一金參拾錢	全	新開村 上田小學校殿
一金四圓	全	鈴木洋服店殿	一金參拾錢	全	福嶋町 岡戸喜太郎君
一金參圓	全	藤森 書店殿	一金參拾錢	全	長 福 寺殿
一金五圓	全	西筑摩郡衙各位	一金貳拾五錢	全	興 禪 寺殿
一金壹圓	全	本校職員各位	一金貳拾五錢	全	木村 米吉君
一金壹圓	全	福島小學校各位	一金貳拾錢	全	千村 桂六君
一優勝旗 一旗	全	福島町 松岡 英一君	一金參拾錢	全	沼田 久君
				全	林 喜 七君
				全	山田 藤吉君

- 一名刺印藏書印 各壹個
- 一料紙 壹束
- 一金參拾錢
- 一料紙 壹束
- 一金五拾錢
- 一金五拾錢

●木曾山林學校校友會費

第四回會計報告第三回會計報告より
明治三十九年三月廿日迄

- 一金六拾壹圓六拾錢
- 一金拾圓六拾貳錢五厘
- 一金八拾四圓〇七錢五厘
- 計金百五拾六圓參拾錢
- 支出
- 一金九圓六拾八錢
- 一金五拾參圓
- 一金參圓九拾五錢
- 一金參拾五錢

- 會費收入
- 雜收入
- 前回より繰越金
- 例會費
- 第五號會報印刷費
- 通信運搬費
- 器具器械費

●會報編輯雜感

(靜軒生)

△本會報も次第に其年齢を重ね來つて遂に第八號に達した、隨て其編輯上に就ては頗る經驗を積んで漸く其体裁を改め面目を一新し來るべき筈であるが、實の處は全く之と反對である、如何となれば會報は年々其年齢を重ね行くに反して編輯の幹部たる役員は年々新陳代謝し去るからである、僅か一年に二回か一回の發行で經驗も熟練も重ねぬ内に早く已に編輯の幹部は交代するのである、加之此編輯事業は學業の餘暇を以て從事する所の餘業である。

いか程簡單なものでも苟も一の雑誌を編輯するには其れ相應の才幹を要する、材料の撰採取捨、其の分類、其の排列から、人稱敬語の統一等の微に至るま

新聞雜誌購入費
雜費

會計部長 岡田彌兵衛

で、明○断○な○る○論○別○統○格○の○才○、編○審○徹○透○せ○る○注○意○の○力○を○要○す○、又○文○才○を○要○し○書○才○を○要○し○敏○活○を○要○す○、加○之○、一○ど○通○り○印○刷○上○の○智○識○に○通○じ○て○居○ら○ね○ば○誌○面○の○整○理○が○出○来○ぬ○、此○等○の○才○幹○と○材○料○の○精○良○と○相○俟○つ○て○始○め○て○會○報○が○會○報○ら○しく○な○る○。

處で、かゝる才幹の完備を前述の事情の下に於ける編輯幹部に望むのは少しく難きを人に責むるの嫌ひがありはせぬか、随てかくて生れ出づる會報が十分はさて措て五分の滿をも諸君に與ふる事能はざるは偏に會員諸君の諒察を乞ふ次第である。

△本誌の印刷に關して、印刷人署名者たる信青年社の丸山尙君が非常に注意盡瘁せらるゝによりて、誌面の体裁の整ふに至りたる点は偏に同君に謝する次第である。

△本誌に始めて口繪を試みに挿入する事となつた、幸に諸君の賛成を博する事を得ば尙は引き添て挿入する

積りである、實は試みに口繪を挿入する事になつたが、猶如何なる種類を採擇すべきかにつきては少しく迷ふ處があつたが、遂に手塚先生送別紀念の寫眞を挿入する事にした、此寫眞には第一回第二回の卒業生諸君は居らぬが第三回の諸君と現在の三年生二年生の諸君とを含んで居る、一方送別の紀念になると同時に、又諸君は久しぶりで始めて舊知に對面する人もあるであらう。

〔會告〕

編輯部

- (一) 明治卅九年度に於て發行すべき本會報第七號及第八號種々の都合上本誌に於て兩號合併號として發行せり、會員諸君請ふ其意を諒せられん事を。
- (二) 次號即ち會報第九號は來七月發行の豫定なれば會員諸君は五月三十日迄に著つて論說雜錄通信會員動靜の諸欄に御投稿あらん事を希望す。
- (三) 會員特に卒業生諸君の動靜に就ては十分の報導をなさん事を期しながら、本誌に於ては材料不足其他種々の事情により所志の十、一を盡す事能はざるは誠に遺憾とする所にして切に會員諸君に謝する次第なり。

○會計部

- (一) 卒業生諸君の會費は最初一年壹圓の規定なりしも其後毎年五拾錢宛の事に改訂し、前號にも其趣きを廣告して已に諸君の或る部分よりは其定額によりて會費の御送金を受け居り候處に、昨三十九年九月中不肖不在中に或少数部の役員に於て此事情を知らざりし爲め、更に毎年金貳拾五錢の事に改定して其々諸君に御送金を請ふ手續をなし、内には已に會費御送附済の諸君にまで會費送金の請求を發したるなど、誠に會計部に統一を缺きたる結果、會費定額の三變を來し、隨て會費既納の諸君に對しては別項會費領收の報告の外何年度迄納入済の報告をなす事能はざるは遺憾の次第に候、何れ寒中休暇もすみ役員打揃ひたる上協議を遂げ詳細は改めて報告仕る可く候間右諒承下され度候。
- (二) 會費未納の諸君は、暫らく年定額金貳拾五錢の割合を以て此際至急御送金の程希望致し候。

(一月十二日 米山會計顧問)

○庶務部

本年一月我が校友會に對し年賀狀を寄せられたる諸君に對して、茲に謹で感謝の意を表す。

人地を遊歴したふりする子規
 内閣を評して薩摩に靈驗哉
 茶屋女座生の畫起しけり
 餘り長き畫起なりけり起されぬ
 もいへばあらう向いたる靈驗哉

一 子規 茶
 同 子規 茶
 外 子規 茶

御 詫 の 辭

本誌の刊行遅延の次第は僅かに記し得て下の三に候。第一、田嶋工場が悲惨なる運命の下に突如閉鎖したる事。第二、よみて御引受方を御詫したるも重ねての御命あり又更らに小生の手により誌未記名の工場に委嘱する事となる迄にも多数の時日を要せし事。第三、然して又も小生が一身上の事より自然いたく無責任にも放擲したる様の有様となり居りたる事。小生も各校等より印刷物の御引受をいたし候事數あり年あり候へ共斯の如きの大失体は未嘗有に候、くだしく徒らに辨解を勉むるに厚山紙末を汚す事故委細は申上げず候へ共、事々悉く齟齬したる是迄のあとを見ては我乍ら誠に呆然たるものあり候。とは云へ畢竟するに罪は兎に角全く小生に在り誠に申譯なきの極乍ら前號等に密かに幾多微力を致したるに免して只管御寛宥の程伏て願上奉り候。(印刷人丸山尙叩頭して申す)。

明治四十年七月二十日印刷
明治四十年八月廿五日發行

編輯兼發行人 長野縣西筑摩郡福島町 神村 律

印刷人 長野縣松本市八六五 丸山 尙

發行所 長野縣西筑摩郡福嶋町 諸式用達商會

印刷所 長野縣長野市西町 中村活版所

本誌本號實費一部郵稅共金廿五錢會員諸君にして余分に御入用の向は猶又會員以外にても御希望の方は信州松本市八六五信青年社へ御申込なされたく候

本誌五號は郵稅共金廿錢也